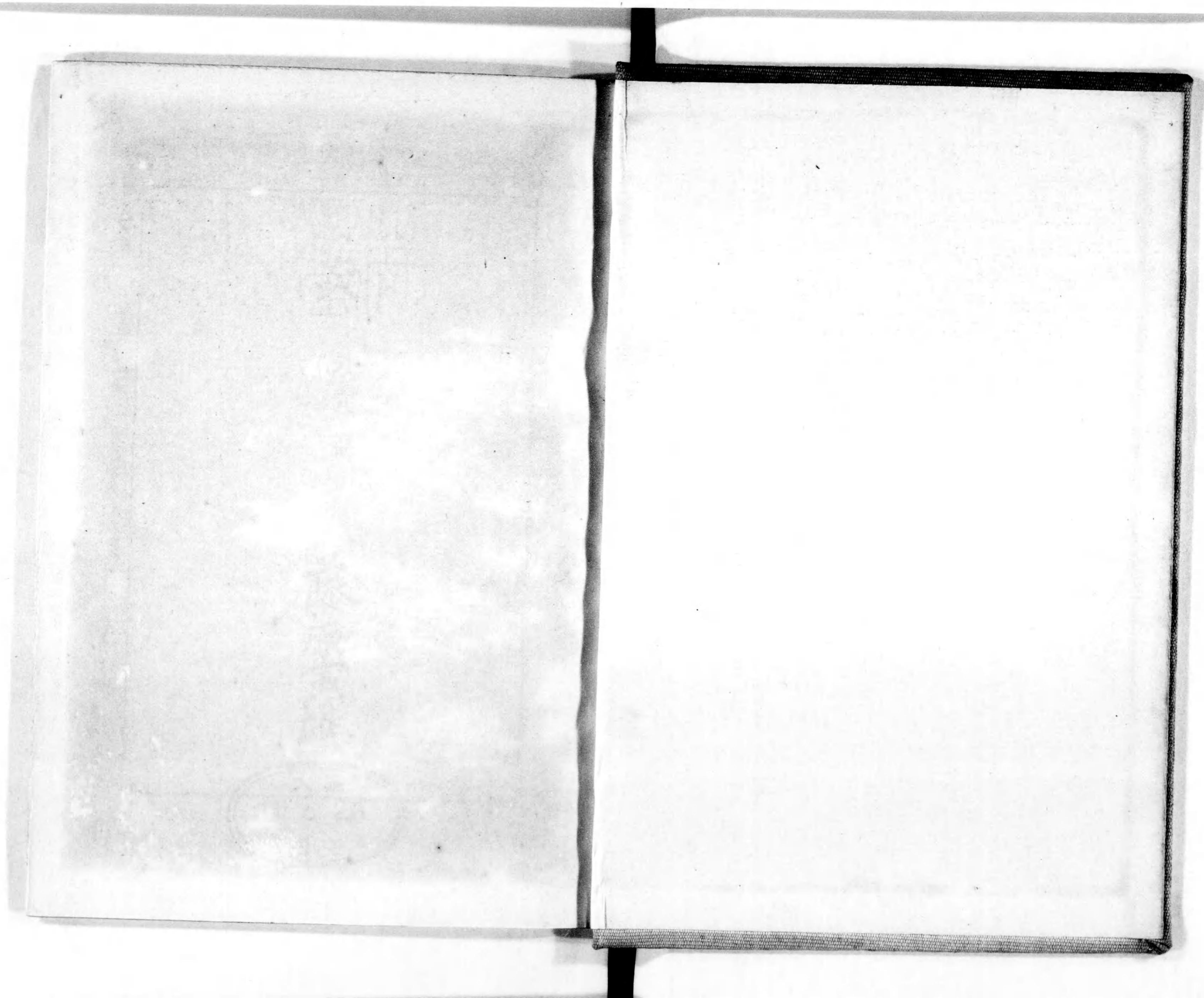


始





特106
383



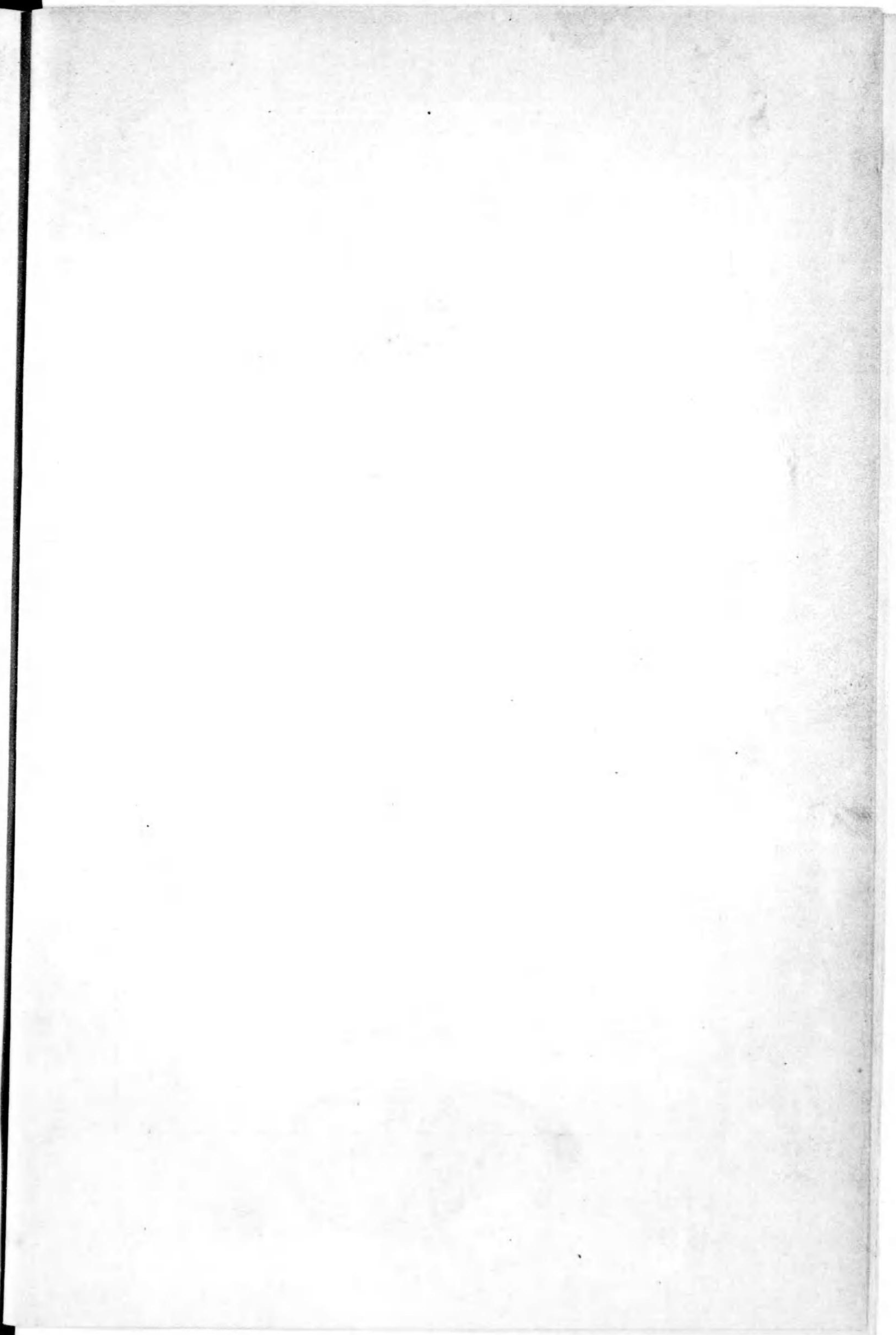
炎

外
八
篇

藤原寅雄

大正
11. 5. 25
内交





序言

或る日、友人松原傳吾君の紹介で、赤澤義人君が私の許へ訪ねて來られて、若くして亡くなられた同君の甥、藤原寅雄君の遺稿を示された。そして故人が、生前一方ならず私を慕つて居てくれたと云ふ話をされた。「此處を御覽下さい、あなたの手が書いてあります」さう云つて同君が開いて見せた故人の日記の或るページの上面は、不幸な少年がその短かい生涯の或る時期に於いて私の名前を書き留めて置いたのが、――その細く果敢ない筆の痕が、そこに私の眼の前にあつた。

私は、その時まで赤澤君とは一回の面識もなかつたし、況んやさう云ふいぢらしくも傷ましい一つの「命」が、短く美しく亡びた事は知る由もなかつた。しかし私は上述の如き因縁を以て、此の遺稿の爲めに一篇の序詞を草すべく、赤澤君の要請に應じた。世の中には寅雄君と同様に薄命な人は少くはあるまい。又寅雄君のやう

に熾烈な詩的熱情を抱きつゝ、それを伸ばすに暇なくして世を終へる者も多いであらう。人生に對し餘り冒險過ぎる者は、時としてさう云ふ不幸に陥る。が、その不幸な人の一人が、嘗て此の世で私の作物を讀んでくれ、その潑瀾たる若い心に私の心を感じてくれ、私の名前を遺稿の端々にとどめて置いてくれた事は、それは私に取つて「因縁」以上の何物かである。その人は嘗て私の知らない間に、私と同じ道を歩み、私と同じ命を生き、同じ魂の中に生きつつあつたのだ、——そして恐らく、今でも生きつつあるであらう、——私はその人の墓標の前を黙つて通り過ぎる事は出来ない。

「天若し彼れに更に『十年間の命を與へ』たらば」と、赤澤君はその緒言のうちに書いて居られる。故人の骨肉の一人として其の憾みは尤もであるが、しかし遺稿の中の戯曲「アーシヤ」の如きを讀めば、二十歳に充たずして夭折した此の少年は、既に靡ろげながらも美の核心を掴んで居たかのやうである。時勢に對する憤激と、

悠久を慕ふ憧れと、——此の二つのものは故人の心緒を死に至るまで緊張させて居たやうに思へる。その作物は幼稚ではあるが、そこに眞實な光がある限り、彼の短い生涯は彼に取つても大きな人生の流れに取つても、決して徒爾ではなかつたであらう。早世と云ふ事が、未だ熟し切らない少年の頭腦を、急に一時に高い所へ衝き揚げたのかも知れないが、しかし多くの人間はたとへ長生きをしたからと云つて、故人の到り得たやうな輝きに充ちた瞬間を知らずに死んでしまふのである。さうだとすれば英雄君は必ずしも不幸ではなかつた。古い言ひ習はしではあるけれども、矢張り才ある人の若死はそれ自身が一つの詩のやうに美しい。此の少年は彼の望みの通り美しい死を死んだではないか。「おゝ我が頭上に白雲の湧くよな。雲は付き、合ひ、合ひ離れ、いづこともなく碧の空に消えて行く。あゝ麗し」と、彼の言葉にあるその雲のやうに、麗はしい死を死んだではないか。——さう思つて遺族の方々は、それをせめてもの慰めとすべきである。

私は、静かな心持ちで筆を執りたいと願つてゐた爲めに、依頼を受けてからついで一月にもなつてしまつた。今、久し振りで閑寂な溪間の温泉へ来て、漸く此の稿を成す事が出来た。故人の墓前へ供へるには甚だ貧しい花束ではあるが、——此の一文を謹んで捧げる。

大正十一年四月廿八日夜

箱根堂ヶ島にて

谷崎潤一郎

緒言

『寅雄腦充血で昨夜九時死す。今夜假葬。』と云ふ電報が突然郷里から到着した時、私は『やつたんぢやないかなあ。』と思つた。妹に訃音を傳へると、彼女も亦同様の疑ひに充ちた口吻を漏らした。

吾々は思ひがけない寅雄の夭折を自殺ではないかと疑つたのである。

其後郷里との文通や往復で更に詳細に事情を知つて見ると、彼れの死は決して自殺ではなく、死因は矢張り年少時代にも稀には有るものであると云はれる腦充血であつたことが判つたが、それにしても、彼れの生前の生活は吾々をして其の死を自殺かと疑はせるほど非常な熱情の横溢したものであつた。彼れは幼少な頃罹病した慢性中耳炎に絶えず訶まれつゝ、或る時は肺患と誤診されて死を覺悟し、さうでない時にも常に何んとなき死の豫感に襲はれてゐたらしかつたが、一方青春の強烈な生

命は彼れをして益々苦悶せしめた。それには彼れのやうな特殊な素質の人物を古來苛酷に苦め抜いて來た杓子定規の學課と云ふやうなものもあり、新しい人には無意味な舊習の根強い拘束もあつたので、遂に其等の桎梏に堪へかねた時彼れは一時は郷里を捨て、東京にも出て見たが、さうした結果は近親なものからの誤解を一層増加してしまつた。

私も彼れを誤解した一人である。彼れが文藝に志して居ることを聞いた時、それは要するに青春時代の殆ど誰れにも有るやうな文學好きなどの一種に過ぎないだらうと思つた。寧ろ宿命の犠牲とも見るべき天才などに成ることを自ら進んで望むが如きは生涯の不幸を好んで招くものだと感じた。

然し一とたび燃え立つた炎は燃えるまで燃えねば到底熄まない。斯うした誤解や逆境にも拘らず故人の才能は頻りに煥發した。死するまで滾々として、殆ど絶え間なく、劇や詩や小説として發現してゐた。さうして没後其等の遺稿は閱讀しつゝあ

る私に一再ならず暗涙を催させた。

肉身のものゝ勞作であつたからであらうか。病軀や逆境と奮闘したことが健氣にも可憐であつたからであらうか。さうではないと私自身は確信して居る。寧ろところ／＼の幼稚さにも拘らず全遺稿を通じて否み難い精神力の閃きが私の胸を衝いたからだと解釋して居る。

遺稿を讀むに至つて私は始めて故人が意外にも人類の最も稀有な且つ貴重なもの、即ち藝術的天才、の持主であつたらしいことを發見した。さうして、故人自身も其の『死の脅威』中に記るして置いた通り、天若し彼れに更に『十年間の命を與へ』たらばとの憾みを深くした。

とにかく故人が何事を犠牲にしてもと熱愛してゐた文藝のことであるから、其の遺稿を印刷して生前の辱知諸君に贈るは故人を紀念するためには最も適當なことではなければならぬ。さうして故人自身も生前自資出版の希望を抱いてゐたから、今

同出版するに就いては約千部を印刷して、一般同好の諸士にも提供することに定めた。

口繪は逝ける年の前年二月十一日撮影した寫眞、扉の作者姓名は故人の筆蹟、また作品中の圈點は故人自身の付け置いたものである。

なほ故人の遺稿中には本書收むるもの、外左の諸稿も殘存して居る。

運命(幼き戀の思ひ出を書けるもの)三冊△中學校作文綴 一冊△日記(大正七年より十年まで)

四冊△死まで行く(自家の新舊兩思想衝突を寫せる脚本三場)一冊△天上の惡魔(戀愛の軌轢を想像して作れる脚本八場)一冊△斷片的隨筆 數十枚

然し之等は或は内密のものに屬し、或は未熟であり、或は稍や餘りに過激であると認められたから、本書には採らないこととした。

大正十一年二月

赤澤 義人(故人の叔父)

藤原寅雄年譜

明治三十五年九月十一日 長野縣南安曇郡烏川村に生る。

父は次太郎、母はりへ。

同 四十二年四月 同郡堀金學校に入學。

翌 年八月 中耳炎に罹る。漫性と成りて癒えず。

大正四年三月 同校を卒業。更に高等小學校一年を修業して、

同 五年四月 松本中學校に入校。

同 九年一月 肺患と誤診さる。

同 十年二月 同校を退學、東京に出でしも廳て歸郷し、爾後家に在り。

大正十年八月十四日 腦充血にて午後九時死す。享年十八年十一ヶ月。

目次

序言

緒言

藤原寅雄年譜

炎……………一

アーシヤ……………五一

死の脅威……………七二

ねすみ……………七七

角筈新町にて……………八一

叔母の出發……………八五

夏休の二日……………九三

我輩は机である……………一〇六

戀と死と生……………一一六

目次

炎

△△年の冬、△國の首府は恐ろしい争亂の巷と爲つた。

其の夜よ、殆んど想像すべからざる争亂の起つた其の夜自分は△△區の貧民窟の二階に熱に浮かされて寝てゐた。空は陰鬱な雲で占領されてゐた。星一つさへも光らなかつた。風がピーつと吹いて來て雨戸をがたつかせた。

熱に魘なされた自分は薄い、冷たい、汗臭い夜具の中にべつとりと汗をかいて寝てゐた。頭は鉛のやうに重くてぐんぐん唸つてゐた。そして頭は床の中へ沈んで行くやうに思はれた。障

子は破れて穴だらけで、屋根は極めて低く、眞黒く煤けてゐた。電

燈のない部屋の中は眞暗で、貧民窟に特有な、物の腐つたやうな臭氣が鼻を衝いてゐた。何うしても眠れなかつた。何者かに、悪魔に憑かれてゐるやうな不安に苦しめられた。

と思ふと自分の頭の眞上に大きな石でも吊り下げられてゐて、そいつが突然落ちて來て自分の頭

骨を粉碎するのではないかなどといふ想念に苦しめられて天井を見上げたりした。又は突然自分の寝てゐる此の下から火が吹き出しはしまいかと思つたりした。そして暫くころくとまどろむと目の前に大きな真黒い狂暴らしい蜘蛛が現はれて自分の身體の上を匍ひ廻つたと思ふと、うーんと唸つて目を醒ました。體はぐつしよりと汗で濡れてゐた。自分は眠る事が出来ないで、薄團の上に坐つてなぜこんなだらうかと考へた。實に不安であつた。それは地球の破滅の近づいたやうな不安であつた。時刻は丁度一時頃だらう。あたりは死んだやうな沈黙に沈んでゐた。

突然、自分は異様な物音を聞いた。それは何とも言へぬ、恐ろしい不安に満ちた聲であつた。濁つた空氣の中を何者が搔廻したやうでもあつた。どん。たしかに何者かの破裂する音であつた。一分、二分、三分、どん、今度は方向異ひの方であつた。どん。どん。どん。連続的に異つた方向で唸つた。急に死の都は搔き廻されたやうに騒ぎ出した。近所に戸を開ける音が聞えた。人は戸外に走り出た。

ばし／＼／＼、何者かの焼けるやうな音がしたと思ふと、突然、けたたましく警鐘は亂打された。突然人の叫び聲が聞えた。「何だこの様は、まるで火だ／＼、火の海だ」と、五十位の唸れ聲が

叫んだ。自分は容易ならぬ大事變が起つたと思つた。自分はぐらく／＼する頭を抱へて戸口まで手探りで匍ひ出した。だが、戸口を開けやうとする時絶大な疲労を感じた。自分はぐんにやりとして、戸を開ける氣力さへ無かつた。突然人々のけたたましい叫び聲と共に、硝子がほ／＼と赤く染まつた。自分は勇氣を出して戸を開けて見た。戸を開けるや否や、ぴーつと寒い北風は真赤に炎を室内に吹き込んだ。あつと自分は叫聲を上げた。

全く恐しい光景であつた。屋根を越して向ふの大きな建物は真赤な炎の團りと化してゐた。それが風に煽られて恰も赤龍ののたくるやうに匍ひ廻つて、附近の建物を端から嘗め盡してゐる。お、そして不思議なのは、そればかりではなく他に、西にも東にも起つたのである。絶大なる恐怖は今や帝都の空を包み、人々の前にはその生命財産を奪ふ狂暴なる悪魔が現れたのである。

突然、表を一隊の騎兵が通つた。その鐵砲はキラ／＼、鉛色に光つた。一隊の騎兵が嵐のやうに通

り過ぎる。と、不思議な恐ろしい沈黙が二三分の間續いた。

「騒動だ」

「もう、世も終だ」

かう云ふ込入つた叫聲の合間／＼に、濁つた鐵砲の音がした。自分は騒動と聞いた時に頭を重い鐵槌でぐわんと一つ毆られたやうに感じた。そして自分の意識は次第に不明瞭になつて來た。自分の頭の中からとろ／＼と溶け出したやうに感じた。自分の頭はもう他の何者かのもので、自分が支配する事の出来ないものだと感じた。自分は、唯だ自分の、しつかりと戸を握つてゐた自分の手が、急に何者かに押し退けられたやうに感じて自分の體が後へどつしりと倒れた事だけを記憶する。そして、自分はどろ／＼に濁つた或る物の中へでも沈んで行くやうに考へられた。そして、人々の叫聲が／＼遠方から囁くやうに耳に入つて來た。が、それから後は全く感覺を失つてしまつた。急に自分は堪へ難き頭痛と人々の叫聲との爲に呼び起された。自分は暫くの間何も分らなかつたが自分の戸口に倒れてゐるのに氣がついたと同時に、昨夜の出來事が夢のやうに頭に浮かんた。が自分は夢だらうと思つた。もうその時には、太陽の光が薄暗い室内に流れ込んでゐた。自分は、外の人々の叫聲を聞いた時、若しかすれば事實かも知れぬと思はれたので、先づ第一にその疑問を解かうと思つて起き上らうと頭を掻けると、ぎくんと頭の心に釘を打込まれたやうに痛かつた。自分は思はず、痛いと叫んで、頭を抱へて、暫くは堪らへてゐた。それから、柔く一つ寢返りを打つ

て、やうやうの事で起き上つて、窓から覗いて見た。あゝ自分の前に現はれた光景は。それは餘りに慘酷な、殺風景な、灰色した光景であつた。それは見るも怖しい火事と殺人と叫喚の光景であつた。さながら地獄の場面であつた。すぐ近くの家から向ふは一面の灰色の土塊と化し去つてゐたとして、その飽くまで狂暴を逞くした炎はまだ仆れた家屋をぶす／＼と、煙を立てつゝ、貪るやうに嘗めてゐた。焼け出された人々は往來に滿ち滿ちて、彼等は叫び唸りうごめいてゐた。そして大勢の負傷者は繃帯に捲かれて、その繃帯にはどす黒い腐つたやうな血がべつとりと滲んでゐた。往來に一人の女が死んでゐた。彼女は、火事で家から焼き出された時、騎兵の馬蹄にかけられたのである。その上を幾人もの人々に踏みつけられて、彼女の半身は泥の中へ箝まり込んでゐた。彼女の馬蹄にかけられた顔面はくしゃ／＼になつて、紫色に膨れ上つてゐた。

「を、暴徒！」

「××組の連中だ！」

かう人々の聲が怒鳴つた。

二三十名の警官に取圍まれた十四五名の××組の連中が通つた。彼等は皆その腕に標しの布を巻

いてゐたつた。その身體は、一面に負傷して、埃と砂で汚れてゐた。その様子は彼等の疲れ切つた目の色と共に昨夜の奮戦を語つてゐた。彼等の傷口は丸出しで、その赤黒く膨れた傷口には荒い繩が食い込んでゐた。彼等が群集の前を通つた時、その中の一人の男は「××組萬歳!!」と絶叫すると警官の数名はばらばらと彼を取圍んだ。そこに怖しき格闘が開かれて、警官の二三名はそこに打倒されたが、次の瞬間は彼れの地上に倒れたのを見た。警官の土足は彼れの頭上に落ちた。そして勝ち誇つた警官は彼れを縛めて、引き立て、行つた。

後にはその格闘の跡と驚怖に満ちた婦人の見送る顔と憤怒に燃えた老人の顔とがあつた。

俺は絶大なる感激と病苦とを感じ、強烈なる空腹に責められた。で、部屋の小隅に匍つて行つた。そこには、まだ食ひ残しのぱんの二三片があつた。自分はそれを貧り食つた。

空腹の満された時、病苦と睡眠とに襲はれて、我を忘れてそのまゝとろ／＼となつた。

死んだやうな睡眠から再び眼覺めた時、もう夜の影は戦闘の跡の都の空を灰色に包んでゐた。部屋の中は眞暗くて、我が疲れた視力は何物も識別出来ない程であつた。と、自分の階下に何者かの衣摺れの音を聞いた。俺はぞつととして自分の錯覺ぢやないか知らと耳を澄ました。それは靜な忍ぶ

やうな衣摺れの音であつた。何者にか氣がねするやうな、追手に追はれた兎のやうな音であつた。一分、二分、三分。そして、その音は梯子段の下で止つた、と同時に、何者かの梯子段を上つて來るのに氣がついた。俺は思はずそこにある短刀を握りしめた。一段、二段、そして三段目でその梯子段の軋る音が止つた。明かに逡巡してゐるらしく。また部屋の様子を注意深く探るらしかつた。俺は起きる事が出来ないで短刀の柄を割れる程握り詰めてゐた。

おい、何と長い時間であつたらう。長い、長い、無氣味な沈黙が破れてまたあの梯子段の四段目が軋り出した。ぎ／＼。ぎ／＼。自分はそこに一箇の怪物を見出した。それは黒い一箇の塊りであつた。じ／＼と見詰めると、それは一人の覆面の人間であつた。彼は部屋の隅に倒れてゐる俺に氣がつかなくつたらしかつた。彼は部屋の中央に立つた。丈の高い、肩巾の廣い男であつた。そしてその目は黒布で覆面された奥で光つてゐた。彼は暫く立つてゐた。が、自分はその時まである重大なものに氣がつかなくつた。自分の目は彼れの左の二の腕に巻いた布を見たのである。「あゝ、自分は思はずかう叫んだ時、その大きな黒面の男は殆んど弾ぢかれたやうにこちらを向いた。見つかつたなと自分は思つた。「何うでもなれ」と思つた。

彼は直ちに右手を上げた。そしてその手には小さい金属性の光澤が輝いた。自分は「ピストルだな」と思つた。彼は左の手を彼のかくしの中へ突込んだ。そしてその手が彼のかくしの中から出てこちらへ上ると同時にぴかりと強烈な光線が発射された。それは懐中電燈であつた。自分の顔は照らし出された。自分の心はぐるぐると巻上るやうに感じた。そして、もう駄目だと何者か云つた。自分は靜かに目を塞いで、あの右手の金属性の殺人器から弾丸の發射せられた時自分の命はないのだと思つた。自分は靜かに目をつぶつた。だが、暫くの間弾丸は發射されなかつた。彼は餘程永くの間ピストルを舉げたまゝ、こちらを向いて衝つ立つてゐた。

自分に抵抗力が無いと知ると彼は右手のピストルを靜かに降した。彼は一步二歩靜かに自分に近づいて來た。

彼はそこに靜かに坐つた。そして云つた。「何うしたのですか」それは以意に靜かな聲であつた。同情に富んだ聲であつた。自分は黙つてそこに横たはつてゐた。それは自分の身體の衰弱と精神の過勞とでもちよつとした抵抗も口さへ利けない位であつたのだ。彼は自分が黙つてゐると自分の額に手を當てた。自分はその時幽に目を開けて見ると、慥にあの光る左の眼の直ぐ下の、黒布との

境のあたりに、ちよつとした黒子のあるのに氣がついた。彼はその懐中から藥を出して自分に飲ませた。そして、ばんを自分の側にある壊れかゝつた戸棚に置いた。

彼は暫くの間靜かに坐つてゐるが、ふと何かに突き飛ばされたやうに立上つて聴き耳を立てた。明らかに、凡そ二三十人の劍の雜音が響いた。彼の目は異様に輝いた。そして、こちらをぐるりと向いた。明らかに彼は逃げ道を探してゐるらしかつた。自分は自分に優しくしてくれた此の男を何うかして救つてやりたいものであると思つた。自分は左の方の隅を指さした。そこには人の通れる位な破れ目があつて屋根裏に通つてゐるのだ。自分が指さすと彼はちよつと感謝の意を現はして上體を踞めると兎のやうにその穴の中へかくれてしまつた。

階下に騒がしい靴の音がすると、壊れかゝつた梯子段を荒々しく上つて來たのは警官であつた。彼等は懐中電燈を照しつゝつかくゝとこちらへ進んで來た。そして自分の寢てゐるのに氣がつくと注意深く進んで來た。

「誰かこの家へ隠れりやしないか」と彼は問いた。

自分は無言で。手を振り、頭を振つた。彼等は再びがやく音を立てつゝ出て行つた。

自分は再びあのだるい誘惑的な昏酔状態に落入つてしまった。

幾日、幾時間、自分は病床の人であつた。自分は彼の残して行つた薬とばんとで命を繋いだ。自分はその時人間でないやうな気がした。意識といふ意識は丸きり無くなつて、自分の體は空氣の中に溶け込んだやうに感じた。そして不思議な、神祕的な恍惚と快感が自分を誘惑した。自分はその魅惑せられたる肉體を思ふ様その中へぶち込んだ。自分は一週間の間は斯く過した。そして、やうく自分の存在を見出す事が出来た。自分の者でないやうに感ぜられた自分の手足も明らかに自分の所有物であるといふ意識に歸つた。自分はその夢のやうな事を考へ出した。それは實際夢であらうと思つた。自分の心の中の六割はたしかにあの事件が自分の熱より起つた悪夢であると思つた。自分が立つて歩き初める事の出来たのは十日目の朝である。自分は自分の記憶を氣づかつた。自分が表へ出て見た時そこは例日の如く家が立つてゐる少しの變りもないのだらう。そして、あの残酷な事件はたゞ一種の熱の悪魔に相違ない。何となればあの事件、あの騒動といふものは餘りに奇怪な事件であつたから。そこにはあの健實な國家が少しの、一寸の破れも都市に與へずに、家々を

見事に保護してゐるんだらうと思つた。自分は斯かる疑問にせかれて一秒も早くその疑問を解決しやうと戸外によろめき出た。

おい、それは眞實であつたのだ。想像すべからざる事實の跡なのだ。その破壊された家を見よ。その踐み破られた道路を見よ。然も、あゝ然も、遙か彼方の家屋は、市街は、たゞ灰色の曠野と化し去つてゐるのである。彼方に今まで壓制する如く巍然と聳えてゐた〇〇〇はその影さへも止めないのである。我はこの灰色の破壊せられた廢墟に立つて暫くの間呆然としてゐた。自分は暫くそこに衝つ立つたまゝ、「あい、それは事實だつた!!」と叫んだ。

そして自分は自分の袖を引つ張つた附近の小女にも氣がつかなかつた程であつた。自分はやうやう氣が附いて見ると、小女、それは附近の長屋に居る、不幸な小女である。お母は年中中風で親父は大酒飲の放蕩者、の子供である。

「おい、何うした。このさまは何だい、この焼け方は？ お前見て居たかい」
かう云ふと、彼女はその目をぴりつとさせて、眉毛を釣り上げて、さも恐怖に満ちた表情

で、

「恐しかつたわ。私見てるてよ。そりや戦だつてもあんなじやない位だつて人が云つたわ。鐵砲ぶつたり、家が焼けたり、人が殺れたりして、私顔へて見て居たは」

「お父さんや、お母さんは何うだ、無事か」

彼女は急にその語を止めた。そして、顔は妙に痙攣して歪んだと思ふと、何か云ひたけにその口はわな／＼と振へたが、言ふ事は出来ず、涙がはら／＼とその頬を傳つた。

「あの……………」

かう云つたが、それは今にも、咽喉を絞めつけられて殺されさうな人がよう／＼吐くやうな言葉であつた。そして彼女は両手を組み合せて、ぶる／＼と顛へた。自分は彼女の倒れさうな身體を支へて「何うしたんだ泣く事はない！」といふと、彼女は

「殺されちまつたのよ……………」。

やうやくかう云つて彼女は、繼續的にしゃくり出した。そして如何にも苦しさうであつた。

自分は急に同情の炎がむら／＼と起つた。自分は彼女を抱き締めてその髪の毛を撫でてやつた。

そして黙つて彼女の嘔り泣きの音を靜かに聞いてゐた。彼女の心臓はどき／＼と波打つて、その小さな胸が戦いてゐた。

（自分はこゝまで書いて破らうとした。「汝よ、汝は理想的なものを作り上げんとするなかれ」此の言葉でやうやく思ひ止まつた。）

長い間この戦きは續いた。彼女はまるつきり彼女の身心を自分の身に任せたやうにして泣いてゐた。自分はその戦きのある間は黙つて何とも云はなかつた。彼女は聽てその顔を上げた。その臉が赤く涙に濡れてゐた。彼女の顔、それはあの夕方にのみ咲く月見草を思はせる。その面長な豊かな瓜の如き輪廓、そして、その眼、彼女の顔の内でも最も人の心を引くものは彼女の眼であらう。その眼は青く澄んで、丁度冬の三日月を思はせる。青白い白眼の中に眞黒い、うるみ勝ちなその瞳、そしてその瞳の中には淋しい、他に憐みを乞ふやうな所がある。その眼で彼女が俯いて下の方からじつと見詰める時、人々はきつと彼女を忘るゝ事は出来まい。自分が最初に受けたあの印象と同じ印象を自分は味つた。そして今度のは彼女のその瞳にあのきらく／＼とした涙が宿つてゐたのである。

自分は彼女を強く抱きしめながら云つた。

「二人共か？」

「いえ母さんはまだ生きてゐます。でも駄目ですわ」

「何駄目だ？何んな様子だ。今何うしてゐる」

「昨夜苦しんだけれども、今はもう眠つてゐます。もう生気がありません。私誰かに頼まうと思つたんですけど誰も居ませんわ。何うか貴下来て下さい」

自分は無言のまま彼女の手を取つた。そして彼女の家へと走つて行つた。

入つた部屋は眞暗かつた。最初何ちらの方に病人が寝てゐるんだか見當がつかなくかつたが、暫くして低い、煤けた天井と土の落ちた壁とが目に入つた。そして、何も無い板の間の向ふの隅に襦袢を被つた一つの物體が横はつてゐた。彼女はその方へ走り寄つて

「母さん、母さん」と呼び起したが、返事は無かつた。自分がその方へ一歩二歩行きかけた時彼女は飛上つて叫んだ。

「死んだ、母ちゃんは死んだ、早く」

自分は飛んで行つた。

そこには四十四五の女が青白い顔をして横はつて居た、自分は氣絶したんじやあるまいかと思つて水を持つて来て浴びせて見たが駄目だつた。彼女は白い齒を食ひ絞つて死んでゐたつた。

少女は側に呆然と立つてゐたつた。彼女はもう泣かなかつた。自分は不幸の内に死んで行つた彼女の死體の前に立つてゐた。少女は、

「いゝわ、いゝわ、お父さんも、母さんも死んでしまつたわ。母さんは死んじまつた方がよかつたわ。こんな暗い部屋の中でお苦しみなされるよりは」彼女はこれだけ言つてその青白い顔を痙攣的にぶる／＼振はせてゐた。そして又言つた。

「いゝわ、私乞食をするわ。私は生きて行くわ。私だつて生きられるわ。母さんはかう仰しやつたわ。お前決して、何うして、暮して行かうかなんて心配するなつて。神様はよく私共の無くてならぬものを御存じだつて。たゞ私達は不正な事をしなけりやそれで良いのだつて」
自分は此の時かう叫んだ。

「さうだ、神様は無くてならぬ物を御存じだ。そして、おれは是れからお前を引取つてやるよ。お

前は私と一緒に暮しなさい」

彼女は青白い顔に見る／＼希望と幸福の色が紅にさした。そして彼女は自分の方を燃えるやうな目で見た。自分は彼女を抱き締めてやつた。

そして、その夕方自分は小女の母を自分の費用でお寺へ頼んで始末してやつた。

その翌日から彼女は自分の方へ来た。自分と彼女とは兄妹のやうにして暮した。

俺はその時分非道い貧乏をしてゐた。まるつきりの素寒貧で、自分の所有物としては夏冬各々一着の服と外套と破れかゝつた靴と帽子があるばかりであつた。それに本が少しばかりあつた。自分は或る時は二食又は一食で過した事もあつた。そんな時には外套を頭からすつほり被つて空腹をこらへる爲に睡眠に落ちてゐた。俺は一定の収入といふものは更に無かつた。その自分、自分は少量の有金があつたので、それで毎日夜出てパンを買ふ事に定めてゐた。自分はその有金ではパンの他何物をも買はなかつた。彼女が来てからも大して食料は増さなかつた。彼女は非常な寡食で、殆んど俺の半分程も食へなかつた。

俺のかういふ準備中にも忘れ兼ねる一事があつた。それは他でもない、あの夜に不意に出現して

我にピストルを向け、然して後薬とパンとを我に與へて忽焉として屋根裏から抜け出したあの覆面の怪人であつた。俺はあの人を見た時、何物とも會體の分らぬ疑問の煙の彼の身邊に立籠めてゐるのを直感したのであつた。俺は直感を貴ぶ。直感は神祕である。人間の推量を致す間のない瞬間に起る感覺、これぞ神の御心である。直感、自分は彼れの身邊に立籠めてゐる雲を見て彼れの身の上に少なからぬ興味を覺えた。自分は必ずや彼の身の上を知るに及んで一道の光明、ある光明の得られる事を豫感した。

彼女は連日の肉體の疲勞と精神の落膽の爲に終日死せるが如き睡眠に落入つてゐた。そして時々物の怪にでも憑かれたやうに夢中で唸つたり、鋭い叫聲を擧げて起上らうとしたりした。たまにはそのいら／＼したやうな目で俺の方をじつと見詰めてゐる事もあつた。

俺は何となく夜抜け出してぶらついたら、何か彼に就いて手懸でも得られはしないか、きつと得られると思つたので、其の夜は出懸やうと決心した。

食事の時に自分は彼女に言つた。

「何うだね、氣分は」

「今夜はよつほど良いのよ」彼女は言った。その青白い顔の何處かに幽な血潮の流れがあつた。
 「今夜はな。俺はちよつと用事があるから出懸けるが、一人で居なさい、淋しくないんだらう。尤も十二時頃には歸つて来るんだが」

「あなた、行く？ あゝ私ちよつと淋しいけれど、でも一人であるて可いわ。あなた錠さへかけて呉れ、ば私寝てるるばつかしよ」

食後自分はこつそり家を出た。

自分は外へ出るには出たが何處へ行くといふ目あても無かつた。自分は家を出るまでそれに氣附なかつた。外へ出さへすれば可い。そうすればもう萬事は良好なのだと思へられた。自分は切るやうな北風に外套の襟を立てながら考へて見た。何うしたら可いだらう。自分にはそれは分らなかつた。事實自分の仕事は漠然とした雲を掴むやうなものであつた。あの男が第一この都會に居るか居ないか、何處かへ引越してしまつたのかも分らないのであるのに、でも自分は漠然とした目的である事は考へたが、決してその男がこの都會に居ないといふ事は考へなかつた。必ず彼は此の都會の

何處にか潜伏してゐるのであらうと思つた。自分はたゞあてもなく町の暗い所を歩びながら歩いた自分は多くの種類の人々を見た。商人や、百姓や、車夫や、工夫や、工女や、醜業婦など、自分の前を通つて行く凡ての者に對して注意を拂つた。自分は體格の良い、外套を被つた男に對して幾度注意したか分らない。だが、それは凡て無効に歸した。自分は一時過にとゞ／＼何も得ずに家へ歸つた。自分が自分の門口へ立つた時、疲勞と睡眠慾とを感じた。

自分は彼女の睡眠を妨げる事を欲しなかつた。自分は靜かに戸を開けた。自分は殆ど息を殺して室内へ滑り込んだ。そして、南側の壁に浴つて進んだ。が、自分の幽な、靴の板に觸れる音がすると、彼女は殆どばねのやうにその半身を持上げた。その目には不思議なうるみと凄みとが電燈に照らされて光つた。自分ははつと思つた。そして病める彼女を慰安する爲めに勉めて柔な微笑を浮べてやつたが、彼女は笑はなかつた。たゞ極めて不自然な顔面筋肉の運動が起つたのみである。起つたといふよりも強いて起したと云ふ方がよからう。そしてそれは微笑と云ふよりは泣く顔に近かつた。自分は靜かに彼女の床に近よつて

「あなたは疲れてゐますね。まだ精神が回復しないのです。お眠なさい。お休なさい。私です。何

も心配する事はありません」と云ひながらその肩を摩つてやつた。彼女の身體には熱があつた。燃えるやうにその肩さへも暑かつた。彼女は俯いて啜り泣いた。それは幽なく悲哀、と云ふよりは一種の音楽に聞えるやうなものだつた。自分はその音波に快感を覺えた。その幽な音調はやがて二十分程後に止んだ。彼女は睡眠に落ちた。自分は彼女の側を立去つた。

其の次の夜も自分は捜しに出た。何の手懸りもなかつた。

かゝる状態が一週間以上も續いた。が自分は何等の手懸りさへも發見する事が出来なかつた。彼女の状態は非常に良好になつて、食事も進むやうになつて來た。彼女は自分に對するに感謝の眼と愛とを以つてした。そして自分が毎夜出掛るのを不思議がづた。「何うして貴方は毎晩何處へ出掛るの？」と云つた。

それから一週間ばかり後の事、それは秋の月が鎌のやうに物凄く光つてゐる夜の事であつた。自分等は何時もの通夕飯を濟ました。自分は今夜のやうな月夜には何かの手懸りもありさうなものだと家を出た。自分は、あの淋しい、死んだやうな都の露路を何處ともなくさまよつたが、いつもの通り何等の手懸りもなかつた。自分は大きな失望と憤怒と寂寞とを感じて我家に歸つた。泥臭い露

路を殆ど搜るやうにしてドアの側に立つた。が、こゝに不思議なる事件が起つたのであると云ふのは自分がそのドアに手を懸けた時、それは分けもなく開いたのである。自分は、はつとした。自分は、あゝしまつた、自分は忘れたのだと思つた。自分は、内部に於ける寂寞さを感じた。「おい」自分は彼女を呼んだ。けれども答はなかつた。「おい何うした」自分の聲は唯だ氣味悪くあたりの空氣に重苦しい振動を起させるばかりであつた。自分は、盜賊でも入りはしないかといきなり戸を開けて入つた。然し何者も居なかつた。彼女さへも居なかつた。おい、彼女は何處へ行つたのだ。自分は室内の隅から隅まで彼女を搜した。然し彼女の姿を認る事は出来なかつた。自分は彼女の外套でもありはしないかと思つて見たが、それも無かつた。して見ると彼女は自分の意志で外出したらしい。

此の寒い夜氣にあの身體で當たるといふ事は危険な事である。

自分は殆ど過度に心配して彼女を捜すべく出た。然し自分は彼女が如何なる方向に行つたか、何の用事があつたかは無論知らない。

自分は殆ど途方に暮れた。

萬一自分が出た後に彼女が来たらば何うしやうと思つた。自分は此處に待つてゐる事が最上の得策である事を知つた。自分はそこで戸口を出たり入つたりして、立ちつくしてゐた。もう儘に十二時過である。

自分は日中の活動過度のため強度の睡眠慾に襲はれた。自分は身振ひしたり、星を見上げたりしてそれを防いだ。自分はいつともなくとろくしたのが、ふつと寒い風の爲に目を覺まして時計を見ると一時過ぎであつた。ふと向ふの街角に一つの黑影が現はれた。それは少女の姿である。月は斜に西から薄くさしてゐた。刻一刻彼女の姿は近づいた。自分は彼女だと思ふと一散に飛んで行つて抱かうとすると、彼女はくると向ふを向いて電光のやうに俺の手の下を突き抜けつゝ室内に駆け込んで、彼女のベットのの上に仆れた。そして顔を隠してしくく泣き出した。俺は暫くあつ氣に取られて黙つて見てゐた。

俺が靜かに「何うした？何處へ一體行つて来た？」と聞いても彼女はたゞかぶりを振つて、よゝと泣いて一言も云はなかつた。私は彼女の額に手を當て、見ると、彼女は直に拂ひ退けたが、でも氷のやうに冷たかつた事は觸知された。自分は靜かに彼女を床の上に載せて、薄團を厚く着せてや

つた。そして、彼女の爲にそこに藥を出してやつた。それはきつとこの反動として強烈な發熱を豫期したからである。そして自分は寢てしまつた。

果して翌朝彼女の發熱は非常なもので、彼女は一日中殆ど甦され通した。

「兄さん、待つて、あら行つてしまふ」

彼女は切れくゝに絶えずこんな事を云つた。

一日一日に彼女の病熱も減いて来た。

自分は何うしてもあの男を見出し、彼れの何者であるかを突きとめなければならぬ。自分はその事に對しては絶大な興味があるんだ。自分は又一夜中町中をぶらついた。然し自分は自分の豫期に反して對大なる絶望を味つた。又も我が留守に彼女に對して大なる不思議があつた。自分が十二時頃歸つて来た時にはドアは固く、自分の閉めたと同じやうになつたが、自分が戸を開けて入つた時に、自分は彼女の座つてゐるのを見た。薄團も被むらさず寢卷のまゝじつと坐つてゐた。そしてその顔は眞青かつた。彼女の持前のヒステリックなその顔は妙に引き締つてゐた。「何うしたといふんだ。何があつたと言ふんだ」彼女はだまつてゐた。そして暫くして言つた。

「私、今妙な夢を見て眼が醒めたのよ。そしたら急に淋しくなつてよ。だつてたゞ一人ですもの」
 そう言つて笑つたが、それは苦痛を紛らす爲めの僞笑だといふ事は直ぐ分つた。

翌日彼女は又熱が出た。

そして時々苦しうに唸つたり、叫んだりした。

「兄さん、待つて」

こんな事をよく言つた。

自分は彼女のこの謔言に對して疑問を起した。

自分は彼女の生氣づいた時にかう云つた。

「お前は兄さんがあるの？」

と彼女の顔面には、つとした驚愕の色が現はれたが、それは僅かに半秒ばかりで消えてしまつた。

「いゝえ、私兄さんなんか無いよ。何うしてそんな事を聞くの？」

「いゝや何でも無いよ。でも、何だかあるやうな氣がするばかりさ」

自分は笑つて言つた。

又一週間の月日は過ぎ去つて、丁度それから八日目の夜、自分は外出した。もう氣候は寒かつた。今にもあの遠山の雪の領分がこゝにも及んで來る位であつた。自分は外套を着て出た。何だか自分は今夜に限つて何となく郊外へ出たくなつた。

そこは白樺が多かつた。月夜でほんやりした、そして冬の月によくある、瞭然さを以て、葉の落ちた枝を地上に映してゐた。自分はその月に懐かれた。自分の心は急にその月に對して一種の悲哀と懐かしみを感じた。それはごく／＼小さな少年時代に持つ感情の一つに似てゐた。自分はあの幽な微風の音を聞いた。飽く事なく白樺の梢を鳴らす風の聲、囁くやうなその聲を貪り聞いた。自分はその間に人間の言葉以外の何者かの言葉を聞き出さうと努めたのであつた。ふと自分は異様な物音を聞いた。忍ぶやうな人の足音を聞いた。落葉のがさ／＼と騒ぐのを聞いた。自分はふと躡まつて梢と梢の間から透かして見た。自分の瞳は直ぐに自分の程近い所に立つた一箇の怪物を認めた。それは男であつた。外套を着た、脊の高い男であつた。自分は息を殺してその様子を見守つてゐた。彼は四邊を見廻はして一體の白樺の木の根の土を掻き分けた。掘り上げられた黒い土の中に一箇の物品が、白く月に光つて見えた。彼はそれを懐中した。

と、その途端、又他の音響が静かな空気を動かした。それは他の方向から流れる二三の足音であった。彼はふとその音のする方を向くや否や大いに周章したるが如く、一目散にその林の中を逃げて行つた。と、二三の人はそれを知つたらしくピート一人が笛を吹くと、二三の人は又その怪人の後を追つかけた。それは警官であつた。彼等は殆ど自分の前方四五間の所を飛ぶやうにして走つたが、自分の存在に気がつかなくつた。自分はそれが何事であるかと思つた。が、自分の頭の中ではあの最初の男が氣にかゝつて仕方がなかつた。見てゐるその瞬間にはそうでもなかつたが、何となくその様子が自分の求めてゐる怪人に似てゐるらしく思はれてならなかつた。で、自分は又一目散にその後を追つたが、彼等の姿は遠い闇の彼方に隠れてしまつた。

自分が歸つたのは十二時少し過ぎてあつた。

自分が我が家のドアの側に立たうとしたその時に、自分は或る音に驚かされた。自分の部屋から強くドアを開けて飛出した一人の薄黒い怪人があつた。

おゝそれだ!! それだ!! それだ!!

林の中で見た男だ。自分はいきなり彼れに飛びついた。

が、彼は自分の手の下を潜り抜けて、一目散に飛出した。自分は彼れを泥棒で、自分の家へ今入つて、出て行くのだと思つた。自分は泥棒といきなり怒鳴りながら彼の後を追つた。その時室内に彼女の叫び聲が聞えた。自分はすぐ飛返つて室内へ飛込まうとしたその時に、彼女は突風のやうに室内から飛出して、自分と衝突した。彼女はそこに轉がりながら言つた。
「兄さんです。早く、早く追つて」

何、何だと自分は返す言葉もなくいきなり又怪人の後を追ひかけた。もうその時は怪人は一二町彼方を走つてゐた。自分は全力で彼れを追つた。自分は自慢の早足なので、忽ち彼れとの間隔が近づいた。彼はふとこちらを向いた。電燈の光がさつと當ると、その顔の左の眼の下に現れた、黒子!! を、あれだ!! 自分の求めてゐる男だ。

「あつ」

自分は思はず叫んだそのとたん石に頭をぶつたりと仆れた。

起上つた時、彼れの姿は、薄暗い露路の彼方に消えてしまつた。

自分はなほその暗を突進したが、二三丁行くと、自分の前には三方に分れる道が現はれた。

炎

自分は「ああ」とそこに坐つてしまつた。自分は彼れを見失なつた。

自分は彼女が氣に懸るので、飛返つて来て見た。

自分が飛返つた時に彼女はまだ仆れてゐた。

「起きなさい」

自分は言つたが彼女は返事がなかつた。彼女は氣絶してゐた。自女が彼女を抱き上げると、柔な彼女の土體がつくりと前に傾いた自分は彼女を寢臺まで運んでやつた。そして水を持つて来て彼女の額にかけてやつた。彼女の顔面筋肉が少しく微動しだした。稍や暫くして彼女は遠い夢路から甦つたやうにその目をぱつちりと開いた。と同時に彼女は飛び起きやうとして、がつたり前に仆れながら叫んだ。

「兄さんは、何うしたの」

自分は悶える彼女をしつかりと押へた。「靜かにく、又熱が出るよ」

かう云ふと彼女は聞かなかつた。

「いゝよ、私、熱なんか出たつて、死んだつていゝわ。兄さんは何うしたの」

自分は黙つてゐた。

すると彼女は哀願するやうな眼差で言つた。

「何處かへ行つてしまつたの？どうか教へて頂戴」

自分は靜かに言つた。

「あゝとうとう見失なつてしまつたよ」

すると彼女の顔は忽ち深い失望のために青くなつた。

「えい、とうく、あゝもう終りよ。もう凡ては終りだわ」

彼女はもう泣く事さへ出来なかつた。たゞ彼女の顔面がヒステリックにピク／＼微動した。彼女はたゞ呆然として前方を眺めてゐた。だが、その眼は大きくそして次第次第に美しい神祕になつて來た。その眼の何處に哀みがあるかといふ事すら分らないやうで、たゞ前方の憧憬にじつと見惚れてゐるやうであつた。

自分は黙つて彼女を見つめてゐた。

暫くの間口をきかなかつたが、それはその美を崩す事を怖れたからである。が、自分は十分ばかり

り後に口を開いた。

三〇

「一體お前は何うしたといふのだ。何うして隠してゐるのだ。お前が兄さんがあるといふ事は分つてゐる。何うしてそれを隠してゐるのだ。そして何うしてそんなに哀むのだ。毎晩お前は何處へ行つて来たといふのだ。自分はお前の爲には何でも味方になつてやるんだ。自分は何んな事があつても、たとへそれが自分の一身に禍をしても、自分はお前の爲には味方になつてやるのだ。それをお前は何うしたといふのだ。なぜ僕にその事を話して呉れないのか」

彼女は黙つて自分の方を見た。そして、じつと自分の顔を見てゐたが、頸を前にうな垂れて言つた。

「あゝ、もう駄目ですわ。もう遅いんです。ですけども私あなたに話しますわ。もう今といふ今は凡ての事を皆話してしまいますわ。えゝ、私は兄さんがあつたんです。ですけどももう兄さんではありません。でも兄さんですわ。だつて、兄さんは勘當されてゐるんですもの、私兄さんの事は黙つてゐました。だつて兄さんは、兄さんは今お尋ね者ですもの。それは嫌疑ですけども、で兄さんの事は私誰れにも一口も言はなかつたのですわ。兄さんの事を他人に話す事は一番兄さん

の爲になりませんわ。

兄さんは私の小さい時に、さう、私の丁度八つの時でしたわ、家を出ました。何ういふ理由かつて事は、私小さい時の事ですからよくは覚えてゐませんが、兄さんは夏の夜父さんの前で泣いて、何か頼に頼んだのよ。そのあけく父さんが怒つたもんだから、とうとう兄さんは何處かへ行つてしまつたわ。そして、もう、それからもう、七年間私兄さんを見なかつたんですわ。その兄さんが、あの最初、私がドアが開いてゐたので、ちよつと何心なく表の通で往來を見てゐると外套をま深に被つた一人の若い人が私の側を通つたのよ。二三歩通り抜けてからその人はつと立止つて、私の顔を穴のあく程じろく見つめて『お前はくに子じやないか』と云つたのよ。私は驚いてしまつて『あなたは誰なの？』と聞くと、その人はつかくと寄つて来て『やつぱりそうだったか。俺は兄だよ』とかう云ひながら私の手をしっかりと握つたので、私は急に懐かしくなつて『兄さん』といゝながら、しつかりとその外套の裾に縋りついたのよ。第一に兄さんは『父さんや母さんは何うだ、健康か』と聞いたので、私急に悲しくなつて思はずほりとしたわ。そしたら兄さんは夜だつたもんだから何も気がつかずに『丈夫か？』と又重ねて聞いたわ。で私

炎

三一

は「兄さん、父さんは病氣で失くなつたわ」と言ふと「何、父さんが？母さんは何うした」とせき込んで聞くから、「母さんも先達ての騒動の時に失くなつたわ」と言ふと、急に兄さんは私の肩を痛い程握つて「二人ともか」と云ふと、黙つてしまつたが、私の襟元から大粒な涙が流れ込んだので、聲は立てなかつたが、兄さんは泣いてゐるといふ事が分つたわ。すると暫くして兄さんはお前今何うしてゐると云ふから「こう云ふ人の厄介になつてゐる」と云ふと、その人に又禮を言つて呉れ、萬一私が死なずに一生過す事が出来たらその恩は返す積りだが、今自分はお前を見てやりたくても或る事件の嫌疑者だから、と云ふのよ。で私は兄さん、私の事は決して心配なさないやうに、私は私一人でやつて行きますと云つたのよ。

兄さんは臆てあたりを見廻して、向ふの方を見ながら軽く「ちよつ」と舌鼓を打つて、御覽もあすこは探偵が來てゐるよ。あいつは全く蛇のやうに執こい奴だ。ぢや、又來るよ。何うなるか分らないが、いやきつと來るよ。かう云ひながら私の止めるのも聞かずに何處かへ行つてしまつたわ。それがあの最初に熱の出たその前の事だよ。私は兄さんの行つた後、何處へ行くかそれが知り度くなつて再び室内へ取返して、外套を着て、兄さんの行つた方向をさまよい歩いたわ。

でも私は見つける事が出来なかつたので、殆ど苦みで夢中になつて、家へ歸つて來て見ると、もう貴方は來てゐたわ。私は貴方から聞かれたとき、よつ程打明けて一緒に見付け出して貰はうと思つたけれども、私は兄さんの、俺は今嫌疑者だと言つた言葉を思ひ出して、貴方に兄さんの事を言ふのは何となく心配になつて、何も言はなかつたのよ。それから二回目に兄さんの來たのは丁度それから二週間ばかり後の事よ。その時はドアに鍵が懸かつてゐたので、私はもう兄さんが來ても會ふ事が出来まいと思つてゐると、ふと私のとろく／＼してゐる枕許の窓を「コツ／＼」叩く者があつたので、はつとして目を醒まして萬一やと思つて見ると、やつぱりそれは兄さんだつたわ。そして私の差し伸べた手を握つて「何うだ、身體の工合は」と云つたので「私も大丈夫だわ」と云ふと、大變喜んで呉れたわ。そして、私に私の生活のためいくらかの金を呉れやうしただけれども、私「要らない」と言つて受取らなかつたわ。だつて兄さんは今あゝ云ふ身の上だから、何處へ行つたつて頼む者はお金ばかりだから。私は兄さんと二三分の間話したのよ。そして又兄さんは去つてしまつたわ。私は何だか又淋しくなつて、ちやんと寢臺の上に坐つて色々兄さんの事や、死んだ父母の事を考へたのよ。そして夜の更けるに従つて益々眼が冴えて色々な事

を考へてゐる内に、妙に悲しくなつて泣きたくなつて來たわ。その時貴方が歸へられたのよ。そしてその翌日は又身體を壊はして熱が出ちまつたわ。そして、貴方から、熱が引いてから「お前は兄さんがある。」と聞かれた時、私はつとしたわ。でも又私とくく嘘をついてしまつたのよ。彼女はかう云つて、ちよつと淋しい笑を浮べて息を繼いでから又話し出した。

「兄さんが最後に來たのは丁度今し方の事だわ。丁度今夜はドアは開いて居つたが、兄さんが來やうなんてことは夢にも思やしないわ。だつて、時間が時間ですもの。私は丁度一眠りして起きた所なのよ。すると何うでせう、いきなりドアがゴツ／＼と叩かれるから、私が返事をするですつとドアが開いて、兄さんが私の前に立つたわ。私は直ぐに何か起つたといふ事を知つたのよ。だつて兄さんは何んな事があつても決して亂れない性分なのに、あの兄さんの青白い顔には遽たゞしい色が浮んで、眼の光は輝いて、息さへ切らしてをるんだもの。私は「兄さん何うしたのです」

と云ふと、兄さんは

「もう、お別れだ。もう此所には居られなくなつた。身體を大事にしてな」

かう云ふんです。唐突ですもの、私驚いてしまつたわ。で「何うして、此所に居られないの」と聞くと、「もう一刻も遅れては捕へられる。警官はもう直ぐそこまで來てゐるんだらう。今自分は重要なものだけ取集めたが、もう、お前を一目見ればそれで澤山だ。さらば」と飛び出しかけるんですもの、私耐へ切れなくなつて、いきなり飛びついて外套に縋りつき

「何處へ行くの」

「何處つてそんな事は分らない。自分は遠い所へ行くのだ。そして一生自分はお前に會へぬかも知れない。これは日記だ。これが兄が最後にお前に残して行くものだ。それが形見だ」と言ひながら、そこへ日記帳を投げ出して、私の手を離して行かうとするから、

「何うか、ちよつと待つて下さい」と又縋りつくつと、

いきなり兄さんは私を振り飛ばして、突風のやうにドアから飛出したので、私は直ぐ兄さんと叫びながらそれを追ひかけやうとして飛出すと、誰れか出合頭に私に衝き當つたものがあつたのよ。それが貴方だつたわ。で私は貴方に頼んだのだわ。でももう駄目だわ。兄さんはもう何處かへ行つてしまつたわ。もう駄目……………」

彼女はこゝで息を繼いで深く哀悲に沈んだ。

自分は「おい、それでよく分つた。その人だ、俺の每晚捜した人も實は。あの騒動のあつた晩、自分は病氣で困つてゐたのを不意にあの人が出て来て助けて呉れたよ。それから、自分はおの人に對して疑問を起し、あの人の身の上に興味を持つて捜したのさ。それがお前の兄さんであつたとは。慥にさうだよ。自分はおの左の眼の下の黒子を覺えてゐるんだからなあ……」。

だがその日記と云ふのは何處にあるんだ」

彼女はふと氣づいたらしく、

「あ、私あまり色々あつたので、その事を忘れてゐたわ。これですよ」と彼女はそこの室のテーブルの下から一冊の日記帳を取り上げて見せた。

彼女はもう全身の疲労と失望の爲にそこにぐたりと仆れてしまつたので、自分は寢床に寢せて、強烈な發熱に對する豫防をしながら、その日記を開いて見た。

自分はその日記のために自分の今までの疑問、彼の怪人の身上にかゝる疑問の雲を晴らす事が出来たのである。

彼れの日記、彼れの前半生は次の如くである。

(私は今まで小さな心でありました。勉強せんとするが爲に私のこれを止めておくとは、何といふ意氣地なしでせう。何うしてこの私をこれを書かずに安心を得られませう。私はこれを書ければ、私の命に障ります。私はこれから徹底的に勉強もし書きもします。)

彼はごく舊式な家に生れた。それは家と云ふものが凡てのものゝ立脚點であり、凡てのものゝ標準であるやうな、時代の遺物、その代表的な家に生れた。そして、個人は家の奴隸であつた。凡ての名譽は家の名譽であつて、個人の名譽ではなかつた。彼等の生命は家の爲に捧げられた。そして又その下に女があつた。女は人間ではなかつた。男子は絶對の權利があつた。女子には學問の必要はないと認められた。彼女等の正當な自己辯明はそれは出過ぎであると認められた。女子が或る家に生れると父母はそれに食物を與へた。然し其れよりも必要な生命のパンは與へなかつた。與へる必要はないものと考へた。何故となれば生れた時から女子は人間でないと考へられたからである。

何事をも知らずに、無智な、哀れな等の女は馬牛のやう生長し、馬牛のやうに使役された。而して彼等の結婚、それは結婚などではなかつた。強制的な結合が如何にして結婚と云ひ得やう。それは家と家との結婚である。決して人間と人間との結婚ではなかつた。彼女等は檻の中に入れられて萬一抵抗する時はそれは許すことの出来ない親不幸となつた。何たる哀れな者よ、婦人!! 彼等が萬一人間ならば、苟も感情があり、感覺が有るならば、決して其のまゝには過されないのであらう。然しそれは公然の道徳である、それが最も正しい道である、と信じた家族制度の家に彼は生れた。最も深く彼れの幼時に印象を與へたのは男子の暴虐であつた。彼れの感じ易い心には早くも壓制者に對する反抗の炎が燃えた。

又一つちよつとした出来事ではあつたが彼の將來と面白い關係を有する一事件があつた。それは丁度彼の六七歳の頃であつた。警官が彼の家に遊びに来て、突然戯れに繩を取出して彼れの手を縛つた。幼年時代は何よりも警官が彼等の恐怖であつた。彼は吃驚して巡査の顔を仰いだが遽に泣き出した。巡査が彼れの小さな手を放すやいなや、恐しい速さで飛び出した彼の眞赤に興奮した顔は二三分後に再び戸口に現れた。彼は手に戸締棒を持つてゐた。そして、そいつを振上げて巡査を打

たうとした。父はそれを止めたが、容易に聞き入れなかつた。

彼は生れた當時非常に弱く、父母はその成長さへも疑問としてゐたが、然し年を取ると共に大きくなつた。農夫の父母は汗と土だらけになつて働いた。彼は幼少な間は比較的平和であつたけれども、彼れの小學校二年生の時中耳炎を患つた。彼れの中耳からは黄色い濃汁が流れ出した。父母は近所の醫者の所へ三四回連れて行つた。其の醫者は彼れの耳へ温湯を注ぎ込んだ。それは却つて彼れの病氣を悪くした。そしてそのまゝ捨て、置いた。濃汁は腐敗して惡臭を放つた。彼はその爲に苦んだ。

病魔は彼の一生を付き纏ふべき道伴れとなつた。慢性の中耳炎、彼れの肉體の一部は絶えず、腐敗と戦つた。そしてその犠牲となつた白血球は濃汁となつて流れ出した。おゝ其の苦痛、眞面目な死に對する觀念、其等は彼れの個性を築くのに最も重要な原因となつた。

彼れは自然の美を愛した。彼れの初恋は自然である。自然の偉大に感じ、自然の公平を彼は見た。彼は深山の猿の如き少年時代を送つた。

最も病に苦しめられた十四歳の時、彼れの兩耳は殆んど聽覺を失はうとした。それは風邪が原因

で、著濃症に罹り、それが引いて一方の耳に影響し、鼓膜はその空壓の平均を失つたのだ。然し彼の光榮を得んとする心、彼の自負心は彼れを喪心させなかつた。彼はたゞ天命に身を任せた。彼は美に憧れ、肉體と争闘した。彼は或時は凡ての者に反抗した。然しながら、凡ての者を愛した。中學時代は幾多の苦痛と戦つた。彼れの強い個性は強い趣味を呼び起し、彼れを或方面に向はせた。彼は或場合には強度の神経衰弱にもなつた。胃腸を害して、肺病であるかと自分を疑つたりした。そして、彼は失望した、いや彼は冷かな笑を浮かべた事もあつたが、それは結局神経病である事が分明になつた。

彼れは生命にも更へ難い其の希望、其れを彼れの唯一の權利だと思つた。それは決して無理ではないと思つた。何故となれば弟も多勢で彼等は家業を好んだ。彼れの學費は彼れに分ち與へらるべき分の十分の一でもなかつた。

世に凡そ青年の熱烈な志望を打こはす程其れほど残酷な事があらうか。彼れは如何にもしてそれを遂行しやうとした。然し、父母は斷然として許さなかつた。彼は悶々たる思ひに堪へず、遂に父母に懇願する爲に歸省した。

列車はごとくと音を立て、闇の中を走つた。

彼の青白い顔、その屹とした目立、そしていら／＼した眼光が向ふの硝子戸に映つた。彼の眼は刺すやうで、現在には無さそうであつた。實に彼は現在を見てはゐなかつた。彼は自分の爲すべき事、心配、焦ら立たしきで一杯だつた。だが、彼の神経は餘りに疲れてゐた。彼は目を塞いだ。そして彼れが最初父に送つた手紙の事を心に浮べた。それは大體かうであつた。

「父上様お變はありませんか。私は今折つて一つの頼みがあります。この頼みは私の一生の別れ道であります。この頼みだけは聞いて下さい。と云ふのは私に私の身を自由にさせて下さいといふのです。私に私の進路を選ばせて下さいといふのです。私に私の好きな、私の最も好んでゐる道を探らせて下さい。私は何んな事があつても行きたくありません。どうか一生の頼みとして許して下さい。私は長男として残つてゐる事は、勿論それは結構な事です。然しながら私に全財産を下さるといふのなら、私にその職業を選ばせて下さい。いえ、私は財産は要りません。たゞ私に自由と學費とを與へて下さい。」

「私は今までお父さんに黙つてゐた事を云ひます。私は小さい時分に耳を煩つた時中耳炎になつた

のが今でも治りません。平常にはさし障りはありませんが、全治しないと危険です。けれども此の邊の醫者では治す事は出来ないらしいのです。首府へでも行つて有名な醫者から見てもらへばしつかりした返答が得られると思ふのです。

「私は此の事はもうずつと前、昨年の夏頃から思ひ詰めてゐました。私はこのためには何んな苦痛でも堪らへて行かうと思ふのであります。私は假令んば半分苦學のやうな事をしてでも厭ひません。唯だお父さんは私を許して下さい。私はお父さんの心の中も察しますし、家の事も思ひます。けれども、一度人間に生れて來たものでも、私は此の身に纏ては死の來ることを思ひます。あゝ私は生きてゐる間だけです。私は決して死といふ事を忘れない限り、私の志望は翻へしません。何うか、何うか許して下さい。」

「私は誰が何と云つたつてその道へ進みます。私に安定を與へて下さらうと思ふなら、私の健康を回復して下さいと思ふなら、直ぐ許して下さい。私はそしたら必死になつて勉強します。幾度も云ひます、私の一生の分れ路ですから何うか許して下さい。さよなら。父上様」
汽車が眞暗な小驛で止まると、それから彼れは歩き出した。

何といふ狂暴な心なんだと彼は囁いた。おゝ何といふ苦痛なんだ。

死んだやうな暗い沈黙の中を彼は進んだ。眞黒い雲は彼の頭上を殆ど掩ひ隠すばかりに近く見えた。

眞闇い沈黙の中を一里半も進むと、もう眞黒な連山に出會つた。そこには二三十戸の田舎屋があつた。その中の一つが彼れの家なんだ。彼れが着いたのは十時過であつたらう。二三四の大きな犬がけたましく吠えついた。彼れは著生いと叱つて、獲物でも狙ふやうな目つきで屋内へ入つた。彼れは上つて黙つてゐた。母は「何うしたか」と云つて聞いた。彼れは「はい、ちよつと用事があつて」と云つてゐた。

暫くすると、父が糞を飼つて來たばかりだと言つて入つて來た。父はそこに坐つた。彼れは父の顔を見るときも黙つて居やうかと思つたが、然しとうく口を切つて、自分に財産を呉れる代りに學費を出して自由にして下さいと頼んだ。けれども父はお前は長男であるから駄目だと言つた。そして生ま欠をした。

彼れはその時分學校も厭やになつてゐた。煩悶の日が幾つも續いた。彼れは家出してしまはうと

も思つた。自分が父に對して學費なんかを要求する事が一體悪いんだ。自分が學費を貸りなかつたならば何も父に對して頭を下げる必要はないんだ。

四四

彼れは放浪の生活を思つた。かう云ふ人間なんだから家も無い。自分は個性と感情とを尊重する人間なんだ。自分は決して餘分を要求するのではない。然し他の人と同じだけの權利を要求するんだ。放浪の生活！彼れは無一物から叩き上げる事を思つた。乞食になつてもよい。いや、乞食になりたくないんだ。そして、其れ等の經驗に依つて個人を作つて見たいのだ。其時自分は始めて眞に個性の尊さを叫び得るだらう。放浪の生活。そこに眞に尊い所がある。實行せよ、實行せよ！と彼れは思ひ續けた。そして彼れの疲れた神経はその爲に過勞して、彼れは學校へ行く氣力も無くなつた。而も彼れの此の狂暴な感情は試験間ぎわに起つたので、彼は試験を五回も怠つた。その結果として平均點が十五點一時に下つた。

試験が何んだ。そんなものは問題ではない。成績が何んだ。そんなものは三文の値もないのだ。

彼れはそこに泣き仆れた。其れ迄積もり積つてゐた心の悩みは一時に爆發して、彼れは聲に叫んだ。「あゝ、これが最後だ。こんな家に居るものか。もうこゝへは歸つて來ない。さあ、それなら行きま

す」

と云ふや否や彼には何所へか飛び出した。家では百方手を廻してその行衛を探したが見つかる事か出来なかつた。

五ヶ年に亙る世界の大戦は延いて思想の動搖と不景氣の襲來となつた。富家は益々富み、貧人は益々貧くなつた。神聖なるべき勞働は卑められ、虚榮に走るものは金力の外に何者もなかつた。物は價は成金の惡習に依つて騰貴した。善良な勞働者は死ぬ程働いても、糧に追はれた。第一、その職業が無かつた。資本家は權威を振つた。正義のために自分の正しい生を望む人は遠慮なく誣られた。解職されて一家は路頭に迷つた。無學の人間が増加した。親は其の子の血を吸つた。子供を自己の生活の爲に賣つた。人間は狡猾で、小膽になつた。動物の様な人間が殖えた。幾萬といふ乞食の群は國內をうようよとろつき廻つた。眞に氣骨のある者は「今に見ろ」と叫んだ。

首都の公園には宿無者が多くなつた。彼等を種類分けにして見ると大體、乞食、不良青年、白痴の外に眞に生きんとして逆境に立つた人々もあつた。掠奪や、搔つ浚ひや、致傷罪や、強姦などが

炎

四五

行はれた。その中には少なからぬ不良少女も交つてゐた。多くの人間には一定の主義も定見も無かつた。

斯かる不安な状態の首都に、不思議な一怪人の姿が現はれた。それは一ヶ月に一度位であるが、きつと夜更けに一人物が、影の如く首都の一隅から現はれて、注意深く四邊を見廻して、又影の如く消えるのであつた。

彼れは何者であるか。其れは當時の大疑問であつた。時節柄緊張した警察は特に此の人物に注意を拂つた。

其警察署の一室には十二三人の警官が居た。噂はその不思議な人物である。

「何うもあの男は不思議な男ぢや。何が何だか會體が分からん」と一人の口髭のある男が言つた。すると直ぐ側から、目のキヨロリと光つた一人の巡査が口を出した。

「實際あの男は、不思議だ。何處から來るのか、又は何んな目的があるのか分らんが、たゞ深夜何處からか現はれて、町の中をあらゆるこちら歩き廻り、じつと注意深くあたりを見廻して、一軒一軒表札を窺つてゐるやうだ。そして、何かじつと中からの話聲を聞いてゐる。一昨夜だつたか、自

分が××通りを歩いてゐると薄暗い横小路に何だか黒いものか蠢いて居るから瞳を定めてよく見ると、それがあの男だつた。なほも様子を見て居ると一心にそこにある門の表札を見つめてゐるのだつた。

自分の考では直ぐ逮捕してやらうと思つて見て居ると、彼はその薄暗い中に消えてしまつた。をやつと思つて行つて見たときはもう遅かつた。彼れの姿は消えて居た。何處かに出口がなくつちや出る譯はないと思つて、調べて見ると、その横の方にやうやく一人が通れる位な小路があつた。こゝから逃げたなと思つてなほも進んで行くと、二廻りばかり曲つて大通へ出てしまつた。そこには彼の影もなかつた。實に残念な事をした」かう云つて、残念さうに唇を噛んだ。

丁度その時だ。一發、二發、銃聲が聞えた。人々が叫んで走つた。

「騒動だ!! 騒動だ!!」

鐵砲の音が激しくなつた。

警官は一時に外へ飛び出した。

外には火炎か起つてゐた。

丁度此の時刻に自分は第十區の貧民窟に熱病で寝てゐたのだ。

不思議なのは彼れか深夜貧民窟に入つて一軒／＼表札を見て歩いた事である。

彼れは生々として家出したのだが父母の愛は一日も忘れた事がなかつた。父母の愛、これ程力強いものはあるまい。彼れの心にはいつも悶えがあつた。幾年か彼れはその悶えを堪へ忍んで居たが耐へ切れなくなつて、一度は故郷へ歸つて見た。だがその時は一家は零落し、祖父母は死し、父母は唯だ一人の妹を連れて都に上つたといふ事を聞いた。

彼れはその爲に父母を捜さう／＼と、日夜心を碎いて居たのである。

その時分彼れは△△會の重要な位置を占めて居た。警官から睨まれる人物の一人であつた。人目を忍ぶ彼れは深夜一軒／＼覗き廻つたのである。彼れは過激ではなかつたから、一味の形勢不穩と成つた時極力鎮撫に努めたが、最早や如何とも仕方がなかつた。

警官の抜刀に對する一發のピストルによつて起つた騒動は一日中續き、警官は彼れの住處を十重二十重に非常線を張つた。彼れはその嚴重な監視の中を漸くの事で逃れた。その事あつてから二日目の晩に、丁度自分が睡眠中入つて來た覆面の男は即ち彼れであつたのだ。彼れは父母の安否を氣

づかつて警官の爲に追跡せられつゝも、父母を捜したのである。月の夜、彼れは妹に會つた。そして父母の死んだのを知つた。そして愈よ身邊が危くなつたので、何處ともなく逃亡したのである。

自分は彼れの行衛を想像して見た。そして側に眠つて居る彼女の顔を眺めた。彼女の顔は白蠟のやうで、その塞いだ目には柔な瞳か並んで居た。鼻は白く、高く、その唇は赤く、振り亂した黒髪の二筋三筋は頬から口もとへ線を引き、唇がきつとそれを嚙んで居つた。自分は靜かに微妙な藝術品を見る如く、靜かに見つめて居つた。

聽て彼女の口元がぶる／＼と振へると、その美しい瞳は靜に開いた。そして自分の見つめて居た視線と會ふと、微笑して、美しい聲で聞いた。

「日記帳讀んでしまつて？ お分りになつて？」

自分は、「あ、讀んだよ。だが兄さんは何處へ行つたんでせう？」

彼女はしばらく考へて居たが、

「さあ何處へ行つたんでせうか。シベリヤへでも行きはしないでせうか」と云つた。

「もう夜明になるであらう。

曉の風がヒタ／＼と窓を打つた。

(大正九年七月—同十年二月二十一日)

アーシヤ

第一場

人物

アーシヤ
悪魔

場面

四方はわく／＼たる霧に包まる。何物も見えず。或は渦巻き或は流る、赤い雲、紫の雲。雲の内より悪魔の聲——「もうあれの運命も定まつた。この世の中の生あるありとあらゆるものは皆死せよ。形あるものは皆破れよ。それ者共、その生の双葉を摘み取れよ。ゆめ／＼生長するなよ」

暫くして、聲止み、霧晴るれば、山現はれ、河現はれ、古城現はれ、晃々たる明月現はる。しばらく沈黙。月流れ、星流れ、雲流る。

アーシヤ

稍や暫くして古城の廣庭に幻の如きアーシャ現る。くつきりと色白く、長き髪の毛後に亂る。すらりとした姿勢、目には不思議の輝きあり。しばらく動かざりしがあたりを靜かに見廻す。

彼女はさもよろこばしげに獨言――

「お、美しき月、不幸なる我を慰むるはこの月なり。あの白き銀色の光を放てる山、この金波の川。お、我が頭上に白雲の湧くよな。雲は付き、合ひ、合ひ離れ、いづこともなく碧の空に消えて行く。あゝ麗し」

天の一角より悪魔の聲――「お、アーシャよ。その美しき雲の消え行くは、汝の生命の消ゆるをしめすものなり。汝の父の命は消えゆけり。姉の命は消えゆけり。汝の命は消えんとしつゝあり」

アーシャ聲する方を見返りて恐怖に満ちたる様子にて――「お、我を苦しめし悪魔よ。父と姉とを殺せし悪魔よ。まだ我が一夜の慰めを妨げんとするか。」

アーシャは両手を組み、地に伏して月を見上げつゝ言ふ。月は彼女の黒きひとみに宿るなり。

「あ、我が月よ。我を幸福者たらしめよ。我が肉體は今や亡びんとすなり。悪魔は我をさいなめ

り。病魔は我を苦しめり。あゝ我はいづこにか行かん。何かせん。父上は逝きましぬ。姉上は逝けり。を、我は何處にか行かん。何かせん。」

アーシャは稍や暫く石の如く祈る。月影は彼女の涙に映れり。涙に浮べり。見る、見る、アーシャの顔は喜びにかゝやけり。

「お、我が胸は喜びに躍るよな。我が頬はほてるよな。月は我父。星は我が姉。月は笑めり。父は笑めり。星は笑めり。姉は笑めり。月は教へぬ。父は教へぬ。我に進めと。星は教へぬ。姉は教へぬ。我に進めと。お、我は進まむ。我が肉體は亡びんとす。然れども我は進まむ。」

再び悪魔の聲――「退け。退け。我と我が肉體を亡せよ」

アーシャ靜かに――「お、悪魔よ言は言へ。我は退かず。我は行くなり。月よ、我に幸福を與へよ。星よ、我に幸福を與へよ。父よ、我に幸福を與へよ。姉よ、我に幸あらしめよ。お、我は進む。我は行くなり。傷つきたる肉體もて」

悪魔――「お、行け。行け。汝の肉體は亡びん。汝は死せん。」

アーシャ――「死。死。などか恐れん。たとへ屍を野山に晒すとも何ぞ厭はん。我は死まで行く。」

急ち、地鳴り、天振ひ、黒雲湧き来りてあたりを包めば、月隠れ。星隠れ。山隠れ。河隠れ。ヤー
シヤ隠れて何もなく、

雲の内より悪魔の聲とをほしく——「死せ。死せ。止まれよ。行かば、汝死せん。」
鋭きアーシヤの聲——「だまれ悪魔よ、我は死まで行く。」

幕

五四

第二場

人物

アーシヤ
若者の一團
伯父

場面

シベリアの高原の一小都會。あたりは春の景色なり。高臺の社は祭日らしく、美々しく飾りたる
男女あまた集ひ、ふざけ、さゝめき合ふ。

暫くの間はこれら男女の歡樂の場面なり。

稍や暫くして彼方の花蔭よりアーシヤ歩み来る。この男女の騒ぎを知らず顔に、下うつむき、し
づくと、胸には分らぬ思ひを抱くらしく、目はじつと靜に見えない何物かを視つむるが如く。

若者の一人——「やあ、これは美しいお嬢さん。さあどうぞ、こちらへ、踊りませんか」

アーシヤ氣つかぬ様子なり。矢張り目は目に見えないものを見つむるが如く。

他の酔ひし男よろくとよろめきつ——「え——つ。なんだい。この空のつん抜けるやうな大
揚氣に。その面あなんでい。不景氣に氣取つてるやあがるね——。さあさあこの氣取やさん。まあ
まあい、や。魚心あれば水心。この揚氣に野暮は云ひつこなし。こゝへ来て一緒にちよつとその柔
い手を貸してだんすでもしやうつてことにしやうやい」そばに近寄り来る。

これを聞いた他の三四人もぐるぐるとアーシヤを取り巻く。アーシヤやはり、氣づいてか、然ら
ずか、ちつと空を見つめてゐる。聽て靜かにこちらを向き、若者共を見つめる。

「こいつ何うかしてけつかる。まだ氣取つて、何か色男の事でも考へてゐるんだらう。しやうのね
い蓄生だ」

「おい、こつちへ来い。踊の仲間でもしろ」

アーシヤ

五五

アーシャ暫くじつと見つめてゐたが——「だれがそんな蛙みたやうな男の踊の仲間になんかなるものか」

男——「なんだと、蛙だと、太え阿魔だ。貴様近頃様子が變だと思や、他に色でも持つてるな。この不貞者め」

靜かなるアーシャにも似ず——「持つてるともさ。お前達みたやうなそんな品物とは月と鼈程ちがうわ。お前達見たやうなそんなへまな、氣まぐれのやうな、一夜作りのやうな、吹けば飛ぶやうな、しみつたれな戀はしないのよ。戀をするなら血の出るやうな、命がけの、炎のやうな戀をする」

男——「なんだと、人を馬鹿にしやあがる。月と鼈とは何んだ。それから戀から血が出たり、燃えたりする。こいつあ本氣じゃねいや。何うかしてゐるやあがるな」

アーシャうるさく思つたか、わざと大聲で笑ひ出す。

そして歌のやうな調子で云ふ。

「燃ゆる戀。血の出る戀。命がけの戀。誰れも知らない。誰にも分らない。戀人は天にゐる。星よ!!

月よ!! 我戀人よ」

一同あつ氣に取られてゐる。

男共——「やあこいつ、本者になりやがつた。氣狂ひだ。アーシャは氣が狂つた。」

「氣狂ひも、氣狂ひ色狂ひだ」

「あ、こん畜生のお蔭で、飲んだ酒も醒めて來た。こんな所に居なんで、他所へ坐遷りして、又新規蒔き直しに飲み直さうじゃないか」

一同——「贊成」

若者共去る。暫くアーシャ沈黙。若者共の後を見送りもせず。たそがれに、紫のたそがれに、あがれつゝあり。

いづこよりか一人の老人現れ來り、アーシャを見つけ、進みより——「おい、これ」

アーシャ氣づきて——「あら、伯父さんですか」

「うん、今日は祭だからちよつと來たんだか。もう暗くなるになぜそんな所に立つてるのだ。さあ行かう」と二三歩歩みながら「時に、來る道端で若者が大聲で騒いでゐるが、『アーシャ』といふ

名が聞えたので耳を澄ましてよく聞くと、お前の事を噂しおつた。だがな、伯父はさうは思はないお前は正氣だと思ふよ。まあいゝ。早く歸らう。こんな所には兎角人の口がうるさいから。ア一シヤ——「有難う、伯父さん。ですけれども私を、私の心を安ませやう、私のためにと思つて下さるなら、私をこのまゝにして置いて下さい。後生ですから。」

伯父——「お前何うかしてゐるのか。わしはお前を疑はないが、お前は時々妙な事を言ふ。そして妙な様子をしてゐる。伯父ながらこれはと思ふことがある。お前こんな林の中に夜が来るといふのに居て何うする。第一この寒いシベリヤでそんななりで一夜居たらそれこそ死んで仕舞は……。」

ア一シヤ——「私がこゝに立つてゐる内に夜が来ます。暗闇が私を取巻きます、あの懐かしい暗闇が。私はあの暗闇が懐かしくあります。涙が出ます。憧れて、憧れて、憧れぬきます。寒いシベリヤは私を取殺すかも知れません。でも、あのふつくらした暗闇に憧れて、憧れ死ぬなんて佳いじやありませんか。涙が出る程いゝじやありませんか。」

伯父さん私は死ぬ事は好きです。暗闇に憧れ死ぬなんて、分けてもです。あゝ美しき死よ。死の神よ、我に美しき死を與へよ!!」

伯父ア一シヤの様子を驚き顔に眺めるたりしが、「あゝかう云つて額に手を當て、両の目より涙を流し、

「あゝもう駄目だ。いかなれば、お前の一家はそのやうに不幸なのか。父は死し、お前の姉は死し杖とも柱とも頼むものはお前一人。そのお前が……」。あゝ、何か憑き物でもありはしないか。今の今までこの伯父は、まだそれでも人の噂も嘘と思ひるたりしに、今になつては……。あゝ、もう何うする事も出来ない。もう一度正氣に返つて、今の言葉を取り消すと云つて呉れ……。」ア一シヤは伯父の泣ける様子を見て、意外の態なりしが、袖かけで一滴の露を落す。露はくらやみに光りぬ。

ア一シヤ——「伯父さん、あのどうかお氣にさはつたらば許して下さい。私は決して悪いつもりで伯父さんに心配をかけやうと思つて云つたではありません。たゞ私は私の心を言つただけでありますのに、もしもお氣にさはりましたらば許して下さい。ですけど貴方は私にこの言葉を取り消せとおつしやいますが、これだけは何うしても出来ません。なぜならこの言葉は私の心であるからであります。」

伯父諦めたらしく――「あゝ、さうか。然しもう歸らうではないか、大分暗くなつて来たから」
アーシヤ――「有難う。ですけど伯父さん、お願ですからちよつと一足先きに行つて下さい。
すぐ後から行きますから」

伯父――「あゝさうか。それでは早く歸るやうに」

アーシヤ――「すぐ行きます」

伯父去る。アーシヤのみ残る。黄昏は暗闇へと變り行く。晝より夜へと變り行く。太陽より月へと變り行く。活動より沈黙へと變り行く。色彩より黒色へと變り行く。現實より想像へと變り行く。事實より詩的へと變り行く。

シベリヤの高原は今や暗闇のふくらみの中に靜かに包まれつゝあり。その高原に人は皆我家に歸りて一人も居らず。

アーシヤのみ一人居残りて靜かに暗闇にあこがれつゝあり。沈黙。

幕靜かに下る。

第三場

人物

アーシヤ
若者

場面

夜なり。

シベリアの雪の平原。

月は無限の雪の原を銀色に照しつゝあり。無限の荒野、銀色のシベリヤを一本の河うねくと流る。夜のアーシヤは幻の如く出で來り、河のほとりに立てり。

アーシヤ――「おい、今宵の月、今宵の景色は我を喜ばすよな。廣きシベリアの平原よ。月の光に照り輝くは木の上の霜か。銀の露か。又は金の露か」
暫くはアーシヤ一人のみなり。

一人の若者月光の内より現れ來り、あたりの景色にあくがれつゝ、アーシヤのひとりへさまよひ

アーシヤ

来る。

廣きくシベリアの高原をアーシヤと若者とはさまよひぬ。
月は照らすなり。星は照らすなり。

アーシヤ若者を見て靜かに言ふ。「貴郎は誰ですか」

若者はアーシヤに云ふ。「貴女は誰ですか」

アーシヤは云ふ。「私は夜のアーシヤです」

若者は云ふ。「私は夜の若者です」

アーシヤ。「月は美しくあります。そして私の父です」

若者。「私は月の子です」

若者。「小川の流れは清くあります。小川は北へ、北へと流れて氷の北極の海へと入ります。小川の水は私の乳です」

アーシヤ。「私はそれを飲んで育ちました。星は、あの恵み深くじつと私を見つめてゐる星は私の姉です」

若者。「私は星の弟です」

アーシヤ。「暗闇はなぜ黙つてゐるでせう」

若者。「おい、なつかしきあの灰色のふくらみよ」

しばらく沈黙、二人ともその暗闇を見つむ。

アーシヤ。「私は誤解されました、凡ての人に。私は月にあこがれて毎夜出ます。そしてたら人々は誤解しました。私は凡ての人々から誤解されました。私を知つて呉れるものは月と星とあの暗闇のみです」

若者。「私は誤解しません。私も同じ、誤解された身の上です」

アーシヤ。「私の肉體は弱いのです。そして滅びやうとしてゐます」

若者。「あゝ、我身は、明日にも分らないのは我身です」

アーシヤ。「私は生きたいのです。真に生きたいのです」

若者。「炎、炎、炎の生活は私の望む所です」

アーシヤ。「私は死にたいと人に言つた事があります。さうです。私は死にたいのです、もし

私が眞に生きる事が出来なかつたらば、私は生きたいのです。ですから死にたいのです。」

若者「私は美しい死を欲します。死ぬ事はなんでもありません。私は人に殺されない前に、精神的に殺される前に、自分から死にたいのです。」

アーシャ「私は熱したいのです。そして血のやうな戀をして見たいのです。血のやうな炎のやうな、命がけの、涙の出るやうな、死んでしまふやうな。」

若者「おい、貴女は私の言ひたい事を皆言つて呉れました。私が貴女ですか。貴女が私ですか。それとも唯だ一人ですか。」

アーシャ「さうです。唯一人です。精神上の一人です。精神上の一つのものが私達二人といふ形を借りたのです。」

若者「おい、私達は一人ですか。では貴女と私とは何うしても離れることの出来ない運命を持つて生れたものです。私達は決して離れられるものではありません。そして又決して離れません。」

● 兩人聲をそろして「私達は神に誓ひます。一生涯の一人であります。私達二人は一人であります。」

ます。」

アーシャ感激しつゝ「私は涙をもつて今宵の徴しにします。」

同じく若者も感激しつゝ「私の涙は今宵の徴しにふさはしいものであります。」

二人とも兩眼に露を宿す。二人の涙ははらくと零れ、二滴の涙は一滴となりて、シベリアの高原の夜霜に凍りつゝ玉となり。月に照らされて金に光り銀に光りぬ。

二人「私達若人の炎はこの限りなきシベリアの氷をも溶かす事が出来るであります。」

二人「月は私のこの誓ひをきつと護つて呉れるであります。」

月光は氷原を照らして、二人のまはりは白し。涯なき白き氷原はどこまでも、どこまでもと續きて馳つてその果ては灰色の暗闇へと消えてゆく。

二人「我々はあの暗闇に進みませう。荒い浮世は暗闇であります。色々の障得色々の悪魔は私共を苦しめるのでありませう。でも私達は怖れません。私達は熱で、炎で進みます。あらゆる力の内で熱程強いものはありません。」

天の一角より朗らかなる音楽の音響き来る、

六六
「行けよ。二人の若人よ。炎。炎。炎よ。武器よ。愛の炎。希望の熱は遮る總ての障得をば溶かす。」

アーシャ「おい、あの今聞えるあの音楽こそは父の聲でせう。姉の聲でせう。いざ、行く先きはきつと我々に幸福が待つてゐるのでありませう」

二人「いざ進みませう。あの暗闇へ」

二人共にその暗闇に突進す。

シベリヤの平原は静かにその灰色の沈黙を守りつゝあり。

第四場

人物

アーシャ
若者

場面

暗闇なり。たゞ暗闇なり。

吹雪なり。吹雪は暗闇の中を唸り走りぬ。縦横に荒れ狂ひぬ。吹雪の中をよろ／＼と進み行く二人あり。アーシャなり。若者なり。

暗闇の内より悪魔の唸り「當然来るべきものは汝等の上に来りぬ。それ者共その小さき二つの炎を吹き消せよ。世のなかのありとあらゆる炎といふ炎、生といふ生は滅びよ。この世の中を燃え残りの、灰色のむくろと成せよ。それ者共、その用意をしてをけよ。」

吹雪は益々唸りつ。進む二人の姿は見えつ隠れつ。暫くは吹雪なり。二人の苦闘なり。

アーシャは云ふ「吹雪になりました。進めるだけ進みませう」

若者「死ぬまで進みませう」

吹雪。吹雪。吹雪。苦闘。苦闘。苦闘。

アーシャ「私の呼吸は切れて來ました」

若者「私の足はもう進みません」

暗闇の空より悪魔の聲「來るべき死は汝等二つの炎の上に来りぬ」

アーシャ

アーシヤ「私はもう一步も進む事が出来ません」

若者「私の五體はしびれて來ました」

吹雪の唸り。

アーシヤ「私共の運命は定りました」

若者「私達は笑つて死にませう」

アーシヤ「でも私共は何を成したでせうか。自分といふものを此の世の中に記憶させるだけの何を成したでせうか」

若者「残念ながらありません」

アーシヤ「ありませんか。残念です」

再び天より悪魔の聲「汝等の死は五分後に來らんとす」

アーシヤ「私は死する事は厭はない。然し、何もせずに死ぬといふ事は残念です。死より苦痛です」

若者「私は生きたいのです。眞に生きたいのです」

秒。秒。秒。死は近づけり。

アーシヤ「私の肉體は減びます。私は此の世の中に何も成さずに死んで行くのでありませうか」

若者「残念です。私は眞に生きたくあります」

アーシヤ「もう凡てはおしまいです」

天の一角より悪魔の鋭き聲ひびく「死は來れり」

二人「残念です。救はれません」

見る／＼内に二人は相抱きそこに打倒る。花の顔は散り失せぬ。死せども眼は閉ぢず。天の一角を睨みて成すなきを恨む。

悪魔の聲す「小さき炎は消え失せたり。二人の生命は減びぬ。者共、次の用意をしてをけよ」
吹雪唸る。二輪の花は散りはてぬ。恨を含みて散り果てぬ。彼等は救はるる事能はざりしか。然

らず。天の一角に美しき音楽の起れるを聞け。

「救はれぬ。」

二つの魂は救はれぬ。

肉體は滅びぬ。炎は消えしも。

汝等は生きぬ、眞の心に。

死すまで燃えぬ、炎の如く。

炎は大なり、あらゆるものより。

朽ちず、朽ちず、汝等の志は。

生きぬ、生きぬ、汝等の魂は」

音楽の音は銀の糸の如く流るれば、天女之に和して歌ふ。歌の響は高くなりぬ。音楽の音近づけば、天女の歌近づけば、暗闇は消えぬ。吹雪は散りぬ。月は光りぬ。星は光りぬ。静かに二人の面

を照らせば、見開きし眼は閉ぢて、二輪の花はほゝえみつ。
シベリアの夜は明け行くなり。

幕靜かに下る。

(大正九年一月八日)

死の脅威

七二

大正九年一月二十七日。嗚呼。大正九年一月二十七日よ。喜びにもあれ悲みにもあれ記念すべき日なり。

我れの肺患を宣告せられし日なればなり。あゝ我は多くを言ふを得ず。……たゞ恨は盡きず。神よ！我はかく叫ぶ——我に今十年間の命を與へよ。然らば一大藝術家たらむ。我が前途多忙なる我身に餘りに早く死の神の下れる恨む……たゞ恨は盡きず。

二十年足らぬ我が若き命にあまりに早く死の神の下れるを悲しむ、……あゝ、短かゝりし過去十八年の夢よ。

然れども云ふを止めよ。徒らに悲み恨むを止めよ。我は退かざるなり。せめてもの願はただ一つ我が前途短き餘命を炎の如く熱叫して渡るなり。

我はあまりのまゝに書かん。眞を書かん。我が心の赤裸々を書かん。

我は何故に書く可きか？そは生きんが爲めのみ。我は、精神的に死するを好まざる也。我が死したる後、果して何が残るか。何人と雖も我を振り向かざらん。父母兄弟は我を記憶に止めをかるべし。然れどもその父母兄弟が五十年と云ふ短き命を了へて死したる後、あゝ、何者も残らざるなり。然して汝は死せん。精神上にも死せん。あゝ我は死を欲せず。精神上の死を欲せず。我は生きんとぞ思ふ。精神上に生きんとぞ思ふ。

我は大膽に、少しの偽なく、我が生活を書かんと思ふなり。そは何が爲ぞ。たゞ生きんが爲のみ。

日記抜書

(二月一日) 自分はこゝに十九の年を送り初めんとす。自分は生れて來た以上、この世の中に少くとも自分といふものを證明するに足る何物かを残さんとす。多くを言ふなかれ。自分は生か或は死なるを。死とも生とも分る事の出來ざる月日を送るべからず。自分は自分の死の目前に迫りつゝあるを自覺する。

死か生か。我はかゝる熱を持つて渡る。

七四

(二月二日) 自分は、自分は眞に生きざれば死するもの也。我は凡人たるを欲せず。我が生活の一片たりとも他人と區別する能ふものならざるべからず。

(二月三日) 自分はこれより行くべき死の道に行かざるべからず。汝、萬一、不成績を招かば死すべきなり。然り死するだけ生くべきなり。

(二月五日) 生か死か。お、死よ!! 死は今や我が身邊へさまよひ居るよな。なつかしい死よ! 我は戀人の如く汝を愛すなり。我は死せんとす。あ、我は死せんとす。然り、我望達せられずば。

生きむ。我は希望に生きむ。生、我は眞の生を愛す。死なむとせんだけ生きむとするなり。

一日も汝に眞の生なくばこの世に生くるも甲斐なし。汝!! 生きよ! 然らざれば死せよ!!

(二月十一日) いざ。學期試験も近づけり。進むべし。生くべし。然らざればたゞ死あるのみ。

(二月十三日) 今日我は、我が學課の出來ざるを悲しめり。我は劇藥の箱を取り上げぬ。あゝ白き美しき粉よ!! 我は微笑しぬ。

然れども人々よ。死を欲するだけ、それだけ我は生くるを欲するを知れ。我が生活が炎らしき

生活なればなる程、我は到る處に於て死を欲するなり。

(二月十四日) 病める我れよ。早こゝに半ヶ月の月日も過去のものとなり行きしを知れ。汝は自分の命を永しと思ふか。永からず、死は目前に迫れり。

一日の命、汝は一日にのみ強かれ。若き身は、明日にも知れぬ若き身はたゞ一日に強かれ。

自分もつとこの短き命を炎の如く燃えて行きたい。

(二月二十二日) 出征軍を送る。あの軍旗の我が目前過ぎにし時、我は叫びぬ、「おゝ、何故に戦はねばならぬか? 人間は何故に戦ねばならぬか」と。

おゝ、我過去の生活よ。汝はかく希望に満ちて居りしなり。然れども何故か到る所に於て死の言あり。我が運命を暗示するものならずや。

我は進む。強く。強く。

(二月二十九日) 友は我を愛す。我が友は死を以つて我を愛す。我は嬉し。萬一友が女なりしならば我は戀に落入りしならむ。

(二月三十日) 我は家へ歸りぬ。然れども我は、我が病の事を言はざりき。我が心のあるものは

それを喜ばざりしなり。

我は祖母の愛に泣けり。然れども我は荒々しく口答へしぬ。そは我が病の祖母に知れし時、我を愛し居れば愛し居る程、悲みの情深ければなり。我は老先き短き祖母の心の平和を破るを欲せざればなり。

(大正九年二月一日)

ねずみ

おねずみよ、

そんなにがたくしてくれるなよ。

あはれな、神経質な俺の頭を搔廻はしてくれるなよ。

俺はお前の騒ぎで目があいた。

おねずみよ、

許してくれよ、この私を。

なぜつて、俺は最初お前を殺さうとして、

そばの火箸を取上げたからだ。

だがねずみよ、

心配するなよ。

ねずみ

俺の心の嵐はもう止んだ。

俺はお前に幾らかの食物を與へてやらう。

だがねすみ君よ、

そんなにがたがた行儀が悪くて仕方がない。

ピーピー紙をさばいてくれるなよ。

俺はお前の友なんだ。

一

がたん、がたん、キユツ、キユツ、キユ、

穀倉住まひのいたづら鼠

糞は食ひ出す、俵は破る、

おまけにあたりは小便だらけ、

がたん、がたん、キユツ、キユツ、キユ、

二

チュ、チュ、チュ、チュ。

どうした、小鼠、なぜ泣くの？

私の父さん死んぢやつた。

毒の團子に中てられて、

腹をこはして、

死んぢやつた。

私やこれからどうしやう、

チュ、チュ、チュ、チュ。

三

掻き出せ、食ひ出せ、

俵を破れ。

今日は娘の誕生日、

嬉しい、祝へ、

ね　　ず　　み

踊り出せ。

がたん、がたん、キユツ、キユツ、キユー。

八〇

(年月日不明)

角筈新町にて

貧よ、自分の體をさいなんで呉れ。もつとひどく、それではまだ和か過ぎる。無職の人間は悲しいものだ。我には生活の安定がない。今朝、學友と別れた夢を見た。うれしい故郷の空、なつかしの故郷、そこには、父、母、妹、弟が居る。自分を愛してゐられる。世界中で一番あの人々は自分を愛して呉れるのだ。それを自分は振り拂つて飛出したのだ。あの人々は如何に悲しんで居られたであらう。それは親不孝である。自分には自分の理想がある。自分の叫びたいことがある。自分には一生涯の大望がある。自分には使命がある。神は自分が如何程の仕事をする可能性があるかをためてゐられるのだ。お前は父母に對して心配をかけてはすまぬ。毎日毎日、父母の幸福を祈つて居らねばならぬ。個性の自由を尊重せんとする我身だ。兄弟、父母に對する道もそこにあるのだ。何といふ境遇の激變であらう。昨日まではあのおばさんの家に、父母の近くに居たものを、今は見ず知らずのこの家で、この東京でばんの問題に苦しんでゐるのだ。今頃は學友は試験準備で忙しい

のであらう。明日から試験だもの。自分は就職の事で苦しんでゐる。友は試験で苦しんでゐるのだ。あゝ、苦しませて呉れ、苦しませて呉れ、自分の肉體のつゞくまで、自分の肉の裂けるまで、自分の骨の碎けるまで……もしその苦しみに自分が勝ち、その苦しみを自分の養分とし得たならば自分は大きな活動が出来るのだ。何もせく事はない、せく事は要らない。

お前は父母に對して愛せばよいのだ。一週間に一回位づゝは謝せばよいのだ。父母よ、不幸者と云つて下さい。私は大親不孝者です。そしてその罰で苦しんで居ります。でも、私として家へおめく歸れるものではありません。恥なんて、いはゆる間違つた恥なんて忘れてしまへ。お前は、その生命を投げ出せ。そしたらお前は生きるのだ。

何んな人でも自分の爲に生活し、自分の個人的目的を達するために利用してゐる。そして自分はしかくゝの行爲をする事も出来れば、或は爲ない事も出来ると思つてゐる。が、彼がその行爲を實行してしまふや否や、或瞬間に行れたるその行爲は最早や取り返すことの出来ないものとなり、歴史の所有物となり、その歴史の中で必然的な、そして豫定的な意義を持つやうになる。

何んな人にも二方面な生活がある。それはその生活の興味が抽象的であればあるだけ、より多くの自由な個人的生活と今一つは人間が餘儀なく、自分に命ぜられた法則を實行しなければならぬ必至的、群集的生活である。

人間は自分の爲には意識的に生活してゐるけれども歴史的、全人類的目的を達する爲には、無意識的の道具になる。一度行はれた行爲は取返しのつかないもので、その行爲は何時しか他の人々の無数の行爲と契合して一つの歴史的意義を帯びる。人間は自分の立つてゐる社會的地位が高いだけそれだけ多くの人に關係があり、他の人に對してより多くの權威を持ち、その各行爲の豫定的意義と必然的意義とが益々明瞭になる。

林檎は熟すると落ちる。何故落ちるのだらう？ 引力がそれを地上に引つける爲だらうか。壘が枯れた爲だらうか。太陽に乾かされた爲だらうか。重くなつたためだらうか。風が林檎を揺つた爲だ

らうか。それとも下に立つてゐる男の子がそれを食べたかと思つたのだらうか。それ等は決して唯一の原因ではない。これは色々な事情の契合である。それによつて凡ての生命ある有機的、必然的の事件が行はれるのである。植物學者、又はさういふ種類の人達が、細胞が分解するから林檎が落ちるのだと云ふのは樹の下に立つてゐた男の子が林檎が食べたいと思つて落ちるやうに祈つたから落ちたのだといふと同じく、正直な告白である。そのやうにナボレチンが莫斯科に行つたのは彼がそれを欲したからで、彼が減じたのはアレクサンドルが彼の滅亡を欲したからであると云ふのは百萬布度も堀り穿たれた山が落ちたのは最後の工夫が加へた最後の鶴嘴の打撃の爲であると云ふと同じく當つてゐるし、又間違つてもゐる。

歴史上に於ける所謂大人物なる者は事件に名稱を與へる貼紙であつて、大人物も貼紙と同じく事件そのものとは餘り深い關係を持つてゐないのである。

(大正十年二月十四日)

叔母の出發

「今日用があるていふから、來て呉れ」と義己さんから云はれた時、自分は何事であるかと思つたが、行つても可いし又何となく行きたくもあつたので來て見た。が初めの内は何の用だか分らなかつた。丁度その日は蠶の上る日で、もう残り少なくなつてゐたつた。大きな叔母が、あの病み上りの落窪んだ目とけつそりした頬とに幽な笑ひを浮べて、瓜を切つて呉れながら「T叔母が明日立つよ」と云はれた時に自分はあゝ成程と思つた。それで、自分を呼んで呉れたんだなと思つた。

祖父や祖母や叔父の小供やが大勢集つて茶を飲んだが、T叔母は仲々出て來なかつた。大きな叔母は、難産の後けつそりと瘠せて、その手は幽靈の手のやうな白ちやけた赤みを帯びてゐた。そして、自分のために色々勸めて呉れた。彼女の悴れた表情はつとめて微笑んで、自分に好感を與へたいと思つてゐるらしく感ずるのであつた。

茶の了る頃T叔母は顔を出した。そして微笑んだが、自分に向つてその微笑んだ顔全體をば見せ

ては呉れなかつた。自分はちらつと、そつちを見たのみであつた。彼女は自分の爲に菓子を持つて来て呉れた。

茶が了むとそれから又少しの間蓋の方をやつた。自分はあの敷居ぎはに立つた。

自分は話した。祖母は自分の決心を翻へすやうにと言つた。

「いくら上へ行つたつて同じ事だから行くなよ」

自分は、祖母の自分を思つて呉れるその心は、十分に分つてゐた。自分は祖母の心を見る事が出来る。けれども、祖母は自分の心は分るまいと思つた。自分は黙つてゐた。

「見ろ、叔父も上へばかり行きたがつたもんで、いまでは威張りたらし、威張れなくて困つてゐる。家に居れば兄様で大威張りだに」

大きな叔母は側から云つた。

「やらなけりや、苦學すると云やがるつて、寅雄の父が云つたよ」

自分は暫くしてかう云つた、

「自分の行く先は、だれが何て云つても分つてゐる。自分は父に怒られた方がまだ可い。が、靜に

云はれた時の方がやりすらい」かう云つた時に自分で思つた、自分の此の言葉を了解して呉れるものは、T叔母のみであらうと。祖母は此んな事を云つた。

「若い者はむちやな事を云つて困る」

自分等の間には暫くの間無言が続いた。

自分は暫くしてかう云つた。

「己らあ戦争に行つたら鐵砲を上に向けて打つてやる」

かう云ふと、T叔母だけは嬉さうに笑つて呉れた。

祖母はかう云つた「外の人にあたりやいけないでか」

「え、自分が中つたのならそれで可いけれども。それから捕虜になりや靜かになるし」
暫くして仕事がつつた。

T叔母は自分に荷物を縛りに手傳ひに文庫倉まで來れ呉れと云つた。

自分は彼女の後に續いた。

自分は若い女の脊後の曲線を見た。そして隨いて行つた。文庫倉の中は薄暗かつた。そこに荷物が

二つ大きな行季に入れられてあつた。

叔母は今年二十五歳である。愈々明日は東京へ許嫁の人の許へ行くのである。彼女は靜かに荷をしらへをしてゐた。そして自分に、この繩を引き張つて呉れと云つた。それを引つ張つてやつた。行季には繩を十文字に掛けた。

自分は靜かに言つた。「叔母さん、いつかへる？」

彼女は又靜かにくゞ坐つた。そして寂しさうに云つた。「來月歸らうかと思つてゐるが、場合によつてはいつ歸れるか分らない」

自分等は又繩を縛り初めた。仕度がすんで彼女は云つた。

「今度行つたら手紙を呉れ、叔母も寄こすから」

自分はその重々しいうつたりとした倉から外へ其た。そして外の空氣を味つたのであつた。

夜になつた。叔母は言つた「自分も前からそんな色々の、父の昔氣質のためにさんざ泣いて見たりして見たが」

自分は感傷的な調子でかう云つた、

「自分の行く方はもう定つてゐる。凡ては定つてゐるのだ。自分はもう他力を頼むまい。自分を除く何人も我心を自由にする事は出来ない。そして自分だけそれが出来る。

自分は不幸だとは思ふまい。自分より不幸な者が何の位あるか分らない。………そうだ。實際

自分は幸福過ぎるのだ。自分は土方にでもなつて、それから叩き上げて見たい」

「眞面目にやつたら可いよ」彼女はかう云つて呉れた。自分は裸體になつ湯に入つた。

朝になつた。自分は彼女の行季を擔いだ。

彼女は他の大きなのを乳母車にのせて押して行つた。

「重いだらう」と叔母は云ふ。

「いいえ、少しも」

「いいわ、おばの荷物を擔いだといふ事も又何か後で思はれて」

泥の中へ入らうとした時や、石のためにあの小さな車の動かなくなつた時には二人で顔を見合せて笑ふのであつた。

人々は、云ひ合せたように自分等をじつと見送つた。

「まだ學校の子供が居ないから可いよ。子供が有りや、集つて車なんか動かないよ。それに、色々をきいて、分けてもこの學校の生徒は質が悪いから」

自分は、自分の叔母の美しいのを自慢に思つた。そして二人で歩いて、叔母を人々がじつと注視する時、自分にはつこりと微笑んで云ひ知れない嬉しさと誇りとを感ずるのであつた。

道ばたの眞黒い小女がじつと叔母を見送り、そして自分を見つめる時、自分は勝利の心で湧くのであつた。

停車場に暫く居ると大勢の人々が來た。女學生も見えた。だれもだれも皆自分等を見た、羨しうに。荷物を二人で擔つて持つて行く時、自分の押し方が激しかつたので、彼女は木と荷物との間に手を挟んだ。そして叫んだ。

「あゝ痛い、あゝ」

「いや、ちつたあ痛くつたつて可いや」と自分は笑つて云つた。

雨がしとくと降つてゐた。自分は黙つた。汽車の進むにつれて、靜に、黙つた。腹具合の悪か

つたのも原因してゐた。いつたい、北松本で自分は降りる筈であつたのだが、時間があるので南松本まで乗る事にした。

女學生達は皆じつとこちらを向いて、自分の顔をじろく眺めて降りた。仲にはちよつと笑つて降りるのもあつた。

彼等は去つた。汽車は又動き出した。

松本、自分等はそこで降りた。もう四五分で別れねばならぬかと思つたと悲しかつた。そして、その別れるといふ事がもう恰も神の造つた障壁のやうなもので、我々の力では何うにも出来ないといふやうに思はれるのであつた。

叔母は云つた。「聞いて見ると、寅雄ももうそろ／＼本も讀めるやうになつたらしいから、家によいを取つて置いたからあれを上る」

本屋へ行つて叔母は「何れでもこの内から良いのをお取り」と云つた。自分は迷つた。そしてそれらを手に取つて見た。

「何れが一番良い？」自分が困つた様子をして聞くと叔母は笑つた。シエトクスピヤのオセロを取

つて「これが可い？」と自分が聞くと、叔母は頷いて見せた。

「これは、新宅の兄さんが欲しいと云つてたから持つて行つて下さい」と云ひながら。

彼女はにつこりと笑ひながら番頭の方を見て「もう一冊取つてもようござんせう」と云つた。番頭は勿論快諾した。

別れは来た。別れは悲哀である。静かに黙つた。彼女も黙つた。自分は帽子に手をかけて「それでは、さよなら」と云ひながらきつと叔母の目に注視した。伯母もじつと自分を見て呉れた。

「それではさよなら」

自分はわざと男らしく歩みを伸ばして歩いた。曲り角で振り返つて見ると、叔母は、あのしなやかな體を曲けて、手を伸ばして遠方の雑誌を取らうとしてゐた。

(大正九年六月下旬)

夏休の二日

「新盆だから行つて来い」と父から言はれて家を出たのは八月十一日の午後であつた。新盆のあつたのは家から二里半程北の親戚であつた。昨年の春流行性感昌の流行つた時、来て間もないお嫁さんは三つになる子を残して失くなつてしまつたのである。で丁度今年がその新盆に的る。

今まで二十日近くも毎日續いた雷雨の後は又いきれ方が激しかつた。太陽はかん／＼と照つて、黒い入道雲の團りは西山の方へ押しつけられて、でもいつか間があつたらばと身がまへてゐるやうでもあつた。小さな虫などは遠慮なく焼殺されてしまつた。僕は汗ばんだ身體に袂を浴びながら泥の臭ひの高い田甫道を停車場の方へ歩んだ。空には幾つかの雲達が出来たり、消へたり、犬になつたり、獅子になつたり、色々な物に形を變へて遊んでゐた。汗はぢく／＼と滲み出て、それが脇の下に溜つて歩く度毎に何とも言へず不快であつた。

僕が停車場のベンチに腰を掛けた時には早や涼しかつた。そして雲の一片は黒く廣がつて、今に

も泣き出しさうであつた。汽車の来るまでにはまだ二三十分の間があつた。で、その間待たなければならなかつた。停車場のすぐ前には料理屋があつた。艶かしい三味の音が聞へて来た。又二三の厚く白粉をべつたり塗つた女も見えた。前方の空気は全くそれらの爲に汚されてゐた。後は之に對して全く反對の景色であつた。家といふ家は全くなかつた。唯一軒、避病院だといふのが有るつきり、他は全く青といふ一字に盡きてゐた。その青い波は遙か彼方に聳ゆる有明山まで續いてゐた。限りなく續く青い波は桑島である。幾千萬、幾千億とも數へる事の出来ない一寸平方位なちちほけな桑の葉の集りであつた。そこは自然であつた。まだその空気は穢されてはゐなかつた。實に美しいこの景色は今まで幾千人の人々の目を喜ばしたか知れない。どの位人物を作つたか知れない。然しながらこの美しい自然はこれから後果して幾年後まで續くであらう。これを思ふと情なくなる。今の向きでは恐らく五六十年の後にはこの景色は全く破壊せられるであらう。こんなことを思つてゐたその時、突然後方に怒鳴る聲が起つた。はつとして振向くと、そこには人生の醜い場面が現れた。客が酔つて何か怒つてゐるのである。開け放された障子から能くその中を見る事が出来た。怒鳴つてゐるのは四十恰好の髯のある男で、その聲がとぎれ／＼に聞えて来る。

「……………歌も歌はない藝者なんぞを抱へやがつて……………」

話の様子は分らないが、何か藝者の事でお神さんに小言を言つてゐるらしかつた。

洒々と口答へをする藝者の聲も時々聞えた。暫くして客は鎮まつたやうだ。そして今度は三味に合はせて踊つてゐるらしかつた。物價が高いと言つて食ふに困る細民がある時に、あんなつまらない遊びをして大盡風を吹かせる馬鹿者もある。況してあれは分別盛りのよい年頃ではないか。彼にも又妻子もあるだらう。汝が如き奴が居る以上、我社會はまだ理想を實現する事が出来ないのだ。汽車が来た。切符を買つたのは僕一人であつた。

汽車の中はがらんとすいて、二三人の客があつたばかりで、至極香氣であつた。僕は窓から首を出して西の方を眺めた。そこには家はなかつた。青い桑の續きである。避病院が如何にも世を避けるやうに立つてゐた。そしてそこには一人の女の人が歩いてゐるのが目に入つた。病人の見舞にでも行くであらう。あの人は心配してゐるのだ。何の歡樂もないのだ。あゝして悶えてゐる身内の人の安否を氣づかつてゐるのだ。汽車の中には青い顔をした女の人がゐた。その人は別けても青く陰氣であつた。何か病氣してゐるらしい。世の中は丸で戦ひである。生ある者と生ある者との噛み合

ひである。弱い者はやられる。これは浮世の定理である。とはいへあまりに情けない光景ではないか。汽車は間断なく走つてゐた。そしてその度毎に絶えず小さな、目に見えないやうな、空氣中に遊んでゐる虫を突飛ばしたり、叩き潰したりしてゐた。目に見えない所にも生の物凄い戦は演じられてゐる。

けれども表面は平和らしかった。田畑に人々は香氣さうに働いてゐた。風はそよ／＼吹いて来て日は暮れて来た。暫くして汽車は止まつた。今一停車場行けば親類は直ぐ側だが、この汽車はこゝで停る。次の發車までは未だ二時間近くある。で僕は歩いて行く事に定めた。

自分はゆつくり歩いた。往來の人々はそんなに多くなかつた。兩側は田であつた。そして所々に名産の鯉池があつた。油のやうに静まつた池の中から時々波紋が起つた。ちよつとしたちつほけな水の輪は次第に擴がつて、しまひにはとう／＼岸に吸込まれてしまつた。岸の側には葡萄があつた。まだ熟さない青い房が早く秋になれよ顔でぶるさがつてゐた。西の方、その向ふは青い平地の終る所から急に高くなつて、見上げる峯に白雲を乗せてゐるのは有明山である。空氣は何となく清淨らしかつた。然し時々蛹の匂がブン／＼して来た。ガウ／＼と不調和な音を立て、行き過ぎる運送の

通つた後は、白い土煙で一杯だつた。僕はそんな時には折角の愉快さを害せられたが、然し夕方の島新田の景色は佳いと思つた。

親戚の家へ着いたのは丁度田畑に出てゐる農夫達が家へ歸つて、夕飯の仕度をする頃であつた。最初出迎へて呉れたのは輝雄さん及び文雄兄であつた。F兄は失くなつた嫁さんの良人である。何だか知らぬが悴れてゐるやうに見えて、自分の心から強い同情の念が起つた。そして僕が持つて来たものを「佛様に上げて下さい」と云つて差出すと、非常に嬉んで「新盆だと思つて来て呉れたかね」と幾度も禮を云つた。そして佛様を拵らへると言つて、無き妻の位婢を持つて来た。あゝその時のF兄の心は何うであつたか。僅か来て二年と経たない内、新婚の嬉しさの消えない内に、新妻は兄を置いてあの國へ行つてしまつたのである。そしてまだ兄は獨り物で居る。今この前で兄は無き妻のために佛さまをこしらへてゐる。地下の叔母さん——新妻——もさぞ嬉しい事であらう。世の中はまゝにならぬものである。役にも立たない、美くもない、自分でも早生きてゐたいとも思はない婆さんはなかなか死せず、美しい、今来たばかりの、これからといふ人が運悪くも死んで行く。死せる人の分身である今年四歳になる専ちゃんといふは何も知らないで無邪氣に遊んでゐた。實

際専ちゃんの顔を見てみると、何とも言はれぬいじらしさを覺える。F兄に瓜二つのやうな顔をしてゐる。無き妻は可愛い、その子を墓場の蔭から守つてゐるのであらう。

夜新宅へ遊びに行つた。丁度湯も湧かしてあつた。人々は皆自分を見て大きく成つたと言つて呉れた。おゑのみすゞ姉も來てゐたつた。何だか蠶も大當りだといふので、皆景氣が好かつた。僕は湯に入つた。淺江といふ十五になる子が火を焚いて呉れた。自分は彼の女が何となく可笑いやうな時もあつた。でぶくと太つた大きな女、自分は彼女に當らぬやうにしてゐた。質朴な伯母は僕の來たのを非常に喜んで呉れた。子供の八人もある仲を譲り受けた身代を減らさず、漕き抜けて來た伯母の苦心は並大抵ではなかつた。今は早や子供も成長して仲々働いて呉れるので大分樂になつて來たといふ。

本家へ歸つて寢たのは十一時頃であつた。

翌朝飯を食つて暫くして照雄さんと義信さんと僕との三人で遊びに出る。何れ劣らぬ腕白連、十六と十八と十九の血氣盛んな青二才、いざ蜂征伐に出かけようと出發した。日はカン／＼と照りつけてゐた。焼けるやうに日の當つてゐる石塚を目當てにして歩いた。そして各々長い棒を持つて打

ちながら歩いた。萬一、蜂が驚いて舞ひ出さうものなら最後、僕達は直ちに包圍攻撃を始める。三人で一二三の掛聲と共に青葉の枝で以つてびし／＼叩く。目くら目つほう界に叩くのである。實際かゝる事は面白かつた。人間の細胞の中にある好奇心とでも云ふものであらう。或る時には蛇がゐたつた。じく／＼した濕地には蟹もゐたつた。何しろ非常に面白かつた。家へ歸つた時に遅いといつて小言を言はれた位であつた。

それからすぐ高瀬川へ遊びに行つた。仲々あんな藝當は出來ない。高瀬の水が皆一方の岸に片寄つて唸りつ、淀みつ、猛り立つて走つて行く中へ平氣で飛込んで、波に任せて浮いたり沈んだりして流れて行く。かと思ふと鵜のやうに水の中とんほ返りをしたりして、仲々山の中から出て來た僕にはたゞもう驚くより仕方がなかつた。

専ちゃんも一緒に行つた。守といふのは十一二になる子供で可愛さうな顔をしてゐた。まだ頑足ない子供である。で、いつのまにか見とれてしまつて岸の端へ出る。と、専ちゃんがちよろ／＼と出て行く。實際見てゐても冷や冷やする位であつた。自分はその度に膽を冷して、幾度も小言を言つた。日はぢり／＼と照りつけてゐた。何處かで油を焦りつけるやうな油蟬の音がする。汗はたら

く)と出て、目が昏みさうである。汗だらけの手で目を擦つてゐる専ちやんを見ると、可愛さうだといふ氣がむくく)起つた。で、専ちやんを脊負つて守と一緒に戻つて來た。汗だらけの僕の手は幾度もすべつて危ぶなくなつた。専ちやんはじつと僕の脊に據りかゝつて竦むやうにして、太陽の光線を避けてゐる。守は「私が脊負ませうか」と幾度も聞いた。「いい、いいよ」と僕が答へると、彼は頬を林檎のやうにして嬉がつて、飛んだり跳ねたりしてゐた。

やがて人殺しのあつたといふ家の前を通つた。殺されたのは六部かなにかで、殺したのはその家の持主であつた。六十近い老人であつた。何でも少しの米か何かの争が原因であつたといふ。あゝ一升の米、一升の米は二人の人を殺したのだ。聞けば、加害者は今松本へ連れられて行つてゐるといふ事である。食ふより強い力はない。生きんとするより強い誘惑はない。我が生きんとする爲には恨なき我が同胞を殺す。あゝ何たる慘憺たる光景よ、人生の狀よ。

家へ歸つた時は三時頃であつた。家を出る時父から一晩宿りで歸れと言はれてをる。僕は歸らうとした。然し島新田の人々が今一夜宿れと言つたので宿る事にした。

夕飯後照雄さんを誘つて表に出る。月は晃々と照らしてゐた。芭蕉の葉末の銀の玉がキラ／＼光

つた。何處かの藪ですぎつちよが鳴いてゐた。あたりは一面の夏の夕暮の懐かしさで満ちてゐる。「あゝ佳い月だ」と言つて照雄さんの肩に手をかけた。丁度その時一聯の優い音波が流れて來た。誰の聲ぞ。Tさんの聲らしかつた。

照雄さんは線路へ行かうと言つた。自分等は線路に立つた。家々の電燈は星の如き光を見せてゐる。自分は月を見た。照雄さんもよい月だと云つた。自分は線路に坐つた。多小ヒステリックになつてゐた僕はその上で、光る上で、月夜の晩に自殺する事を考へて見た。そして「かうしたらば一番巧く殺されやう」などと手眞似した。石を投じた。石は露光る稻田に落つるともあれば、たまにはカチン——と金屬性の電線に當る音も起つた。一面に薄墨の中に更に黒く畫いた如きは森や家と、はるか彼方に聳ゆる有明山の雄姿である。偉大なる天工、無盡力を持つた造物主の作品、男性的の曲線より成る有明山は月下に雄然として立つてゐる。月を浴びし有明山、その頂は白く、その谷は黒く、やがてその麓は暗黒の内に消えて行く。

月の雲に出入する毎に、あたりのパノラマは見へつかくれつ。月出づるや、森も堤も有明山の雄姿も一樣に輝き出で、さゝやかな側の小川は銀波を碎いてさら／＼と流れた。又その月の入る時は

有明山は黒い帷の彼方に遮られ、傍の森は薄い墨繪のやう、側の小川は黒蛇の如く、たゞその音のみがザザと聞えた。

凡そ半時間の後僕は友と共に歸つた。僕の足は自然と大本家に向けられた。

「今晚は」

「はい、お上り」これはみすゞ姉の聲であつた。今まで蚊がゐるといふので蚊屋の中で涼んでゐた人々は起き上つて來た。

「おや、寅雄さんかね」

「まあ、よく來たね」やがて戸の開れた時に人々はかう言つた。

私は笑つて「お遙かでございます」と言ふと、その時、

「まあ、大きくなつた」これはTさんであつた。

やがてM伯母も來て、色々云つて呉れた。Tさんは業と僕の側を離れて、電燈の下へ行つて坐つてゐた。前に見た時よりもずつと育つて、女らしく成熟してゐた。彼女は暫くして言つた。「松本はベースはどうだつたね」

「勝たうと思つて一生懸命にやつたがとう／＼敗けてしまつた。長野師範にはこれで三度目だ。實際涙が滲れる」と云ふと、側にゐた人々が皆高々と笑つた。Tさんは僅か微笑した。

専ちやんは裸で頬に愛嬌を振り撒いてゐた。「専ちやん、蚊がゐるていけないから極樂へはいり」と言つて菓子を包んで渡すと、裸の専ちやんはてく／＼と蚊屋の中に入つて行つた。が、暫くして茶が出ると又出て來た。M伯母は色々僕に挟んで呉れた。丁度その時伯父も歸つて來て、菓子を買つて來たと言つて差出した。僕は實際うまかつた。僕はいつも嬉しかつた。夏の夜のことゝて蚊が多かつた。僕等が困つてゐるとTさんが立つて團扇を持つて來てくれた。

月は晃々と照つて、その青白い光を靜かに眠る植込みの上に、守るか如く投げかけてゐた。この靜かな夏の夜を我世とばかり鳴きつゞけるは千草にすだく蟲、銀の玉のやうに輝き出すは葉未にたまる露。

専ちやんは中々可愛かつた。

「専ちやん。専ちやんは何になるの、兵隊さん？」

「うん、いや、大工、大工」

「まあ、大工、大工になつて何うするの」

「釘を澤山打つて、トトトン、トトトンてうんと長く木を繋いで、鐵道の線路にするよ」

「まあそれから？」

「そして、あの、蠶棚の中へ入れる」

幾度か専ちゃんのためには笑はされた。その間中、Tさんはさも可愛くてたまらないと言つたやうな顔つきでほれぐと専ちゃんを見つめてゐた。その中に今まで機嫌の良かった専ちゃんは眠くなり出して、自分では面白くてもつと遊びたいと思ひながらも、目が云ふ事を聞かないので、その小さな手で、つぶつた小さな目を無理やり開けやうとした。僕達は思はず吹き出した。

樂しき時間は刻一刻に過ぎ去つてしまつた。僕は別れなければならぬ時となつた。僕は立上つた。伯母さん達も「もう少し遊んで行け」と言つた。「え、遊んで行きたい。心の中では遊んで行き度くて困つてゐます。然し行くべき時が來たのです」僕は立上つた。

その時側にある伯父さんは「えらいい、體になつたな」と感心したやうに言つた。Tさん達は笑つたやうだつた。僕はえいと返事をして戸口に下りた。そして正面に向きながら禮をした。僕はそ

の時注目した。自然と注目せざるを得なかつた。又一年近い月日は會ふ事が出來をいと思へば、何うして注目せずにをられやう。

巴蕉の葉末の朝露が光り出すと夜が明けた。

僕は停車場に立つた。汽車が來た。僕の側には照雄さんが立つてゐた。

「さよなら。又遊びに來て」

「有難う僕の方にも」

列車が動き出す。一步一步するくと遠ざかる。

「學びの窓に年をへて、あつめし友よいざさらば」

二條の聲は軋る列車の音に混つて靜かに流れ合つた。

(大正八年)

我輩は机である

喇叭が鳴る。と、今まで運動場で跳ねて居た坊主達がどやどやと入つて来る。場所は松本中學校の中一年の教室で、時刻は丁度九時半、學科は算術である。

やがて皆々教室へ入つた。入る事は入つたが其状態は千差萬別である。机に腰をかけて青い顔をして挨拶を吹いて居るものもある。教壇に立つて先生を氣取つて居る生意氣もある。中には角力まで取つて居る豪傑もある。

我輩の主人の×君も来て我が輩に腰をかけた。かう言へば我輩は何であるか？ といふ疑が起るだらう。疑が起ると聞きたくなるんだらう。聞きたくなれば聞くんだらう。聞くのを答へないのも餘り可愛想だから話してやらう。實は我輩は机である。

机の癖に口をきくなんて生意氣だと言ふ人があるかも知れぬ。然し猫でさへ口をきく文明の今日机だつて口をきいたつて悪くはあるまい。もと我輩は木曾の奥山で猿を相手に暮して居つたが、今

は此處に住んで居る。

一體我輩は此んな汚い學校へ来るつもりは毛頭なかつた。今頃は大臣の椅子位に出世して居やうと思つたが、そう欲を言つても限りがないからまあ此處で一生を送らう。

するといつものやうに○君が哨兵といふ格で窓の蔭から頻に先生の來るのを見張つて居る。哨兵が「來た來た」と言ふと教壇の生意氣は飛下り、角力の豪傑は離れて眞面目くさつて席へついた。よくあんなに敏活な動作が出來たもんだ。動作は敏活でも卑怯である。先生の見ない所では思ふ存分荒び、先生の前では猫の前の小鼠のやうな顔をして居る。それで五年間過ごして中學卒業生だ。紳士だと威張つて居る。何うも質の悪い坊主達である。

かう思つて居るとガラ／＼と戸が開いて先生が黒塗の手帳を小脇に抱へ飛び込んで來る。此の黒塗は何ういふものか坊主達大層怖しがる。それで名まで閻魔怙／＼と呼んで居る。だから我輩も閻魔君と呼ぶ事にする。

先生は教壇の上にスツクと立上つて、血のやうな目で四十七の坊主頭をピカ／＼とにらめ廻した。中々勇しい武者振である。すると其の返電として坊主達の四十七、いや九十四の眼もピカ／＼と先

生の顔に電氣を送つた。

一〇八

幹事の「直れ」の號令で一同がたくと立つて、禮の號令で頭を下けた。下ける事は下けたが不揃ひである。もう頭を上げた奴があるかと思ふと、未だ下け切らないものもある。

先方も少々氣に入らなかつたと見えたが、流石に先生だけあつて何も言はずは闇魔君を擴げる。四十七の坊主の顔が少し青くなる。大げさに言へば死刑の宣告を受けた時のやうな顔だ。なる程闇魔君と名のつくのも無理はない。坊主達餘程怖ろしいと見へる。

さて先生は暫く闇魔君を見つめて居たが、やがて口を開いた。「此の問題をやつてもらひます。一番A? 二番B? 三番C? 四番D?」と三番までは無事だったが、四番のが餘程むづかしくてD君「出来ません」と小さな聲で言つた。「何、出来ない。出来ない筈はあるまい。出来ないなどと言はないで、するうしてやつて来ませんか」と正直に言へ「先生にしては少し言葉がぞんざいである。然し之は事實であるから仕方がない。

やがて先生は「それならE?」「するうしてやつて来ませんか」「F?」「やつて来ませんか」「G?」「やつて来ませんか。」「H?」「やつて来ませんか」赤い顔をして言ふのもあれば青い顔をして言ふのも

ある。大きな聲で言ふのもあれば小さな聲で言ふのもある。言ひ方は千差萬別であるが四人共枕を並べて討死したのは事實である。

我輩の隣がS机君である。その主人がS君である。此のS君生意氣な癖に臆病だ。するをきめてやつて来ない癖にやつて来たやうな顔をする。知らない癖に知つて居るやうな顔をする。卑怯な坊主である。此の坊主今まで「出来ました」と言はんばかりの顔をして居たが四人も討死して闇魔帳の讀上が近づいて段々形勢が危険になると、今までの「出来ました」は何處へやら「ハーハー」と溜息をつき出した。S机君は平常S君の扱い方が残酷だからS君を怨んで居る。怨んで居るから苦むのを喜ぶ。苦むのを喜ぶからハーハーが出る度毎にニヤ／＼する。S机君頻に笑つて居る。

さて我輩の主人はと見ると中々堂々たるものである。知つて居れば出てやるし、知らなければやらないまでの事さと云はんばかりの顔して居る。近づけば近づく程落ちついて来る。中々男らしい。我輩の主人ながら之だけはS君より偉いと思つて居る。

生徒が知らないと言ふ度に、十文字がついて闇魔君が活動する。闇魔君が活動する度にS君がハーハーと言ふ。S君がハーハーと言ふ度にS机君がニヤニヤする。S机君のニヤニヤに正比例して

我輩は机である

一〇九

主人は落ついて来る。主人が落ついて事件が進む毎に何うなるか見ものだぞ、面白いなあと我輩の興味が段々深くなる。

先生は更に今度もかと言はんばかりに「S?」と呼びかけた。S君「出来………」と言つた。「何又出来ないか」あはや十文字をつけやうとした其一瞬時に「出来ます」と受止めた。危い所で討死を免れた。討死は免れたが、黒板まで出て敵と渡り合つて勝てるか何うかそれは疑問である。

S君命でも拾つたやうな顔をして居る。さて四人の戦士はゾロ／＼と黒板の前まで歩み、大刀ならぬ色チヨークを握り締めて「いざ来い來たれ」と身構へた。

それからはカチ／＼と色チヨークが鳴つて、四人の奮闘の様子が手に取るやうだ。

しばらく其の戦状を見て居ると、何處からかカチ／＼といふ音が聞へて来る。おやなんだらうと思つて振向くと後には青い顔をしたK君が不景氣に控へて居て、カチ／＼はたしかに其の足もとから聞へて来る。

我輩「ハ一分つた」と思つた。昨日K机君と話をした時、机君が「僕の主人は氣が小さくつて、どの學課に限らず出来ない時には疝癪を起して足の先で僕の横つ腹を叩く癖がある。其の度に痛く

つて仕方がない。わけても算術の時間には一番叩くから困る。僕はこんなに苦められると死んでしまふかも知れない」と涙を流して話されたことがある。

K君がカタ／＼が癖で、算術の時間は別けても繁くて、今は三學期の一番急しい時だから成程困らうと、机君を見ると、瘠せた顔をしかめて居る。我輩はK机君が可愛想で仕方がない。

一日ばかりなら我輩が代つてやりたいやうな氣がする。

その内にカチ／＼が止んで、四人の戦士は壇を下りた。

今まで閻魔君を見て居た先生が生徒の方を向いて「皆止めて一番から拜見します」と言つた。拜見しますは謙遜すぎる。

「え——と一番は別にむづかしくもないからこれで良しと、答も之でよい。合つた人」と言ふと、其言葉の終るか終らない内にワーとばかりに手を揚げた。何の事はない。まるで突貫だ。揚げないものはいつてもやつて來ないO君許りである。先生は又「二番に移ります。さあB説明を」

B君暫くためらつたが、思ひ切つて壇へ上つた。四十七の坊主の顔が變な目をして見つめる。「まづ全體を此れだけにする」と言ひながらB君一本の横線をズーと引いた。小々曲つて居る。

「これだけ半分であります」と點をほつりと打つた。打つは打つたが、その置き所が變である。「半分であります」と言ひながら左から四寸右の方へは一尺もある所へ打つて居る。

先生も之を見咎めて「それじや變じやないか。そんな半分があるものか。半分はかうさ」と言ひながらB君の色チヨークを取つた。B君頭を搔く。何うして頭を搔くか知らないが、人間殊に男は失じつた時には必ず頭を搔く。妙な病氣がはやつたもんだ。

B君から色チヨークを取つた先生はB君のを消して新しくほつりと打つた。先生だけに前のより大分直つたが、まだ右と左とでは二三寸の違がある。そんなに賞めた點でもない。先生御自分でもあまり感心しなかつたやうだが「まあ是れで良い」と言つた。何うも少し我儘である。我輩はそんなに馬鹿でないつもりだが、机の悲しさに人間程頭が無い。段々と算術の説明がむづかしくなつてしまひには何が何だか分からなくなつてしまつた。

分らなければ興味も湧かない。それで天下の、いや級中の形勢を見やうと思つて後に向く。先づ一番後に幹事が居る。流石に幹事だけあつて堂々たるもんだ。山が崩れて來ても動かんやうだ。成程之でなければ幹事は務まるまいと感心して隣を見ると、一番丈の高い坊主が居る。坊主仲間では

こゝいふのをノツボとか言ふそうだ。其のノツボ先生講義には目も呉れないでしきりに鉛筆で紙の上をこすつて居る。大方怠けてやつて來なんだからあてられ、ば困ると思つてやつて居るんだらう。次には二十人ばかり同じやうな顔をして同じやうな態度で黒板を見つめて居る。次に五六人置いてY君が居る。そんなに出来る坊主でもない。目をいやに光らして聞いては居るが、御氣の毒な事に十分判らんと見える。次に同じやうな坊主の頭を飛んで我輩の隣のS君に移る。

S君講義が分らなくなつたと見えて鉛筆で何か頻に書いて居る。何か書いて居るでは判らんが、いくら見てもやつぱり判らん。正體の知れない怪物である。其の怪物は楕圓形をした卵のやうなもので足が三對生えて居る。三對足がある所を見ると昆虫類に違いない。昆虫類のなんだらう。甲虫かな。然し甲虫としては角がない。蟋蟀としては髯がない。蝶としては翅がない。愈々正體の分らない怪物である。S君も之には愛想が盡きたものと見へて暫く見つめて居たが「下手だなあ」と言つた。成程之じやいくら慾目に見ても上手に見える筈がない。第一何だか判らんじやないか。然し自分の下手なのを下手だと言つたのはS君にしては感心な言ひ方である。

しばらくしてS君は「是れじや蜘蛛には見えないなあ」と言つた。先生蜘蛛を書いたと思つて居

る。六本足の蜘蛛なんて何處を尋ねたつてあるもんか。これが蜘蛛だとはあきれはてる。此んな蜘蛛が萬一あつたとすれば見せ物にしたらさぞ儲かるだらう。大將今度は怪物の下へ「蜘蛛」と書いた。成程かうやつて置けば圖は見ずとも字を見れば判るんだらう。S君鉛筆を取直して別の所へ又ゴシ／＼と何か書き初めた。大將未だ何か書くものと見える。

かう思つてちよつと先方を見ると驚いた。先生の目からピカリと電光がS君の頭へ飛んだ。少々險呑である。S君知らぬが佛で、未だ何かやつて居る。又電光がピカリと飛んだ。愈々險呑だ。「S君險呑だよ」と知らしてやりたかつたが、机の言葉は人間には分らないから仕方がない。

しばらくすると三度目にピカリと大きな奴が飛んだ。前の二三倍は慥かである。其の電光が飛ぶと同時に先生の口が開いて「S、此の式は何うして立つ」と怒鳴つた。

人の知らない時に打つのを不意打といふ。此の不意打に合ふと大低な者は參つてしまふ。況やS君に於てをやである。

S君頬に怪物を書いて居ると、いきなり「S」と呼れた。はつと思ふと參つてしまった。鉛筆をガラ／＼床の上に轉がして立上つた。「此の式は何うして立つ」と言はれた時は夢中である。勿論式

は知つて居やう筈が無い。第一どれを問はれたのかさへ分らないのである。然し問はれた以上答へなければならぬ。答へたくても知らない。知らなくても答へなければならぬ。それでS君突拍子もない事を突拍子もない大聲で言つた。級友が一度にどつと笑ふ。先生が「馬鹿な」と鼻の先で笑ふ。可愛想にS君眞赤になつてしまつた。

「さうしない。これから聞いて居なけりやいけぬぞ」と先生は一々説明して呉れた。

S君赤い顔をして聞いて居たが、坐りがけにニヤリと笑つた。泣出しそふな笑ひ方である。伊太利に「眼を閉づる者は必ずしも眠るに非ず」といふ諺があると云ふが。S君の今の笑ひ方は其の筆法にちがいない。

しばらくすると喇叭がだるい初春の空氣を破つて鳴り渡つた。幹事の號令で皆一度に立上つた。立つた一同の顔にはこれでいやな算術の時間も終つて有難いといふ表情が一面に漲つて居た。

(大正七年三月二十一日)

戀と死と生

第一、歸郷(一)

東京よりM市行きの列車は、ゴトリゴトリと不規則に空気を振動させながら、高原を走つてゐた。「今何時頃であらうか」とつぶやきながら、W大學の制服の學生は時計を引出して見た。時計の針は二時半を指してゐた。もう半分以上は來たのだ。してみると此處は何の邊であらうかと、窓からちよつと外を覗いて見やうと彼は立上りながら、窓の戸を上げた。ヒヤリとした涼しい風が吹いて來た。だが、外は曇つてゐた。眞黒い夕立雲にとざされて、外は暗くて何も見る事が出来なかつた。二つ三つ、眠つた家の電燈の光りは星のやうに光つてゐた。電燈の光りの少ない所を見るときも、う山地へ入つてゐるらしい。

暑苦しい夏の列車内で、眠る事は苦しかった。だが、涼しい、外の空気を思ひ存分吸ひ込むと眼がさめて來た。電柱が二つ三つ彼の目の前を通り過ぎた。さうだ、もう二時間も経てばM市に着く。

そしたら家へすぐ歸れる。と彼はかすかな衣ずれの音を聞いた。ちよつと側を見ると、それは彼のそばにゐる一人の婦人が寢返りを打つたのである。と忽ち、彼の頭に電光のやうに通つ過ぎた者があつた。それは彼に快感を與へた。「何だらう」考へる事の好きな彼はちよつと思つた。それは異性から來る力であつた。その婦人の曲線を見た時に閃いた男の脳髓の動きは忽ち彼の愛人を連想させた。彼は妙にうれしいやうな感に打たれて、暗い窓に向つてかうさゝやいて見たくなつた。

「さよ子さん。貴女は何うしても私を離れませんか。美しい曲線を持つた人。美しい目を持つた人。その人は何うしても僕を離れませんか」

彼はかうさゝやいて見て、ちよつときまり悪さうに四邊を見廻して、微笑した。二三分の間じつと彼は彼女の事を空想してゐた。すると、その婦人はかすかに眼を開いた。そして彼にかう聞いた。

「何處でせうか」

彼はちよつと眞面目になつてかう言つた。

「ちよつと別りませんが、K町あたりでせう。もう、二時半過ぎですから」

彼女は言つて又目を閉じた。

美しい。彼はかう思つた。「だが、あの人は、私の戀人はより以上に美しい」と思つた。

突然汽車は汽笛を鳴らした。トンネルだ。かう思ふと彼は窓を閉めた。二三十秒経つと、ガタン／＼と言ふ音は強くひびいて來た。二つ三つ置いて向ふの開け放された窓からは煙がやはらかな曲線を描いて入つて來て、清い室内の空氣を濁し出した。彼はじつとそれを眺めてゐた。一人の商人體の男がハツクシヨと咳をした。そして目をさまして

「トンネルだ」とつぶやきながら窓を閉めた。

だがその時はもう、列車はトンネルから出て、強い反響は弱くなつた。

「人を馬鹿にしてゐるやがる」

かう言つて、窓を又開けた。そして、ドツカリと坐つて、煙草を出して、あくびを一つして吸ひ初めた。

汽車は段々弱くなつて、線路を横切る音がガチ／＼して列車がかすかに動揺した。停車場の燈火

が二つ三つ通り過ぎて、汽車は停つた。

ゴトリと汽車が最後の動揺と共に停まると、パツと停車場の電燈が輝いて、驛夫の靴音がした。

「甲府く」

「……に辨當」

と一段高い音波が流れた。五六人の乗客の下駄の音がゴト／＼すると、室内の煙草を咬へて、前側に寝そべつてゐた、でぶ／＼太つた、中年の勞働者風の日に焼けた男が起上つた。「もう甲府かかう云ひながら、うんと手を延ばした。

哲雄のそばに眠つて居た中年の美しい女はやはらかな曲線を起して 立つて、バスケットを手にしてちよつと彼を見て、襟を直して出て行つた。

煙草を吸つてゐた男は吸ひ残りの煙草を落して、立上つて窓から首を出しながら

「おい辨當を一つ」と云つた。

その時戸が開いて、一人のトランクを持つた洋服の紳士が入つて來た。その後から十二三の紳士の

小供らしい小女が大きな模様つきの着物を着て入つて来た。頭には絹のりほんをつけてゐた。白い透通るやうなりほん、と眞黒い髪の毛とが美しい對照を爲してゐた。紳士はトランクを置いてでぶでぶ太つた男の側に腰を掛けた。その側に令嬢も坐つた。又戸から一人の男が入つて来た。それは和服で、人品の高い、力の有りさうな、色の淺黒い男であつた。

「いやあ、何ちらへ」

と元氣良く問いかけた。

列車は、ピ——といふ汽笛の音と共に靜かに走り出した。

哲雄は黙つて目を閉ぢてゐると、色々の話し聲が流れて来た。紳士の聲で、

「恐しい變動ですね、近頃の財界は」
すると、今入つて来た男の聲で

「恐しいとも何とも御話しになりません。何しろ、瞬たく間に三倍以上の騰貴ですから。物に依つちやそれ以上のものがあります」

「此の向きで行つたら一體何うなりませうか、恐しい事になりませうぜ」
「さうですな」

男はかう云つて黙つてゐるが、

「成る様にしかならないのでせう」

紳士は聲高く笑はうとしたけれども男の案外に眞面目な顔を見ると、ちよつと加減して、

「さうです、それに間違は有りません」

かう云ひ終ると二人はちよつと顔を見合せて笑つた。

かう云つて彼等は話題を他方面に轉じたらしく何を話してゐるのか分らなかつた。段々彼等の話は低くなつた。だが、突然太い音に注意を引かれた。それは太つた男の聲で、

「おい君、景氣は何うだ」

すると、黄色い聲で細い男は言つた。

「景氣。ペラボー奴、今日日の陽氣に景氣の好い奴が有つてたまるか。いよく苦しくなつた。米が一升五十錢だ六十錢だつて、たまるもんかのおまけに家に喚に小供が三人も有つてたまらね

いや」

太つた男の聲で、

「まあさう愚痴はこぼしつこなし。俺だつて鼻が死んじまつて、三つになる女の子と、阿母と親爺さ。それに、阿母は病んでるんだ」

細い男の聲、

「まあそりや、大變だね、まあく俺等の時節を長くして待つさ。それより仕方は無いよ。俺等だつて太陽の光に照される時があるんだらうから」

太い男「さうさう、時節を待つさ」

かう云つてゐた。まだ話しは先へ續いたやうだが、彼はうつとりとして来て眠つてしまつた。

彼が一時間餘り経つて目をさましたとき汽車はもうM市に程近い高原の上を走つてゐた。もうほんやりとして来た。彼は急に氣がすがすがして来た。勞れの凡てはぬぐひ去られて、立上つた。神經質な彼の神經には夏の朝の空氣はよりよきさはやかな快感を起すのであつた。「さうだM市だ。故郷の空だ。私の戀人のゐる空だ」から思ふと若い血潮は高鳴るのであつた。

十分五分、列車はM市に近づいた。鐵橋を渡つた。二三の高い煙突が通り過ぎた。列車がガタン／＼と線路を横切ると、列車は止つた。商人風の男は立上つた。哲雄は立上つてバスケットを持ちながら商人の跡をプラットホームに降りた。

彼が汽車から降りて、狭い出口から外へ出た時、第一に感じた事は温みのある故郷の淋けさであつた。美しい自然は靜かに眠つてゐた。涼氣が彼の心を清淨にした。あの塵と争闘の巷の東京に比べて此處は何といふ清淨さであらう。四方山々に圍まれた美しい町、此處が自分の生命の芽生の地であつた。我愛人を育て、呉れた處であつた。彼は正面の果物屋の店頭を眺めた。そこには美しい林檎が有つた。

二十五六の色の白い女がその側に坐つてゐた。今や出んとする太陽はしづかにその横顔を照してゐる。彼は何となく藝術的な氣分に包まれて、二三分の間じつと見つめてゐた。彼は、そのじつとしてゐる女の曲線を見つめてゐた。すると彼には高尚な慾望が起つた。あの女の曲線を動かして見たい。彼はかう思つたので、靜かに店頭に立つた。

「今日は」

彼は靜かにその女から目を離さずに言つた。

するとうつむいてゐた彼女の髪の毛が動いて、肩の肉付がちよつと動くところを向いた。

「はい、何でもござんすか。何を上げませうか」

彼女のたれた手が延びるとちよつとたしみに手をつけて、半身をもたけながら言つた。背中から腰にかけての曲線がふうわりと動いた。彼はじつとそれから目を離さずに云つた。

「林檎を一つ」

「はい」

かう云ひながら、彼女はふうわりと立上つた。

「その一番大きいのを下さい」

彼女は近寄つて、白い手をさし出した。さし出された白い手は赤い林檎の上にねばりついた。林檎は彼女の手につきつけられて、一枚の白紙に包まれ、彼の手もとに送られた。彼は錢を拂つてその店頭を出た。

何と云ふ美しい朝だ。彼は渡された林檎を手にしながらかきながら考へた。「美しい山々だ。熱狂

した中學時代の町だ。そして、その中學時代から自分は彼女を知り初めたのだ。彼女はその時女學校の生徒であつた。白い線の入つた袴をはいて、よく朝夕自分の家の側を通つたものだ。自分等は何といふ美しい愛を心に畫いたであらう。自分等は純な心であつた。學校であれ程腕白者の俺が、あれ程大膽な自分が、彼女の前では何も言ふ事が出来なかつた。あの美しい大きな目に出會ふと、私の心はぐらくとした。熱い血潮は自分の身體中をかけずり廻つて、自分は恥しくなつてしまふのであつた。私共は無音の熱であつた。自分は彼女に注目し、彼女は自分に注目した。たゞそれであつた。けれども私は彼女を十分理解してゐた。人間の作つた言葉より目に見えない私の心の奥の愛の方が何の位彼女の胸に強くひびいたか分らないのであらう。彼女も自分を十分理解し、自分を強く愛してゐて呉れるであらう。いやそれは疑も無い事實である。たとへあらゆる眞理が亡びてしまふともこれは疑も無い事實である。けれどもそれは眞理である、事實であるとは思つてゐても、私は何だか苦しいやうな氣がする。たつた一言でもいい、「妾は貴郎を愛します」といふたしかかな答を得たいものだ。その答を自分は欲してゐる。あだかも美しい子供が、人形を買つた子供が、貰つてゐるのは事實だとは信じつゝも幾度もその箱をあけてそれをたしかめるやうに。

「あの人は今年の四月女學校を卒業した。私はW大學へ入學した。そして、二人は別れなければならなかつた。けれども私は一日にても彼女を忘れた事はなかつた。自分の生活の半分は彼女の許へ行つてゐた。さうだ、彼女と一緒に生活してゐたのだ。して見ると、私は何うしても彼女のものだ。俺は此の夏休みを何の位待つたか知れない。そして自分は煩悶した。夏休みは來たのだ。それだから自分は今度こそ何うしても彼女に行會はなくては氣がすまない。そして彼女との戀を成立させよう。自分はたとへ自分の肉體を犠牲にしてもいい。自分は満足する。彼女から答を聞きさへすれば。さうだ『妾は貴郎を愛します』と。」

「だがその機會を何うして作つたらいいのか。いやそれは神が知つてゐる。神は自分にその機會を與へて呉れるであらう。」

かう色々な思出の糸を辿つてゐるとも、哲雄は町を出はづれてゐた。自然の田園が彼の前に開けた。はるか彼方後方には日本アルプスの銀色の山々が走つてゐた。眞夏の緑は黒かつた。大自然は凡て力の權化とも考へられた。哲雄は又かうつぶやいた。

「さうだ、夏だ。夏は青年だ。青年は力だ。俺の若い肉體からはち切れさうな力が溢れてゐる。熱がある。そして自分は希望の炎が燃える。凡ての眞理を追究したいといふ野心にかられる。凡ての智識を吸ひ取りたい。そして我戀人あの戀人を我所有にしたいといふ炎に燃える。青春は苦しい。だが青春はたのしい。青春は涙だ。涙だ。涙の時代だ。物質慾を離れた涙の生活だ。涙は美しい、物質を離れた涙は美しい。青春の涙は全世界を淨化する。」

「自分は自由を欲する。飽くまで自由を。俺を束縛する者が、何物が有るか。有つたら來て見ろ。俺は凡ての壓制の權力に對して反抗する。たとへそれが、父母であらうが。社會で有らうが。永久の眞理に異る時は。自由なれ。之が永久の眞理だ。弱き者よ、自分は弱い者の爲に戦ふ。強者の横暴は大嫌ひだ。」

彼は興奮してかう云つて、我と我聲に聞入つた。

世の中は不思議なものだ。自分はその疑問に絶えず苦しめられる。世の中、現在と云ふ事、過去と云ふ事、未來と云ふ事、それ等は事實何であらうか。有であらうか無であらうか。刻々ある點よりある點へ進み行く道程で有らうか。又は、或一地點に止つてゐるものであるか。一地點に止つて

ゐたとしたら過去現在未來は人間の錯覺であらうか。いや自分には分らない。

それから死と云ふ事之程自分等人間に取つて大問題は無い。死。何と云ふ不思議な言葉だらう。全人類の内一人でも此の問題を自分等の前に説明し得る人はあるまい。それなのに、全人類の凡ての人々は死んで行く。死んで行く。何の事だ。何といふ言葉だ。永久に解けない秘密の倉、人間には、人類には如何なる天才も此の秘密を解く力は與へられてゐないのか。秘密の倉の鍵は與へられてゐないのか。いや、さうとも限るまい。人間に少しも考へる力が無かつたら、或は力は與へられてゐないだらうが、少くとも、死と云ふ疑問を發することの出来る限り、少々にても力のある證據だ。だが世の中には、死と云ふ事を少しも怪しまない人もある。自分には之が不思議だ。今まで話し、一箇の肉體として活動し、温い血液を持つてゐたものが、死ぬ。するともう、話す事も考へる事も出来ない。活動は止り、血液は冷くなる。そして腐敗する。あ、何の事だ。何の爲に人は死ぬのだ。何の爲に。目的で………………。えい、解らない。自分の頭は死といふ問題を考へる度に亂れて来る。けれども、私は考へる。考へる事は苦しい。死と云ふ事を考へる事は苦しいにちがいないが、考へない事も苦しい。考へない事は考へる以上に苦しい事だ。考へると云ふ事は

理屈では無い。大自然が、云ひ更へれば、神が自分に命令する力だ。使命だ。神は、自然は、自分を試してゐるのだ、自分の力が如何なるものであるかを。神は自分に命令する。それが自分の使命だ。さうだ、使命だ。自分は如何なる事が有らうともその問題を考へやう。考へて考へて考へ抜かう。如何に世間が笑ふとも、如何なる悲難が迫らうとも、自分は最後の血の一滴まで、最後の死まで、自分は此の問題を考へやう」

彼は、熱に浮かされたやうな氣分に包まれた。そしてふと氣が付いて見ると、もう家に程近い田畑の間を通つてゐた。そして彼の思考力は別な方面の事に及んだ。

「だが、靜かなる故郷の自然を見つめる時、自分の心は清々して来る。太陽が出た。太陽、何といふ偉大なものであらう。そして何といふ美しいものであらう、男性的な力に満ち満ちたものであらう。自分等は此の太陽に育まれる。我の力は偉大なやうに思ふ。けれども此の限り無き太陽の熱と力に對すると此の小さな人間が何を爲し得るものかといふやうな氣がする。晝と夜と、不思議なのは此人生だ」

彼は又かう思つた。そして沈思した。だが此の沈思は突然起つた音の爲に破られた。ふと向ふに向

いて見ると、一臺の運送が来た。彼が第一に気づいたものは一頭の馬であつた。黒毛の瘦せた馬を一人の男が引張つてゐた。一人の男、三十五六になる赤ら顔の妙に目をぎよく／＼させる男であつた。何だか此の男を見たやうな氣もしたが誰だか判らなかつた。運送には肥料が満載してあつて、馬はふう／＼云ひながら、汗をかいてゐた。男は彼を珍しさうに見て通り過ぎた。

「あれも人生だ」彼は考へた。あの苦しい馬も、あれも、人生だ。あの馬、あの馬と自分との間に果して何れ丈けの懸隔があるのであらうか」彼はかう考へた。

「あの馬、あの馬も苦しいと云ふ事も知つてゐるだらう。あの馬は何故人間に使はれるのか。何故生殺與奪の權を人間は持つてゐるのか。それだけの權利が何故人間に有るのであらうか。あの馬がそれだけの罪惡を犯してゐるのか。そんな悪い罪を犯してゐるのであらうか。何故、何故人間はあの馬を苦しめなければならぬのか」

彼はこんな事を思ひながら、ふと横を向いて見ると、そこにはよく少年時代に遊んだ柳の木が川端に立つてゐた。それを見ると彼は、ふつと、血潮が沸いて来た。

「さうだ。此處だ、中學時代に彼女と行會つたのは。して見ると、すぐ近くに彼女の家はあるの

だ」

彼は両手をポケットの内に入れて急ぎ足に歩き出した。愛人の家、我全宇宙にも更へ難い戀人の家だ。彼はその家を見つめた。彼女の家は南向の青垣を取つた家で、資産家ではなかつた。家運は段々下つてゐた。けれどもこじんまりとしてゐて綺麗であつた。南に椽があつて、そのそばに青桐が一本青々と茂つてゐた。庭には愛人の植えたのらしくダリヤの花が一株咲いてゐた。そして青桐の東には井戸があつた。彼は彼女の家を見つめてゐた。すると突然すらりと障子が開いた。戀は不思議なものである。不思議なものは機會である。だが之は熱した人々の戀する人々にはよく有る遇然な機會であつた。

彼の第一に目についた事は、いや、目についた事ではない、彼の頭にぐつと打寄せたものは彼女の姿より前に彼女であらうと云ふ豫感であつた。と、すぐ彼は肉體上に於て彼女の白い横顔を見た。面長な眞白い透通つたやうな色と、眞赤な唇、それに黒い彼女の髪であつた。今起きたばかりらしく、彼女の黒髪の二筋三筋が彼女の白い横顔をなぶつてゐた。彼女は手には——これは小時後に彼の氣のついた事であるが——揚子を持つてゐた。白い揚子を持つた彼女の手はそこに有つた齒磨粉

の中につき込まれた。そして、その白い粉のついた揚子は彼女の紅の口元へと持つて行かれた。彼女は静かに庭に下りて、井戸側へ歩いて来た。そしてちよつと下を向きながら、井戸の桁に手を掛けた。繩がズル／＼と動くと、桶が上つた。彼女はちよつと袖をよせてその桶を傾けると、清い水がザラ／＼とその金盥の中に落ちた。彼女は再び臺を下りて、前方に屈んで口を洗つた。そして丁寧に石鹼をつけて洗つた。洗ひ終つた彼女は金盥の水をあけて、手拭で顔と手を拭きながら立上つた。彼女の洗はれた顔は透明のやうだつた。そして、何を思ひ出したかちよつと頬笑んだ。その時朝の太陽は彼女を正面から照らしてゐた。彼女は向ふに行かうとしたが、ダリヤの花の側に立つて、その花を指先で觸つてゐた。その俯向いた顔が此方を向くと、眞黒い大きな黒眞珠のやうな光澤を持つた目が彼の正面を射た、彼はぞつとしたが大膽に彼女を見つめると彼女は静かな笑み、いや全く静であつた、目元だけで笑みながら、ほつと顔を赤らめて、目禮して、すつと後を向いて、元來た塵敷へ入つて行つた。

彼はほつとしながら家の方へ歩きながら考へた。

「實際これは不思議な機會であつた。何と云ふ不思議な機會だ。美しい人だ。美しい、全く美しい

世界中にも彼女のやうな美人は多くあるまい。自分は彼女を愛す。自分は何事があつても、彼女を愛す。そして、私は彼女の一言、たつた一言でいゝから、受けたいものだ。『妾は貴郎を愛します』と』そして彼は彼の家へ入るまで絶えず彼女の事を念頭に考へて見た。

(二)

彼が、彼の家の石橋まで来たとき、ふと冥想から呼び起された。ガサ／＼と言ふ下駄の音がしたので振返つて見ると、それは隣の眞面目な百姓であつた。彼はちよつと帽子に手をかけて頭を下けると、眞赤な日に焼けた顔の、偉大な體格をすつと下にさげ、中古手拭をさげてにつこりして、殆んど調子外れのやうな大聲で言つた。

「いや——哲雄さ、歸つたかね」

「え、夏休なものですから」

「よく、歸らしやつた。健康で結構だつた」

「え、有難うござんす」

「彼方は暑ついまい」

「暑いのはなんのつてやり切れませんよ」

「阿母がよろこぶすら。早く顔を見せるがいゝぜ。俺あ之から田の水見に行く所だ」

かう云ひ放つて、哲雄がちよつと帽子に手をかけた時にはもう二三間行つてしまつた。哲雄はちよつと郷里の人の何時に變らない質朴さを感じて快感を覺へた。「だが」物事を考へる癖のついでに哲雄の頭にはこんな考へがすつと通り過ぎた。

「だが、彼等は何んな事を考へ、何んな事で煩悶してゐるのであらう。彼等の理想は？ 彼等の理想は金を貯める事と、平安に一生を送る事だ。彼等は純だ、質朴だ。憎む可きものには無い。さうだ彼等は精神生活に入つてゐる人間では無い。あゝ、いふやうな質の人は比較的大多數を占めてゐる。そして、平安な心で一生を送る事が出来るであらう」

彼が二三歩庭に入つた時に犬がワン／＼吠えたが、彼だと氣づくとも尾を振つて、うれしさうに飛びつた。彼は母に會へると思ふと何となくうれしかつた。父親は彼が十一歳の時腦溢血で失くなくなつてしまつたので、それから後は若い母一人の手に依つて育て上げられた。家は相當な財産もあつ

たので大部分、いや殆んど凡てを小作人の手に渡し、母は一人の婢を置いて、針仕事したり、野菜物を作つたりなどして暮してゐた。此の世界にたつた一人限りの母、限りなき母の愛、彼は母を愛してゐた。自分一人を育てる爲に。それが母の希望の凡てであつた。善良な母、あらゆる慾望、自己の凡てを犠牲にして子の成長を待つ婦人、それこそ眞に清い人である。最も神聖な人である。

彼は高まり來る感情をじつと抑へて敷居を跨いだ。

「行つてまいりました」

だが母が氣の附く前に、三十五六の一人ものの婢女が見つけて叫んだ。

「哲ちゃん。上様、哲ちゃんが歸りました」

婢は哲雄の幼年時代から今まで愛してゐた一人ものの女である。容貌はそんなに悪くはなかつたが何處か子供のやうな處が有つた。何故か彼女には亭主が無かつた。それが不思議でたまらなかつたので、「何故良人を持たないのか」と聞いて見た事もあるが、何うしても理由は話さなかつた。唯だ「男にはもうこり／＼だ」と云つたばかりだ。理由は解らないが、何か男の事で、非道い目に會つた事は事實である。彼女は「たき」と云つた。彼女は飛出して來た。そしてうれしい時に現はす、彼女

の美しい、大きな目を開いて、

「まあ、大きく。そして立派に」と云つた。

と、急しうな衣摺れの音がして、戸がさらりと開いて、母が現れた。母の顔は大分老けて見えた。そして、わざと眞面目な顔をしてゐるが、彼の側に近づくにつこり笑つた。

「歸つたか、よく、健康で」

母はかう云つたまゝだまつてしまつた。

だが婢ばかりは有頂天になつて忙しく喋つた。

東京は何うでござんすかとか、暑いのか寒いのかとか、何んな家に下宿してゐますかとか、お室の疊は何丈敷ですとか、掃除は度々しますかとか、東京では何が一番面白いんですかとか、其外色々な事を立て續けに聞いた。そして「家では丁度朝飯ですから兄さんの(哲雄の事)も拵へませう。買つて来たばかりの御馳走が有りますから」

彼女はかう云ひながら、ぴよん／＼飛廻つて膳を作つて呉れた。

朝飯を了まして茶を飲んでゐる時母はかう云つた。

「あゝ、それからちよつと忘れてゐましたが、昨日の夕方熊谷と云ふお友達が来てね、「小口君は御歸りになりましたか」と云つたが、まだ歸らないといふと、それでは明日上りますと云つて歸つたよ」

たきはすぐそばから口を出して、

「それは色の黒い、體格のいい人でしたわ。哲ちゃんとは全く反對だわ、色の黒い處も體格の良い處も」

哲雄は婢の口調の面白さに乘氣になつて、

「何、俺が體格が悪い。憚りながらこれでも柔道は初段だぜ、熊谷君にやなんぞ負けるもんか」かう、威張つて見せたので、母もたきも、思はず笑ひこけた。

哲雄は、自分の部屋に入つた後、机の掃除をしながら友の事について考へて見た。

「熊谷、自分は彼の事は記憶してゐる。彼は小學校時代から自分と關係の深かつた男だ。だが自分はあれから殆んど四五年の間會つた事は無い。自分はあの熊谷の如何なる點を想像したらば現在の彼に最も近い人間を想像する事が出来るのであらうか。あの色の淺黒い、脊の高い、鼻筋の通つた

厚い口唇に意志の力の縮もつてゐるあの熊谷を、あの破れた靴と破れた帽子とを着けた、無鐵砲な彼、怒つた時には「何糞」と叫んで、相手に飛附く彼、教師に反抗するあの熊谷を想像すればいいのであらうか。あの少年時代の熊谷と何の位變つてゐる人物を想像すればいいのであらうか。自分はあの級友四十名を相手にして格闘したあの熊谷を想像する。そして現在は彼は如何なる風采をしてゐるのであらうか。如何なる思想の所有者であらうか。だが、彼は今日來ると云つた。今數時間の後には自分は彼を見る事が出来る。自分の目前に彼は現れるのである」

哲雄は非常な興味を覺えて、少年時代の熊谷の事をそれからそれへと考へて見た。思出の糸を手繰り手繰つてゐる内に、最後には汽車中の疲が出て思はずとろくろと爲出した。彼は横になつた。彼はかすかに柱時計の九時を報ずる音は聞いたが、それから後はほつととしてしまつた。

「坊ちゃん」かうたつに呼ばれて眼を覺すと枕元に彼女はにこにこしながら坐つてゐた。

「兄さん、もう、二時で御さんすよ。熊谷さんが御出になりました。何うしませう」

「熊谷君か、早速通して呉れ給へ」

彼はむつくり起き上りながらかう云つた。

婢の立去る小刻みの足音の消えたと程無く、どつしりと底力の有る足音が流れて戸がさらりと開くと、熊谷が現れた。

丈の五尺六寸も有る、紺の一重物を着た男、之が哲雄が最初の瞬間に感じた事で有つた。

「失敬」

彼は重みの有る聲で云つて、二三步前へ進んだ。

「やあ坐り給へ」かう哲雄は見上げて云つた時、彼は熊谷の晃々たる眼光を認めた。彼の眉は濃く長く、鼻筋は通つて、色は淺黒かつた。そして少年時代に見覺の有る、厚い唇は彼の意志の力を示してゐた。彼は靜かに笑みつゝ云つた。

「久し振りだつたね」

彼はかう云ひながら額の汗を拭ぐつた。

「まあ吸ひ給へ」と哲雄は葉巻を進めた。

熊谷は葉巻をつけて吸ひ出した。白い一條の煙は上り初めた。哲雄も一本を取りながら云つた。

「久しく君に會はなかつたので見違へる位だつたよ」
熊谷は快活に笑ひながら云つた。

「いや俺は君を見違へたよ。自分の事は判らないものだね」

「君は少年時代から英雄主義だつたが今でもさうかね」

哲雄はかう聞いて見た。

「あゝ今でも英雄主義者だよ。そして弱者の味方だよ」

「弱者とは？ 労働者かね、無産階級者かね、それとも女かね」

「あゝ凡てだよ、弱い者の凡てだよ。僕は何うしたつて強者の敵だよ」

彼はかう云つて黙つてゐた。

哲雄は話題を轉じてかう云つた。

「暑いね、君はビールを飲むかね」

「飲むよ、大好き」

「じゃ、今日はビールを御馳走しやう」

と哲雄は婢を呼んで云ひつけた。

しばらくの間雑談して居る内に婢はビールを持つて來た。

「さあやり給へ」かう云ひながら哲雄は栓を抜くと、ビールは沸騰した。

「では馳走になる事にしやう」熊谷はかう云ひながらビールをコップに注いで、一口ぐつと飲んだ。一口飲んだ後熊谷はかう云つた。

「君は大學生だね、僕は労働者だよ」

「労働者、君は好きかね」

「俺は好きさ。それは自分の愛する弱い者の爲なのだ。俺は労働者の味方だ。そして女のね」

「君はよく女と云ふ、何かあつたかね」

かう、聞いた時熊谷は急に黙つてしまつた。そして彼の表情に明に變化が起つた。彼の男らしい肩はピリツと動き、彼の目は晃々と光つた。その眼光は燃えてゐた。そして哲雄の脳髓を射抜いた。哲雄も急に黙つて彼を見つめた。小時の間沈黙が続いた。熊谷は感傷的な調子で云つた。

「哲雄君。日本の女は悲惨だよ」

かう云つて又口を切つた。

「日本の女程悲惨なものは無からう。動物のやうに扱はれてゐるものは無からう。自分はその女、その最も悲惨に扱はれた一人の女を知つてゐる。それは俺の知つてゐる女だ。遠い親類先に當る女だ。僕は今日君に訴へよう。そして君からも考へてもらはう」
かう云ひながら、熊谷は残りのビールを飲み干した。

「一體結婚と云ふものは、君は何う思ふ。僕はかう思ふよ。自然は人類を生んだ。自然、ひかへれば神だよ。或絶対に偉大なる力、此の宇宙の有りと有らゆるものを生み、少しの狂ひもなく順序立て、廻轉して行く力、乃ち自然の力、云ひ更へれば神なんだ。その神は人類を生んだ。そして其人類に二つの性を備へさせたのだ。それが男性と女性だ。男性は男性的だ、力だ。女性は女性的だ。乃ち美だ。男生の力と女性の美と結合して新なる、より美しく力に富める子供が生れるのだ。その結合を戀と云ふ。戀は神聖なものでなくてはならぬ。そして神聖なるが故に不自然で有つてはならぬ。結婚はその戀を成就させる爲の手段でなくてはならぬ。故に自然で無くてはならぬ。えい、さうだらう？」

彼はかう云つて哲雄の顔を見た。

「僕の意見も同じだよ、同感だよ」

熊谷は更に續けた。

「そこでその結合乃ち結婚といふものは極めて自然に、極めて神聖に行れなければならぬ。不自然な結婚は罪惡である。不自然な性交は美しき子孫を生まぬ。子孫、子供を生むには肉體上の性交のみで決して美しい子供が生れるものではない。人間は靈と肉とより出来てゐるからである。靈は愛である。靈は肉よりも必要なものである。故に夫はその妻を愛し、妻はその夫を愛さねばならぬ。神聖なる靈の和合と肉體上の性交によつてそこに最も美しき、身心共に健全なる小兒を得る事が出来る。これは、結婚の自然なるは小兒の爲である。いや、それは自然のためである。乃ち神に對する務めである。そしてそれは自分自身の爲である。自分は少くともさう思つてゐる」
彼はかう云つてちよつと休んだ。

「所で、自分は彼女の事に話を進めやう。此處に、神の力に依つて、乃ち自然の力に依つて一人の人間が生れたとする。それは女の性を受けて來た。それが彼女だ。彼女は清い女だつた。美人とい

ふ程でも無いが目の清い口元の可愛い少女だった。彼女は無邪氣に幼年時代を済ました。極めて單純に少女は育つた。小學教育を受けた。彼女の父母は——これは彼女の父母許りでは無い、現在の日本の凡ての中年以上の人々の抱いてゐる思想だが——最も清き女といふものは決して世間を見てはいけないと思つてゐる。女の純潔を保證する爲には一日も父母の手許を離してはならないものと信じてゐる。女には教育の必要は無いものだと言つてゐる。女は人間では無いと彼等は云つてゐる。男に附屬する玩具だと思つてゐる。随つて彼女等には權利を與へ無い。彼等男子は女の代名詞を何といふか。代物と云ふでは無いか。代物は乃ち品物である。此の一言を見ても彼等の女を見る心が解るでは無いか。彼等家族制度の愚物は家、一家と云ふものを此上も無く尊重してゐる。一家の爲には凡ての物を殺す。彼等は犠牲と云ふ美しい名の許にかくれて女の生命を奪つてしまふ。

「彼女は何も知らなくて育つた。彼女は女に最も必要な性慾に關する知識は少しも受けてゐなかつた。彼女は結婚と云ふものが如何なるものか、何を目的とするものなるかを知らなかつた。教へられなかつた。だが月日は流れて彼女は十八歳となつた。彼女は依然として子供であつた。性的知識は少しも無かつた。性慾といふものは極めて卑劣なものとされてゐた。けれどもそれは一家の上

から見て重大な事であつた。家と云ふものを重く見てゐる父母等は一家の永續を計る爲には最も卑劣だとしてゐた戀が是非とも必要であつた。故に彼女を結婚させた。結婚、自分は結婚と云ふのさへ反對する。男は女を撰ぶ權利は有る。然し女は男を選ばない權利は無い。然し自然は、然し神の意志は同等の權利を與へるに有る。二人の結婚に依つて生れる小兒が女と男乃ち兩親に同程度にたよるのに依つても分るのでは無いか。然るに彼等は女に結婚に於て同程度の權利を與へてゐない。それは自然に反するものである。それは神の意志に叛くもので有る。

「美しき彼女、純なる彼女は命令された。彼女は何と答へてよいか分らなかつた。彼女は自分の行くべき道を知らなかつた。

「彼等の父は彼女に相談しない内に、相手の家族に相談した。そして彼等、惡むべき兩親等は二人で定めてしまつた。私は惡む可きと云つたが、彼等は惡むには餘りに無智なものである。憐むべきものだ。彼等老人等はそれが正當なる事であると考へた。何となれば一家と云ふものが彼等に取つては最高な存在で有つた。彼等は家と家との結婚をした。勿論それは彼女の結婚では無かつた。又兩親等の結婚でも無かつた。それは家と家との結婚であつた。家の奴隷となつた老人等は自分が自

分の行爲が如何なる罪惡であるか、又將來に於ける彼女の運命が如何に悲慘に成り行くかを知らなかつた。

「彼女は命令された時、如何に驚いた事であらう。如何に恥辱を感じた事であらう。そして何等の修養も無い彼女は目前に現れた結婚といふ事に就いて自分の取るべき道に途方に暮れたであらう。それは彼女に性的知識を教へなかつたからである。両親の子に盡す可き教育といふ義務を怠つたからである。

「だが、彼女は悲しんだであらうか。いや、彼女には結婚前に於て悲むだけの頭すらも無かつた。彼女がその運命の悲慘なるを思ひ、親の命令の残酷なるを思つたならば、氣付くだけの力があつたならば、彼女には未だ取る可き道が有つたらうに。彼女は淡い結婚といふ言葉を一種の憧れを以つて待つた。それは彼女が男を愛してゐた爲ではない。けれども憎んでは居なかつた。彼女は一種の虚榮心に似た感情の爲に何となく嬉しく、何となく恥しかつた。そして結婚とは如何なるものかといふ好奇心に動されて其目を憶病に似た淡いうれしさを以つた期待してゐた。

「だがそれは危険な事である。君、彼女許りで無い。現在の日本、いや多少なりとも世界に於け

る拜家主義者の家庭に於ては現在かゝる境遇に、かゝる危険なる期待を持つて、深き悲運の深淵に臨んでゐる幾百萬とも知れない娘が居るであらう。危険な事だ、危険な事だ。あゝ自分の目前にはそれが、かゝる憐れなる清い少女がちらつくやうな氣がする。

「だが結婚の日は來た。結婚には不必要な數多の酒肴が並べられ彼女は美しく着飾られて、多數の人々の前に出た。彼女は自分で何が何やら分らなかつた。嬉しいのやら恥しいのやら、人々が何と思つてゐるのやら、何事も分らなかつた。形式上の三々九度の盃は取り交され、そして殆んど初めて良人の顔を見る事が出來た。あゝ冒険、世の中にこれ程の冒険があらうか!! 一生涯苦勞を共にし生存して行くべき自分の夫の顔を結婚してから初めて見るとは!! 殆んど信じられない。信じられない冒険である。

「憐なる彼女よ。彼女は深淵に飛び込んだ。

「あゝ、その夜彼女は如何に侮辱されたか。自分は云ふ事さへも憚る。彼女は寢巻に着換させられて、寢室へ連れ込まれた。彼女は何事も知らなかつた。彼女は驚いてぶる／＼とふるへるのみであつた。だがそこには無智な性慾の圍りで有る夫がゐた。いや夫では無い。それは今日初めて顔を見

合せた男であつた。彼女に取つては全くの他人であつた。愛してゐない全くの他人であつた。その男は忽ち彼女に突進した。かの雄雞が雌雞に向つて飛びかゝるやうに。彼女は驚いて竦んでしまつた。何といふそれは悲惨な事實であつたであらう。驚く彼女は本能的に抵抗したが、だめであつた。男は彼女の二倍以上の力があつた。それに彼女は其の男の妻で有ると名づけられたから、その男の所有物で有つたから。

「それは性交では無かつた。結婚では無かつた。それは強姦で有つた。彼女の生涯は踏み躪られ、彼女の花は手折れてしまつた。彼女は如何に恥辱を感じたか。如何に驚いた事であらうか。最初の夜から彼女の頭は痛められた。

「性的行爲を最も劣等なものと教へられてゐた彼女は如何に口惜しかつた事であらう。そして彼女は苦しんだ。

「次の夜が来た。あゝ何と云ふ苦みで有らうか。男の毛だらけの骨張つた腕は彼女を抱きしめた。彼女はかつと逆上し、夫の腕に噛みついた。けれども駄目であつた。彼女は再び強姦された。彼女は三日目に家へ逃げて来た。父母の怒はそれよりも苦しくはなかつた。けれども父母は何と云

つたか。『お前は夫のもので有る。夫に何の落度も無いと云ふのに出て來るとは親不孝者である。行け!!』と。

「そして彼女、泣き臥す彼女を連れて行つた。男の強姦に任せる爲に。

「彼女は苦んだ。そして毎夜の恐怖の爲に瘠せ衰え、彼女の健康は破れてしまつた。彼女は病身となつた。けれども夫は彼女を許さなかつた。彼女は發熱し感胃と腦膜炎に冒され、炎の中にもがきつゝとう／＼狂ひ死にしてしまつた。あゝ、何と云ふ悲惨、何と云ふ悲惨なことであらう」

熊谷の男性的な目からは大粒な涙がほらく／＼とこぼれ出した。聲は涙に曇つて來た。

哲雄は上を見る事が出来なかつた。彼の拳は固く握られ、齒は固く食ひしほられた。哲雄の心臓は早鐘のやうで、顔はほつとほつて來た。急に彼の胸へある不思議な感情がこみ上げて來た。哲雄は思はずかう叫んだ。

「憐なる女よ!! 法律はその強姦者を罪しないか!!」

熊谷はどんと机をたゝきながら答へた。

「法律は罪しない。法律は、強姦者は罪する。然しその男は罪しない。いや(一段聲を高めて)法

律は男の味方で有る!!」

哲雄は叫んだ。

「何人も彼女を救はうとするものは無いかい!!」

熊谷は力に満ちた聲で云つた。

「いや、それは有る。自分は此處にゐる」

哲雄はじつと目を上げると、涙にぬれた炎の如き熊谷の目と行き會つた。二分、三分、哲雄と熊谷の視線は合つてゐた。二人の精神は同一となり、此の宇宙の靈氣と混合するので有つた。二人の顔は次第次第に近くなり、二人の眉と眉は摺れんばかりであつた。

熊谷は突然泣き出した。それは苦しい男泣きであつた。彼の男性的な魁偉なる體軀は悲憤の前にぶる／＼と顛へた。彼の肉體の力に満ちた曲線はあだかも憤り廻る怒濤のやうであつた。彼のゼイゼイしい涙聲は彼の涙と共に爆發した。

「おゝ彼女よ!! 彼女よ!! 自分は彼を愛してゐた。そして彼女の幸福を祈つてゐたつたのだつたに。何と云ふ悲惨な最後であつたらう。自分は最後の彼女の臨終の床に立つてゐた一人だつた。彼

女の美しき顔は見る影も無くやつれてしまつて、彼女の髪の毛は熱の爲に抜けてしまつてゐた。あゝ今でも自分は目の前に彼女の顔がちらつくやうな氣がしてならない。彼女の目は眞赤く、そして力なく、すやすやと眠つてゐたつた。時々彼女は目をさました。そしてぶる／＼と身振ひして枕許にゐた良人の眼と出合つたとき彼女は手を上げて叫んだ。青白い透通るやうな手を。

「悪魔奴!! 悪魔奴!! 妾を殺した悪魔奴!! 熊谷さん!! 何うか、其悪魔を殺して下さい!!」と。

「その時、私の心臓は破裂したやうに感じた。俺の全身の筋内はぶる／＼と振へた。俺は夢中になつた。自分はかう思つた。

「あゝ、敵を討つてやります。私は、私の一身を犠牲にしても貴方方女性の味方になります。そして此の呪ふべき家族制度の悪魔を打破してやります」と。そして私は全身の憤怒に顛へながら、其の良夫の顔を睨みつけた。さながら魂が自分の身體から抜け出る程の力を籠めて。そして自分は叫んだ。

「行け!! 悪魔奴!!」

「そして、私は彼は飛びかゝつたが、その時そばにゐた良人の父は自分の肩をおさへつけた。そし

て自分は大勢の人々の爲に室外に出された。それから二時間の後彼女は死んだのだ。あゝ彼女の魂よ！ あゝ彼女の靈よ、永久に幸福なれ。熊谷は此の力を以つて、この力を持つてかゝる悪魔を殺さずには置かない……………」

彼はかう云つたまゝ深い感動のためにぐつたりと疲れてしまった。彼はテーブルの板をガリ／＼と握つた。

熊谷は哲雄の手を握つた。

「小口君！ 僕は一生労働者と憐れなる日本の女性とのために盡すつもりだ。たとへ此の身はその爲に亡びても……………」

一時間の後熊谷は去つた。

(三)

二日の時日は單調に過ぎた。

三日目の朝彼が起きたのは朝の八時頃であつた。眞夏の太陽はもう強く輝いてゐた。

食事の時母はかう云つた。

「哲雄やあのちよつと今日は用事があるがね」

「何？」

「母さんの頼んでおいた着物が、お前ののだがね、もう出来たか、さよちゃんの處へ行つて聞いては呉れないか。母さんが拵へてやるのだつたが、他にお前の羽織の拵せるのがあつたから」

かう云はれた時に彼の全身の血はほつと沸き上つたやうに感じた。そしてほつと赤くなりながらけれども力めて平氣を裝つて立上つた。そして、そこにある帽子を取つて出掛けやうとした。

「悪いけれどもね、たきが今日用事で他處へ行つたからね」

母はかう附け足して言つたが、その時はもう彼は戸の外に立つてゐた。

「何といふ氣持だ。何と言ふ感情だ」彼は心の中でかう叫んだ。

「何といふ機會だ、何といふ喜びだ。自分の血液は何うしてかう踊るのか。何うしてかうおどおどするのだ」

彼はほつと熱に浮かされたやうな氣で歩きながら考へた。

彼が青垣の處まで来た時、内から二人の男が出て来た。一人はでぶでぶ太つた、商人風の男で、麥桿帽を頭に着けてゐた。何だか見たとのあるやうな気がしたが急に思ひ出す事が出来なかつた。それに一人はみさ子の父であつた。何だか哲雄は彼を好く事が出来なかつた。そして哲雄の横を通つて二人は出て行つた。みさ子の父は哲雄が帽子に手をかけて頭を下けるとちよつと會釋したが、でぶでぶ太つた男は横目でじろりと哲雄の顔を見て行つてしまつた。その目には輕侮と卑劣の色があつた。何と云ふ高慢な奴だらう、哲雄はむつと癪に障つた。

「何といふ奴だ。あの目は永久に自分の敵といふやうな顔をしてゐる。何だ、あんな奴」彼は思はずかうつぶやいた。

だが、忽ちにして不快な感情が消去ると、不思議な感情が彼の心に油然而として涌き上つて来た。何といふ不思議な感情であらうか。それはわく／＼する心臓の鼓動と若き者の熱情の叫であつた。永き間、それは實に永い間であつた。彼は彼女を愛してゐた。少年時代の愛情は今や強烈なる戀の炎と變つてゐた。大なる機會の前に立つた哲雄はその機會を如何に捉へるかを感じた。いやかう云ふよりも自然的に、つまり、彼の子供が競走の時出發點に立つて今か今かと出發の號砲を聞く

に似てゐた。

彼は格子戸の前に立つた時、女持ちの下駄が目に入つた。下駄は美しいものである。不思議に女の女持ちの下駄は誘惑的に出來てゐる。彼の紫の下駄の緒、細い緒は乃ち女性的である。そして薄い足駄、それは、凡て女性的である。女性の美はその曲線と色彩に在る。

彼は彼の目が、目の神経がそれを感じたとき彼の心は誘惑された。そして彼女が、あの美しい、そして大きな瞬にじつと無限の悲みを含んだ彼女が、一人であるのであるといふ事、一人だ、一人限りでと云ふ事に気がつくると彼の心に急ち希望と歡喜に似た血汐がさつと涌いたが、その感情と殆んど同時に躊躇の感情のために足がかすかに頭へ出した。だが戀と云ふものは神秘なもので、そして戀する人の心と云ふものは、戀と云ふものは、不思議な力のあるものである。戀は理屈では無い。そして戀の扇は中々開かないものである。苦い女性と男性の間に一種の不思議な感情、それは熱病人に似た、感情が起ると戀の芽生えとなるけれども、眞の戀の實行期に至るまでは中々長いものである。愛の神は惱める二人の若人に、男女に、その熱病に似た、強き戀の熟するまでは中々その扇を開いて呉れない。けれども一度戀の扇が開れた時二人の戀人は怖しき勢を以つて慕進するもので

ある。

一五六

彼は思切つて戸を開けた。チリチリと鈴が鳴つた。

「今日は」

彼は云つたが答へがなかつた。

又中音で、

「今日は、おるですか」

けれども答は無くて、彼はかすかにある音を聞いた。それは静かな音であつた。静かな静かな、すゝり泣きの聲であつた。それはいつも彼女の居る四疊の部屋から洩れるのであつた。何事だ。哲雄は出来るだけの注意を傾けて食るやうにその泣き音に聞入つてゐた。彼女だ——哲雄はかう思つた。何といふ悲しい音だ。けれども何といふ快感を起させる音であらう。我愛する彼女は何を泣いてゐるのであらうか。何事か直ぐ前に起つたのである事を思つた。何かあつたにちがいない。すると哲雄の興奮した頭脳にさつと電光のやうな速力を持つて閃めいたものがあつた。あの不快な男!! 萬一にも彼奴が!!」彼はかう思ふと怒が心頭にむくむくと起つて來た。

「今日は!!」

今度は前よりも高音に言つた。

するとさつとした静かな衣摺れの音がすると彼女の清い聲がした。

「はい、誰ですか」

「僕ですよ」

けれどもその時は哲雄はすっかり上氣してゐた。彼の全身を熱い血汐が駆けすり廻つた。

すると、彼女ははつと自分の聲を聞き分けたりしかつた。

「誰? 哲雄さん?」

「え、僕です。開けて下さい」

けれども、彼女はじつとだまつてゐた。明らかに彼女は混亂したのだ。暫は静かに、無理に氣を落ちつけやうと思つてゐたらしかつた。けれどもそれは永くは續かなかつた。深い呼吸、若い女の呼吸と共に彼女はかう答へた。

「お入り下さい」

彼女がこれだけの決心をしたのは非常な努力であつたらしかつた。そして其の間に色々な意識が起つたり消えたり戦つたりしたらしかつた。けれども哲雄はもう上氣してゐた。男性の本能である突進の意志は忽ち起つた。

「ごめん下さい」

彼はかう云つて下駄をぬいで上つた。

入口の戸から次の彼女の室の戸をさつと開けた。

彼が四疊の部屋の戸口に立つた時第一に目についたのは、最もこれはほんの瞬間ではあるが、机に蹲くまつた女性の腰から脊にかけての美しい曲線であつた。哲雄の興奮し切つた目に、次の瞬間にはそのぶるぶると顔へてゐる曲線を追つて行くと、漆のやうな髪の毛が動いて見えた。手で手布を持つてその目にあてゐるた。そして全身は悲みの爲にぶる／＼と顔へてゐた。

「御免下さい」

哲雄は立ちながらじつと彼女を見つめてかう云つた。

彼女は顔を上げた。

お、何と云ふ美であらう。何といふ藝術、神の藝術の何品であらう。世の中の宇宙の凡ての美より女性の美は美しい。そして、美人はその笑ひよりも悲みに於てその美を發揮する。彼女の目、何といふ美しい目であらう。二重瞼の、大きな、そして怖れるやうな、物を云ひたいやうな、聡しいやうな、をすをすしたやうな、何か問ひたいやうな目は美しい。美人は目に依つて生きる。そして涙に濡れた目、黒真珠のやうな目よ。

哲雄の顔をじつと見たその顔は若い血汐の高潮の爲にさつと赤くなり、その目の底には何物か燃えてゐた。

戀は神秘である。そして盲目である。或人はかう云ふ、戀は盲目であつてはいけない。冷靜でなくてはいけないと。けれども戀の美は盲目にある。眞に戀する者、それは盲目である。戀の生命は盲目にあるのだ。そして二人は、戀する二人は此宇宙に他に何物をも認めない。宇宙は二人の爲に作られたものでなくてはならない。總てのものを忘れてしまふ。哲雄は母の要件を以つて來た。けれどもそれは口實に過ぎなかつた。さうだ。彼に取つては口實に過なかつた。そんな事は何うでも可い。たゞ戀する爲の方便であつた。戀は神秘である。そして戀する人々は言ふ事が出来ない。苦

しい、苦しい思ひをして行會つても、いや、強烈な戀となる程言葉が出ない。

哲雄は無言であつた。そして彼女の視線とびたりと吸いついてしまった。二人は無言であつた。長い間無言であつた。

何と云ふ長い長時間でそれは有つたらう。その間に太陽は出でては入り、入つては出でたやうに感じた。

永い沈黙の後彼女の大きな涙に濡れた目は光り、そして薔薇のやうに赤い彼女の唇はぶる／＼と何か云ひたけに顫へた。そして、とぎれとぎれにかう云つた。

「何か………御用ですか」

何と云ふ質問だ。何と云ふ。けれども之は彼女の心の叫ではなかつた。彼女の心の叫では無かつた。そして此の質問は明らかに彼女自身でさへもそれはたゞ形式上の言葉に過ぎないと言ふ事を感じた。そしてこの質問は、哲雄に取つても、それは適當なものではなかつた。哲雄はそれには答へず、かう云つた。

「何うしたんですか。御氣分でも悪いんですか」

彼女の頬には又涙が傳つたけれども、それは歡喜に似た涙らしかつた。
「お坐り下さい」

彼女は氣を落つけながらかう云つた。

哲雄はかう云はれて自分が立つてゐるのに氣がついて坐つた。人間は坐れば冷靜になる。これは事實である。同じ力、同じ度量、同じ智識の者が議論を戦はすとき、坐つてゐるものが勝利者だ。これは事實である。

哲雄は坐つた。そして、入つた時より幾分か冷靜になつた。そして自分が今來た母の用事について考へた。

「僕は今日あの着物の事で來たのですが、けれども彼はかう云ひながら口籠つた。

「あゝ、あの着物ですか。あれは出來てゐます」

さよ子は立上らうとした。

けれども哲雄はかう云つて止めた。

「いえ後でようござんす。それよりも、何うしたんですか貴女は。御氣分でも悪いんですか」
一旦少し冷靜になつた感情の波は再び押し寄せて來た。彼女の顔は、段々悲しさうに青くなつて來た。

「氣分は、妾、悪くはございませんよ。けれども、そんな事は御聞きなさないで下さい」

「何うしたのですか。何かあつたのでせう。貴女の身の上に關係した事でも」

「さよ子は何事をか言はうか云ふまいかと、苦んだ。」

「えい、ちよつと、けれども、別に大した事でもありませんでしたよ。つまらない事ですわ」

けれども此辨解は明瞭に分つてゐた。彼女のきつと青くなつた顔つき、彼女の憤つた心を奥に隠してゐる顔色は明らかに表れてゐた。

すると忽ち哲雄の心には憤に似た感情がむくむくと起つた。それは強烈なる彼女に對する愛であつたのだ。彼はもう黙つてゐられなかつた。哲雄の目には涙が浮び、目は燃えて、かう叫んだ。

「さよ子さん。僕は貴方を愛してゐるんです。愛してゐるんです。私は全世界の凡ての誰よりも貴方を愛してゐる。貴方と一緒になら私は死も怖れません。凡ての人幾千の人間とも戦ふ事が出來ま

す。これ程私は貴方を愛してゐる。それを貴方は偽つてゐる。私に偽つてゐる。何うか聞かせて下さい。今日何事が起つたか、貴方の涙の原因が何であるかと云ふ事を……」

さよ子の心臓は高鳴つた。そして、彼女の感謝と愛とはその極限に到した。彼女はぶる／＼と顔を顫はせ、涙と共にかう云つた。

「私、私、嬉うございます。私は感謝致します。許して下さい。私は貴方に偽りました。私は、貴方を愛します。けれども、妾が貴方の愛を受けるだけの人間であるかを疑ひます。私は不幸なものでございます。妾は、不幸なものでございます。……」

けれども、さよ子は、さよ子の言葉は此處でとぎれてしまつた。そして、又泣入るのであつた。「何うしたのです、それから」

哲雄は熱誠を籠めて云つた。

さよ子は續けた。

「妾は小さい時分母と別れました。そして父は酒の爲に身を持ち崩しました。私の家は不運です。私の家は零落致しました。父は益々酒にひたります。そして、或高利貸から借りましたお金が今で

は大分多くなつてゐます。父は負債の爲に苦しみます。そして私を……私を賣らうとしてゐます」

哲雄は何者かに胸を打たれたやうに感じた。彼はがんと頭に何者か響いたやうに感じた。そして叫んだ。

「えつ、何ですか、貴方を、賣らうと、賣らうと」

けれども、それは事實であつた。

「ええさうです。私を藝者にしやうとしてゐます。私は女學校の教育も受けたのですけれども、他にも何か取る道はありますけれども、父は一時に澤山金が入用です。でないに金貸は父を告訴すると云つてゐます。そして、怖しい權幕です。そして、期間はもう二三日に迫つてゐます。今日も今その男が來ました。そして、何と云つたか、想像して下さい。何と云ふ侮辱を父と私に加へた事でせうか。そして何と云ふ暴力を私に加へたでせうか。私は人間です。それに私は物品扱ひにされました。そして、父は最初の内は私をかばつて呉れましたが、終々其の男に同意しました。そして賣笑婦の口入をする男の處へ今出て行きました」

「今行つた男、あれですか。畜生奴、惡魔め、人鬼め」

哲雄はかう叫んだ。

「さよ子さん、しつかりしてゐて下さい。私は貴方を愛します」

彼女は答へなかつた。じつと黙つてゐた。

哲雄はすつかり感激して、そして言つた。

「何と言ふ世の中なのだ。世の中の人金は金で束縛されてゐる。幾多の不道德も幾多の罪惡も金に依つて償はれ、金の爲に生ずる。そしてその金は不公平に分配されてゐます。私は貴方を愛してゐる、生命にかけても愛してゐる。金、金力、そんなものは何です。けれども、何と云ふ不甲斐ない事でありませう。私には今それを作るだけの力が無い。私が學校でも出てゐたら、何とか方法もつくでせうけれども」

かう云つたとき、彼女の表情には變化が起つた。眉はつり上り、きつと結んだ口唇は憤りに似た決心を示してゐた。

「いえ、私を愛して下さいませう。私は貴方に愛される資格の無いものです。そして、……」

哲雄は言葉を遮った。

一六六

「何を言つてゐるんです。愛します。愛します。私は、貴方がたとへ、何んなであらうとも愛します」

けれどもさよ子は顔は少しも嬉しさうではなかつた。そして低い聲で言つた。

「私を愛して下さいますが、それ程。けれども私何だか苦しいんです」

「何をそんなに心配するのです。強くてゐなさい。強くてゐなさい。それに、決定したと言ふのは無いでせう」

「えい、決定したのではないけれども、今夜ですから」

「強くてゐて下さい。ね、ようござんすか、強くね」

そう云つて哲雄は黙つた。そして彼女も黙つた。彼女の顔は眞青く、そして、もう疲れ切つたらしかつた。けれども眼は光つてゐた。長い沈黙の後彼女は囁くやうに言つた。

「ほんとうに、貴方は私を愛して呉れるでせうね」

「えい、愛しますとも」

哲雄は云つた。彼女は言葉を繼いだ。

「私は強いんです。私は強くなりますわ。何んな事が起らうとも。けれどもね、ひよつとすると、もう行會へないかも知れせんわ……あちらへ行くやうになれば……」

哲雄は再び悲痛の思に捕れた。

「いや、もう一度来て下さい。行會ひ度いのです。いつでもよいのです。今夜でも明日の晩でも。僕はあの離れにゐるんですから、……」

かう云つた時に、哲雄は熱いを感じた。彼女の顔にはさつと紅葉を散らした。

「いゝえ、上らなくても」

哲雄は云つた。

「いや貴方がもしも行くやうになつたら、もう行會へませんから、来て下さい。垣の處へ来て呼んで下されば分ります」かう云つて哲雄はきつと彼女を見つめた。

彼女の血汐は彼女の體中を駆けずり廻り、彼女の頬は輝いた。そしてその美しい目が、哲雄の顔をじつと見た。そしてその目の中には無限の謎があつた。頼むやうな、縋るやうな、あゝ戀する女の

目と云ふものは、彼女の魂はその目の中にとろけてゐるやうであつた。腫は廣く廣く展いて、恍惚の状態にあつた。若き二人の間には情の火花が飛んだ。二人の生命は遙か彼方に。そして混合するらしかつた。

永い二人の恍惚は續いた。そしてその目は彼女の返事であつた。明らかに彼女は彼に同意した。

「お歸り下さい」彼女はかう云つた。それは永い後であつた。哲雄は夢中の中に立上つて、無意識に着物、彼女の作つた着物を手にして外に出た。

空には眞夏の太陽が燃えて地上の凡てのものは焦けるかと思はれた。

哲雄は極度の興奮と、熱さの爲に夢中になつて歩いた。

暑さでほつとした頭の中で熱狂的に色々の事を考へて見た。

「彼女、我戀人は自分を愛してゐるんだ。己の全生命、私の生命、私の凡ての生活、私の凡て、それは彼女だ。そして彼女は自分を戀して呉れた。戀して呉れたのだ。私は嬉しい。いや嬉しいけれども私の感情は何といふものだ。さうだ、己は苦しんでゐるのだ。己は煩悶してゐるのだ。何と云ふ感情だ。己は憤つてゐるのだ。さうだ。彼女の敵を憤つてゐるのだ。何と云ふ世の中だ。自分は

金力を否定する。金力の敵だ。敵だ。けれども金力、そんなものは何だとは思ふけれども、彼女を奪つて行く悪魔は何んだ。それは金力だ。金力だ。何と云ふ世の中であらう。この世に正義があるか、神があるか。正義と神があつたとしたらば、何うして、神聖な少女、純なる人間を苦しめて横暴なる金持を苦しめないのだ。神はあるのか」
彼は空を仰いだ。

「神よ!! 神よ、何うか教へて呉れ。神はあるのか、そして神は正義の味方なのか、純なる少女、聖なる人々の味方なのか」

いや、自分は神の在る事は信する事は出来ない……………。

何だか不安なやうだ。もう一邊、自分に問ふて見ろ、

「哲雄よ、汝に問ふ神を信するか……………」

「何だが、神は、神は、……………存在するやうな氣がする。

「いや、けれども、單なる神では無い。自分の思つてゐるもの、自分の思つてゐる神は人間の形をした偶像では無い。神とは人間以上の或る生物でもない。乃ち神と云ふものは宇宙凡てを廻轉し

自分に斯かる考へを起させるものを神だと思ふまでの事だ」

かう云つた時、哲雄の心にはある神秘的な感情が起つたが、忽ち彼の心は又不安に、そして憤怒に成り出した。

「お前は神は存在すると云つたな。けれどもよく考へて見ろ、神が存在するかを……。……。お前は大勢の人々の前に於て『神は存在する』と果して言ひ得る事が出来るか。自分に、自分の良心に恥ぢないで『神は存在する』と叫ぶ事が出来るか……。……。何うだ出来まい。それなら、存在しないと叫ぶ事が出来るか。大なる確信を以つて言ひ放つ事が出来るか。何うだ出来まい。いや己れには出来ないのだ。何と言ふ人間だ。何と云ふ人間だ」

彼は何處を歩いてゐるのか分らなかつた。彼は知らぬ間に畑の中へ入つてゐた。けれども狂者のやうに突進した。そして土堤にけつまづいてどつかりと打仆れた。

彼の放心した心は過ぎ去つて、現実的な思想が起つた。

「何うしたと云ふのだ。おれは何うしたといふのだ。何といふ狂ひじみたやり方だ。お前は此んな處へ來てゐるではないか。これは家へ歸る道ではない。まるつきり反對の路だ。そして、いつか

畑の中へ入つてゐる。何と云ふ恐るべき性質なのだ……。……」

けれどもかう云つたとき、彼の亂れた心には恍惚状態に於けるあるものがあつた。彼は悲みの中の恍惚、狂暴の中の恍惚に酔つた。

「さうだ」彼は長い時間の後かう云つた。

「彼女は屹度來る。自分は彼女が何事もなくて居る事を希望する。何うか、そのまゝで居て呉れ、我愛する少女よ。美しき花よ、私の女王、私の花よ。何うか、そのまゝで永久に私を離れずに居て呉れ。今夜彼女が來る。私は何事もなくて來ない事を望む。彼女よ、我戀人よ、何うか、平安であるて呉れ。貴方の悲みは自分の心に釘を打つ。何うか何事もなくいつまでも純で、少女の誇を失はず祝福されてゐて呉れ」

彼の心はぐつたりと疲れた。汗は全身を濡らした。

彼は感激し、あらゆる思想を嵐の如く吹き起して、そして幾里かの道をぶらつき廻つた。家へ着いた時、彼の顔は眞赤で、目はぎらぎらしてゐた。

母は彼を見て驚いて叫んだ。

「何と云ふおまへは様子をしてゐるのです。暑さにあたつて病氣になつてしまひますよ。何處を歩いたんです。もう四時ですよ。汗でぐしよねれになつてゐますから、早く着物を更へて、晝飯を食べたらすぐおやすみなさい」

けれども彼は答へなかつた。そして、そのまゝ自分の部屋に入つて、半時間ばかりはぐつたりと休れてゐた。

(四)

夕方まで何と云ふ永い時間であつたらう。

午後六時赤い夕日は日本アルプスの彼方に沈んだ。

同じ太陽か或は異なる太陽か、それは永久に解けざる謎である。同じ晝か、或は異なる晝か、それも解けざる謎である。同じ夜か異なる夜か、それは永久に解けざる謎である。同じ月か異なる月か、それも永久に解けざる謎である。謎は永久に解けざる謎である。謎の中に謎がある。夜の中に月がある。星がある。月の中、星の中に夜があるのか、夜の中に月があり、星があるのか、之も又

永久に解けざる謎である。

哲雄は夕食を済ました後、一人離坐敷に坐つた。いや、夕食は済ましたと云ふ程ではなかつた。彼は殆んど食べなかつた。たきは「哲ちやまは今日は何うかしてゐますわ」と云つて笑つたが、母は心配さうに聞いた。

「お前、風邪でも引いたのかね。お薬をお飲みなさい」
けれども哲雄はかう答へた。

「いゝえ、ちよつと気分が悪いだけですから早く休みませう」さう云ひながら、飯を残して離れに來た。

彼は彼の居室、離へ來て机の前に坐つた。室内は暑苦しかつた。彼は戸を開けた。外は涼しい夕方の風であつた。虫の聲がした。

けれども、その室内の暑苦しさを、外の涼しさを、虫の聲などは殆んど彼には分らなかつた。い

や彼は戸を開けたのさへ無意識であつた。極度に興奮した彼の神経は不安さや、ほつとした嬉しさや、悲みや、憤りや、其他色々な刺戟の前にふるへてゐた。

「彼女は来るだらうか」

哲雄の心にかう云ふ質問が起つた。「来るであらう」彼はかう思つた。「来ないで呉れ」彼は又かう思つた。来るやうでは縁な事はない。何うか、何事も無く来ないで呉れ。逆境の淵、墮落、腐敗に身を賣るやうな事が無く、来ないで呉れ。平安に暮せるやうに、来ないで来れ。

かう云つたが、「来るぞ」と云ふ囁が起つた。「いや来ない」彼はかう呟いた。が忽ち彼の目の前には幻が浮んだ。其れは彼女の泣きはらした「妾はもうだめです、賣られてしまいます」と云ふ顔であつた。「いや来ないんだ」哲雄はかう云つて、その幻を打破らうとした。けれどもそれは無効であつた。そして彼女の泣顔がはつきりとして、そして幾つかになつた。その一つ一つが彼女の顔で、すつかり泣きはらした目をしてかう云つた。「妾は賣られてしまひます」

彼はその恐しい想像から逃れる爲にそこにある本に手をかけ、じつとそれを取り上げて見た。けれども、殆んど一行も分らなかつた。「だめだ」彼は吐き出すやうにかう云つて、仰向にそこに寝て

見た。暫く、一時間も経つと今度は彼の思想が急にじつと懐つかしいやうな、わくわくするやうな気分になつて来た。けれども初の内はそれが何に原因してゐるのやら分らなかつた。

「俺は何うしたといふのか。何うしたと云ふのか。何うして自分は妙にわくわくした気分になつて来たのであらう。俺の心臓が急に熱い血汐を體中に配り出した。ぞつとする心持、何といふ心持だ……さうだ、自分は待つてゐるのだ。彼女の来るのを期待してゐるのだ。成立しかけた彼女との戀を眞に成立させたくなつてゐるのだ。さうだ、自分は彼女を愛してゐる」

時計は十一時を報じた。

不思議な不安さが彼の心に起つた。

興奮しきつた彼の魂は今度は極度に神秘に、そして冷靜になつて来た。彼は起上つて窓から外を眺めた。外は眞暗であつた。何と云ふ不明であらう。灰色の物體は凡てが隠されてゐた。そしてそこには一本の杉の太木があつた。彼はじつとそれに目を呉れて見つめてゐた。すると凡ての雜念が何處へかすつと消えてしまつて、ゆる／＼とした神秘的な觀念が次第に彼の頭に涌いて来た。哲雄は

ある神興の前觸を知つた。けれども、それが如何なるもので、如何なる性質のものであるかは知らなかつた。が、此の感覺は幾度も幾度も彼を訪れる事があるので、それに依つて次に來るべきある思索のあるを知つた。かういふある神秘的囁きはその人が最も眞面目に熱中してゐる時でなければ來ないものである。そしてそれには一種の甘さを伴ふものである。

「お前は何を待つてゐるか」

或ものが問ふやうに感じた。

「私は、……………彼女を待つてゐる」

彼はかう答へるやうに感じた。

けれども、「彼女を待つてゐる」と云ふか云はない内に、「いや凡てのものは、それはお前の錯覺だ」と云ふひびきが彼の頭に泌みこんだ。

「自分は何もしてゐない。自分はたゞ單に此處にかうしてゐるに過ぎない」と云ふ感じが起つた。そして、彼は一種の快感を覺えてその中に浸り込んだ。

ガタリ、と云ふ物音で、ふとその方を向いたとき、その不思議な觀念は去つてしまつた。

大分時間が経つ。來るのならばもう來さうなものだ。彼はかう思ふと居ても立つてもゐられなくなつた。彼はぐつと立上つた。そして椽に出て見た。仰けは空にはキラ／＼と星が光り、小川の音がざわ／＼してゐた。

彼は椽の上を行つて見たり、來て見たりした。

又行つて見たり來て見たりした。

凡そ二三分の内は椽にゐた。

彼のほつとした神經に柱時計が十二時を報じた。

彼はその音を聞くと無意識に庭に下りて、下駄をはいて、暗い青垣のそばまでふらく／＼と歩いていつた。いや歩いて行つたと云ふよりも、何者かに連れられて行つたと云ふ方が的つてゐるかも知れぬ。

彼は垣から外へ出て見た。けれども何の氣配もなかつた。が、五分ばかりすると、彼の鋭い神經に或一種の衣摺れの音と下駄の音とが聞えた。そのとたん、折雄の心臟は一つ大きく波打つた。そして、それは一種の音響を覺える程の大きさであつた。心臟から波打れた血汐は全身の血管を混亂

させた。彼はじつと目を見はつた。

「やがて静かな静かな下駄の音がすると、一人の少女、それはさよ子であつた、が現れた。彼女の白い緋は暗の中に白かつた。彼女はじつと立つて耳をすましてしばらくの間は何ものかに聞とれてゐるやうな様子であつた。

哲雄がじつと耳をすましてゐると、第一に明瞭に分るのは彼女の深い息使ひであつた。それは深く悲しさうな、然し何となく親い感じを起させる息使ひであつた。

暫の間彼女はじつと立つてゐた。長い／＼間であつた。何事にか躊躇し何事をか云ひだけに、又ためらふやうな息使ひをしてゐた。けれども彼女は云ふ事が出来なかつた。又二三分過ぎた。すると彼女の髪の毛はかすかにふるへて、思ひ切つてかう云つた。

「哲雄さん」

それは低い聲であつた。けれども鋭い聲であつた。

哲雄はじつと黙つてゐた。

再び彼女の聲がした。

「おるのですか」

哲雄はもう無意識に彼女の前に現れた。

彼女は「はつ」とかすかな叫聲を上げた。

「さよ子さん、僕です」

かう云ふと、彼女は前に進んで来た。そして無言であつた。

「待つてゐましたよ」哲雄は續けて言つた。

「早く出やうと思つたんですけれど」

「何うなりましたか」

哲雄はかう云つたが、答へが無かつた。

「何うなりましたか」

再び哲雄は聞いた。すると、彼女の悲みに満ちた息使ひを聞いた。そして彼女は顫聲でかう云つた。

「哲雄さんお別れに参りました」